

これはゾンビですか？
～純白の翼は飛翔する
～《完結》

nightマンサー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人と関わるのが苦手な青年は人とは異なる力を持っていた。

ある日その青年は一人の少女に会う。それが青年の人生を大きく変えることになる

……

注)これは以前、アットノベルスで連載していた『これはゾンビですか？』はい、天翼を振るうものです』の改良版です。

目次

プロローグ	1
第1話 出会い	7
第2話 襲撃	17
第3話 決意	27
第4話 介入	40
第5話 魔装少女	62
第6話 戦闘	81
第7話 戦闘Ⅱ	98
第8話 夜の翼	115
第9話 メガロ	137
第10話 ボーリング	161
第11話 再戦	178

第12話 犯人	202
第13話 約束	221
第14話 ゾンビ	233
第15話 短冊	243
第16話 ゲームセンター	264
第17話 アリエル	281
第18話 別れ	296
第19話 決戦	321
第20話 黒幕	347
第21話 終焉	359
第22話 それぞれの思い	376

プロローグ

「さーてとつ、最新刊も買えたり塾の先生には褒められるし、今日は運がいいのかな」
俺こと井之上飛翔（いのうえつばさ）はご機嫌だった。

塾の帰りにアニオイトで「これは〇〇ですか？」の最新刊がようやく出ていて買えたし、

塾では久しぶりに先生に褒められた。これだけでも今の俺には十分幸せだ。

ふと腕時計に視線を落とす。

「7時30分、ちよつと遅くなつたかな」

自分の周りを見ると家族連れや俺と同じ塾帰りと思われる女子高校生などがある。俺は彼女たちにわからないようにその場を離れる。

ああ、言っていないかつたけど俺女性恐怖症（自称）です。何でかっつて言うとお小生の頃、クラスメートの女子からいじめを受けたからなんです。そのおかげで女の人、特に同年代の人のことがとても怖いんです。

はあ、自分で言っていて悲しくなるな、こんな話はもうやめよう。

そうこうしていると信号が青に変わった。俺はそのまま横断歩道をわたろうと「危ない!!」・・・へっ?

咄嗟に横を見るとそこには大型トラックが突っ込んできており、当然人間の身体能力では避けられない。

ドガーーーーーッ

俺が最後に見たのはいつもより大きく感じた満月だった。

「うう、……………ここはどこだ?」

目を開けるとそこにはどこぞの貴族が住んでいそうなほど立派な部屋であった。

本棚やタンスは何百万もしそうなほど神々しいし、床には真っ白なカーペットがひか
れている。

そして目の前には山積みの書類のようなものに、これまた印鑑のようなものを一枚一

枚押している老人の姿だった。

「あのう」

俺はその老人に声をかけた。

「ああ、今忙しいんじや、ちよつとそこの書類取ってくれ」

ええ、なんか知らないけど………声かけたらなんか仕事手伝えとか……

「あ、はい……これですか？」

「おう、すまぬな」

「いえいえ」

とか思いつつも普通に手伝う。

まあ、雑用とかはどっかの21さんと同じくらいがんばってたしな。

「次はそこの本を取ってくれ」

「はい」

俺が手伝った甲斐もあつてか、数十分前まであつた書類はすべて片付いたようだ。

「はい、いつもよりだいたい早く終わったな、これも井之上君（……）が手伝ってくれたからじゃよ、礼を言うぞ」

「いえいえ、こういうことには慣れていきますしつて！どうして俺の名前を!!」

「はっはっはっ、そりゃ知ってるも何もお主をここに呼んだのはわしだからじゃよ」

「はいいい!!それどういことですか?」

「それはな、お前さんを転生させるためじゃ」

俺が転生……………マジで?」

「マジじゃよ」

「というと、あなた様は神様ということですか?」

「まあ、お前さんたちのいう世界ではそう呼ばれているそうじゃな。我が名は一万二千通りの……………」

「それ言っちゃっていいんですか?」

「……………」

そこで沈黙しちやうの!!

「まあ、名前はお主が呼びやすいのでかまわんど」

「……………じゃあ、無難に神様と呼ばせてもらいます。で神様、転生という話は…………」

「おお、そうじゃったな。お主は今さつき死んだのじゃよ、飲酒運転のトラックに轢かれてのお。それでさつきお主のデータを見たのじゃが…………」

え、もしかして俺なんかまずいことしたのか?

とそう思った瞬間、神様の目から何か光るものが…って

「どっとうしたんですか神様!!」

「いやな、グスン、ずいぶん悲しい人生だったのじゃなあと…」

「いやいや泣かないでください、いいこともいろいろありましたから!!」

「そこでわしの暇つぶしのために転生つというわけじゃ」

「さつき流した涙を返してはくれませんかええ!!」

めっちゃ感動してたのに一瞬で台無しにしてくれちゃったよこの神様!!

「で、どの世界がいいのじゃ？」

うーくん、悩むけどここはやっぱりあの世界しかないよな!!

「じゃあ、「これは〇〇ですか？」の世界でお願いします」

「まあ、お主ならそうすると思っただがなのう」

「じゃあ!!」

「うむお主の願いはかなえよう、しかし原作の知識は消させてもらうぞ、先読みされた行動を取られると歪みが生じてしまうのでな。あと能力を与えよう、じゃがどんな能力になるかわからんからのう、それでもほしいか」

「はい」

「ほう、迷いはないのじゃな」

「その能力で助けられる人を助けたいんです。もちろん役に立つ能力かわかりませんが……それでもあの世界でみんなの、ユーの足手まといにはなりたくないんです」

「その心意気やよし!!がんばって行ってくるがよい。ユーとやらと結ばれるとよいな」

「あっありがとうございます!!」

そう言ったとたん目の前が光で包まれた。

第1話 出会い

とある冬の日の夜、俺は一人の少女と出会った。
それはとても幻想的で、儂く、夢のような出来事だった。

俺の名前は井ノ上飛翔（いのうえ つばさ）。神様から新しい命をもらって15年。
来年の四月に高校生になる予定の中学3年生だ。

俺の両親は仕事の都合で海外に住んでおり、俺も両親についていく予定だったが自分
だけ日本に住んでいる。単に1人暮らししてみたいという俺のわがままだが。

今はマンションに一人暮らし。仕送りも適度にもらっているし生活には困ってない。
そして今俺は高校受験に向けて勉強中だ。

パキツ　カチカチ　カチカチ

「芯切れか、換えは…ないな。コンビニまで買いに行くか」

ここにきて

いつの間にか時計は10時と11時の間を指していた。

俺はジャンパーと財布を持って近くのコビニへ出かけた。

「以上で482円になります」

「じゃ、500円からで」

「18円のお返しです。ありがとうございます」

その言葉を背に俺はコンビニを後にした。

俺が買ったのはシャーペンの芯にファクタ、ファミキだ。

丁度小腹がすいていた所だしな、帰ってから食べるか。

そう思い踏み出そうとするとそこには水溜りがあった。

「そういうえばさつき雨が降ってたな」

ちよとど俺がコンビニに入ってから降り出した様だったので少し心配していたが、どうやら通り雨だったらしい。

「さてと、また降り出さない内に帰るか」

言うが早く俺は帰路を急いだ。

それから数分歩いてからだろうか、丁度公園にたどり着いたときだ。

ベンチに人影が見える。

「ん？こんな時間に誰だろう？」

腕時計を確認してみるとすでに時間は11時を過ぎていた。

不審に思つて近づいてみるとそこには一人の少女が座っていた。

月夜に映える銀髪のロングヘア、この日本には不釣合いの西洋風の鎧を身にまとつた美しい少女。

〔綺麗だ…〕

その一言に尽きる。飾る言葉なんて要らない、ただただ美しい。

『誰』

少女は俺に気づいたのか、俺に向かってメモを見せてきた。

「あ、えっと、俺の名前は井之上飛翔、君は？」

『ユークリウツド・ヘルサイズ』

「えっと、じゃあユーって呼んでいいかな？」

『かまわない』

馴れ馴れしいかと思っただけど了解してくれた。ちよつとうれしい。

ああ女性恐怖症はどうした!!って言いたい人もいるだろう。

あれから俺もがんばったんです。今なら同年代の人にも少しなら話しかけられる

……と思う。

『どうかしたの?』

「いや、なんでもないよ」

それにユーはとつても温かい感じがする。

「それよりユーはこんなところで何してるんだ」

『月を見てた』

「月?」

ユーに言われ夜空を見上げると綺麗な満月が輝いていた。

「確かに綺麗だな」

『月はいい。優しい光を皆に与えてくれる』

哲学みたいだな、と俺はそう思った。

「なあユー、どうしてメモに文字を書いて話すんだ？」

そう俺が聞くとユーは俯いてしまった。

もしかしていえない事情とかがあったのだろうか。声がもう出ないとか。

「ユーごめん、気に触るような質問しちゃて…。人に話したくないことなんていくらかもあるからな。ほんとごめん」

そう、俺にだって…

するとユーは少し驚いたような目をしてからメモを向けてきた。

『いい。気にしてないから。ありがとう』

「いいよ、ありがとうなんて、俺が聞いたのが悪いから」

『それでも』

そのときだ、ユーが震えているのに気づいたのは。

「ユーもしかして寒いのか？」

『さつき少し雨に降られたから』

そうかさつきの通り雨で……よし、

「ユー、今から起こる事は誰にも言わないでほしい。いいかな？」

『何をするの?』

「それは——」

こうするんだ、つと言つて俺は翼（・）を出現させた。

『!』

ユーも目を見開いて驚いている

そりやそうだ、ただの一般人が翼なんて出したら驚くなつて方が難しいだろう。

そうこれが俺が神様からもらった能力。

翼の名前は「天翼」、右に3枚、左に3枚の計6枚の翼からなっている。

色は白もびつくりな純白である。

「さてと、ユーちよつとこつちに来てくれるかな?」

『? わかった』

そういつてユーが近づく。うわあやっぱり綺麗だ、それに超かわいい。

つと、そうじゃなかった。

「じゃあちよつとじつとしててね」

『うん』

そう言つて俺はその天翼でユーの体を包み込んだ。

『とても温かい』

「それはよかった」

ユーと俺はしばらくこのままの状態を続けた。

『もう大丈夫。ありがとう』

ユーはそう言わなければずっとそうしてかもしれないくらい心地よかった。

「温まった？」

『うん』

そういうとユーはしばらく俯いてからまたメモを見せてきた。

『これからは飛翔って呼んでもいい？』

これには少々驚いた、確かに前世より顔とか容姿とかイケメンになっていたけど
まだこの世界で女性に名前前で呼ばれたことはなかったのだ。

『だめ？』

返事が遅いのを否定と感じたのかユーはそんなことを言ってきた。

「いや、女性に名前前で呼ばれるの初めてだったから、少しびっくりしただけだよ」

『「私が初めて…」』

「ユー？どうかしたのか、顔が赤いけど…」

『なんでもない』

「名前なら別にいいよ。ユーに呼ばれても嫌な気全然しないどころか嬉しいし」

「やばっ、と思いい口に手をしたが

『?』

最後のほうは小声で言ったから聞こえなかったみたいだ。助かった。

『じゃあ…飛翔ありがとう』

「どういたしまして」

ユーといるととても楽しいな。

それからも他愛のない話をして盛り上がった。でも楽しい時間は早く進むもので、時計を確認すると時間はもう12時を過ぎていた。

「ごめんユー、そろそろ帰らないと」

『行くの?』

そう書いたメモを向けているユーの表情は少し悲しそうだった。

「あ、あのさユー」

『?』

「ユーが嫌じゃなかったら、その、またここに来て話したいけど、いいかな」

『!!…私も飛翔と話したい、待ってる』

「ありがとう、あつそうだこれよかつたら食べて」

そう言つて俺はユーにファミOキを渡した。えつ、冷めているんじゃないかつて?

ふつ、さつき俺の天翼で温めていたから大丈夫…のはず。

「じゃあまたねユー」

『気をつけて』

そう言つて俺はその公園を後にした。

『〔飛翔、優しかったな〕』

そう言いつつ私は飛翔からもらったファミOキを食べる。

『「飛翔になら…嫌ダメ!!飛翔だって私のことを知れば…」』

そういうユ一の表情は無表情ながらも悲しい思いがにじみ出ていた。

第2話 襲撃

あれから2週間近くが過ぎた。ユーとはあれから毎晚会って話をしてる。いつの間にかユーと話をするのが一日の中での一番の楽しみになってる。

べつ別にユーが綺麗だからとか超可愛いかたまに話してる時に顔を赤くして俯くのが心惹かれるとかあと、あと……………

「たくさんありすぎて逆に困る!!」

『飛翔、何言ってるの?』

「え!! あつ、な何でもないよユー」

『?』

しまったああ!! つい自分のことに対して突っ込んでしまったああ!!

ま、まあ本当のことだし…問題ないか…な?

ああ、ついでに今の状況を説明するといつももの公園でユーと雑談しているのだ。月今日はほとんど隠れてしまっているため公園の街灯が公園を照らしている。

ふとユーに視線を落とすとユーは空のファミOキの袋を見つめていた。

「また買って来ようか？」

『いい』

G y u u u u u u u u u u u

「！」

何だ今の音は!!つと普通の人は思うだろう。

しかああし!!ユーと2週間もいる俺にはこれが何の音だか手にとるようにわかるのだ!!

ずばりこれはユーのお腹の音なのだ!!!

……………えつ、初めてでもわかるって?そんなことは知らん!!

「お腹減ってるんでしょ?俺に遠慮しなくていいからさ」「ニコッ」

『!!』

そういうとユーは恥ずかしそうに下を向いた。

「はうううう、お持ち帰りいいいいいいいい!!!」

!!!!!!

なっ何だ!!今変な声が聞こえた気が

…いや、気にしないでおこう。そうしないといけない気がする。

「じゃあ俺買ってくるから、少し待っててな」

コクコクッ

うなずくユー………やっぱ可愛い。

そう思いつつ俺はファミOキを買うためにコンビニへ向かった。

『「やっぱり飛翔はやさしい。……でもこれじゃ私が騙しているみたい……」』

そう言っつて私は手を握る。

『「言わなきゃ、飛翔が帰ってきたら……私のことを。飛翔は自分のことを話してくれた、

それなのに私が言わないままなんてだめ!」

そう思い公園の入り口に目を向ける。

『飛翔、早く戻ってこないかな…!』

するとこちらに歩いてくる人影が見えた。

『飛翔話が「こんヴァんわ」。冥界のネクロマンサーさアん」…!!!』

私はベンチから立ち上がってくる相手を見る。

「あつはははは!!!みんなが恐れているからどんなもんだと思えば

…随分かウワいい女の子じゃないですかア~~~~「クスツ」

『あなた、誰?』

「ウアたし?ウあたしの名前はヘレ。リフレイン年フォレスト組、出席番号は…長いからしヨウ略くく。グループ「リベリオン」に所属してるよオくく。それで…貴方を殺しに来ましたア」

ダツ!!

『!』

ガキイイイン!!

いきなり接近してきて振るわれた斧に私は持っていたボールペンをヘルサイズ〔鎌〕に変えその一撃を受け止めた。

「へええ。意外ですウ、反応できるなんてエ。まあ無駄ですけどねエ〜、あははは」
飛翔……………

「ちよつと遅くなつちやつたな、ユーお腹空かせてないといいけど…」

いつものコンビニのファミ○キが売り切れだったから、もう少し先のコンビニに行つてきたのだ。

周りはまだ遅いこともあつてか、いやに静まりかえっている。

民家からの光もほとんど消えているから街灯頼りだ。

そんな暗闇の中でも一角だけ明るいところがある。

「おつ、やつと戻ってこれたか」

ユーがいる公園だ。しかし、

「なんか変だな……」

そう確かに公園は周りに比べて明るい……が、少し明るすぎるんじゃないかと思う。

まさにその場所だけ野球のナイターゲームでもやっているのかって思うほどの明るさだ。

「何かあったのかな？」

そう思い俺は小走りに公園へ向かった。

公園の入り口に着いて中をのぞいたとき、俺は絶句した。

「ユー!？」

そこにはうつ伏せで倒れているユーの姿があったからだ。

俺はユーの下へ走り寄った。

「ユー!!おいユー!!しっかりしろ!!」

咄嗟にユーを抱き支え声をかけ反応を待つ。

「んっ……………」

するとユーは声をかけたおかげか瞳を開く。

「ユー!!よかった」

ユーは俺の顔を確認すると驚いたように瞳（め）を見開いた。
そしてメモを突きつけた。

『飛翔!!逃げて!!』

「えっ逃げるっていつたい」「アレレエ、何でこんなところに一般人がいるのかなあ
〜…!!」

驚いて俺は声がした方に顔を向ける。

するとそこには紫色の短髪をなびかせる、片手に斧を持った13歳ぐらいの女の子が
立っていた。

「君はいつたい…」

「キャハハツ!!まさか一般人が迷い込んでくるとは思わなかったなあ〜」

あッ、もしかしてネクロマンサーが此処に来てたのって君に会うためエ、けなげだ

ねエエ〜」

「ネクロ、マンサー?」

「あれエ、ネクロマンサーは君には話していないようだねエ〜」

その言葉にユーの体が震えた。

「知らないんならア、ウアたしが教えてあげますよオ〜」

『やめて!!』

ユーがメモを突きつける。しかし彼女は話すのをやめようとはしない。

「彼女は冥界のネクロマンサーでエ、人を生き返らせたりイ、殺しちゃったりイ、できちやう人なんですよオ。彼女の言葉には絶対の力があってエ、

その言葉を聞いた人は必ず言った通りになるんですよオ。

そりゃあもう彼女が「寒い」って言ったたらアその人はたとえ炎の中だろうとオ寒さを感じますウ。

それにイ、血液には不老の力があってエ、心臓は膨大な魔力を放出しつぱなしなんですよオ。

しかもオ、例え彼女が死んでもオ、その力は永遠続くんですからア、

もう化け物以外の何者でもないですよエ。あはははは!!」

「なんだよ、それ…」

「どうですかア、貴方が抱き支えているのは化け物なんですよオ。

それに彼女はそのことを隠していたんですウ、とんだ嘘つきですよえ、あははは!!」

『もう駄目だ。あの子が全部話してしまった…』

そう私はあの子の言うように化け物だ。ここにいてはいけない存在、それが私。飛翔は今私のことをどう思ってるんだろう？

そんなこと考えなくてもわかる。こんな私が近くにいたのだ

……嘘つきで、化け物な私が…。

『でもこれでいい、飛翔はこれ以上私にかかわらなくて済むから…』

あの子の狙いは私、私が付いて行くとはいえこれ以上飛翔に対して何もしないはず。そう思うと自然と瞳から涙が出てきた。

飛翔に会えなくなるのが悲しいんじゃない、飛翔に嫌われる事が悲しいんだ。でも…
『そんなこと、無理に決まってる』

わかつてる。これは私が悪い、飛翔の優しさに甘え招いた結果。

自業自得だ。

もうやめよう、人に甘えるのは

もうやめよう、此処にくることを
もう……やめ……よ……う……。

第3話 決意

「キヤハハハ!!…んじゃとつとその化け物をこっちに渡してくれませんかねエ。

ウアたしイ〜待たされるの大ツツツツ嫌いなんですよねエ」

そう言うが早く、彼女は斧を振り下ろす。

ズシヤアアアア!!

耳を塞ぎたくなる様な豪快な音の直後、彼女が立っているすぐ横の場所が陥没する。人が出せる限界をいとも簡単に超えている。あれだけの威力、腕にも相当反動がきているはずだが、

彼女はそれを否定するかのように再度斧を振り回す。

「でエ、どうすんのオ」

「…を……も……て……ねえ」

「はア?なんて言ったんだ?とにかくそのばけ…」

「ユーを化け物なんて言ってるじゃねえーぞ
ゴオオオオオオオオオ
!!!!!!」

俺が出せる最大限の声で叫ぶ。

「ユーが化け物? そんなこと誰が決めたんだ!! 言葉の力? 不老の血? 膨大な魔力? それ
がどうした!!」

ここにいるユーが!! 俺が今触れているユーは紛れもない、優しい女の子だ!!! 嘘をついてた? 人に話したくないことなんてごまんとあるだろうが!! ユーが話さなかったん
じゃねえ、俺が聞かなかったんだ!!

それに! ユーのことを化け物としか見てねえお前にユーの何がわかるっていうんだ
!! もう一度言う!

ユーは…化け物なんかじゃねえ!! 優しい女の子だ
!!!!!!」

『(飛翔…)』

私は嬉しかった、こんなにも私のことを思ってくれている人がいることが、こんな私を女の子として見てくれている人がいることが、私はさつきよりもたくさん涙を流している。

でもこれは悲しいからじゃない……………

『飛翔…』

「心配すんなユー、俺はあんなことでユーを嫌ったりしないよ。

だから…ユーは俺を頼ってくれていいんだよ」

真つ暗な道に温かな手を伸ばしてくれ人がいたから……………。

「くツだらねえエ。そんなんでヒーロー気取りかよオ、偽善者が」

「何と言われ様が関係ない、ユーを傷つけるんなら俺が相手になる」

「はア、さらに頭の中はお花畑ときてる、さっきの見ただろオ、

偽善者様じゃウアたしは倒せないんだよオ、カスがツ!!」

『飛翔あの子の言うこと正しい、逃げないと』

ユーは不安そうに俺の顔を見る。

「大丈夫だ、ユー。心配すんなって言ったろ?」

そういつて俺はユーをおろし、少女の前に立つ。

「あははッ、人の忠告は聞いたほうがいいと思うけどなア〜」

「なあ、知ってるか?」

「あア?」

「そういう台詞は…」

死亡フラグだぜ？

ブワアツ！！！！

そういつて俺は〔天翼〕を出現させる。

「なア!?こりヤどういふ芸当だア!!?」

「敵に自分の情報与えるかよ、バカ」

そういつて俺は空中へ移動。これで随分とこつちが有利になった。

空を飛べるつていうアドバンテージはなかなかかいかい。

さて此処からどうするか「舐めてんじやないわよ偽善者ア!!」…つて!!

「空飛べるのかよ!!」

「魔装少女舐めんじやないわよオ!!」

すかさず少女が斧を振るつてくる。さっき見たがああな斧が俺の体に当たった時点で俺の負けだ。

そう〔天翼〕以外はそこら辺にいる一般人と変わらない、だが…

ガキイイイイン

「なツ!!!魔装錬器を受け止めただとオ!!!」

そうこの「天翼」は違う「天翼」は翼ではあるが俺が念じればどんな物よりも固く、どんな物よりも柔らかくすることができる。今あいつの攻撃を受けれたのもこの「天翼」のおかげだ

そして

フシュ!!

「なッ!!」

この「天翼」は攻撃にも使える!!

ガキイイ!!

間一髪で少女は迫っていた「天翼」を斧でガードする。だが…

「こっちにはまだ5つ残ってる!!」

そう言つて残りの「天翼」も追撃させる。今の「天翼」は鋼鉄よりも硬いので当たれば相当なダメージになる。

「ちィ!!」

少女も必死に抵抗する、だが武器が悪かった。斧は一撃が強いが小回りはほとんど利かない。

一度振り下ろせばまた振り下ろすまでのタイムラグがある。よつて、

ガキイ!!!

「なア!!!」

手数に圧倒され武器である斧が手から弾かれた。今だ!!

「おりやアアア!!」

渾身の力を込めて「天翼」を振るう。

ドゴアア!!

「げはア!!!」

「天翼」は少女の横腹に衝突し、少女は地面に激突した。

俺はユーの近くに降り立つ。

「やったか?」

フルフルッ

首を横に振るユー。

「…あッ、げほお、こんなっ、ゼエゼエ、奴に、ぶへッ、負けっ」

さつき少女が激突した衝撃でできたクレーターから声が聞こえる。

さつきの一撃は相当きているようで少女は立てずにいた。

「まさ…か、これ、を、使うこ、と、にな、る、とは」

何を言っているかよく聞き取れないがこのままにしてもいけないと思い、

少女のもとに近づこうとすると

ぎゅ!!

服を引っ張られた。

「ユー、どうかしたのか?」

服を引つ張ったのはユーのようで、俯いているため表情はわからない。

もう一度声をかけようとしたところでクレーターが光だした。

「何だ!!」

するとクレーターから光の玉が出てきてそのまま夜空へ消えていった。

「今の光はさっきの少女か」

『移動魔法を使ったと思う』

ユーはメモを俺に見せてきた。

とりあえず危機は去った……のか?

「とりあえず大丈夫……か?」

『おそらく』

「そうか」

それからユーはまた俯いてしまった。

「ユー、ほんとどうしたんだ?」

ユーは少し悩んだようにしてメモを見せてきた。

『私は…飛翔のそばにいてもいいの?』

「何言つてんだよ、当たり前だろ。あんな奴の言うことなんて考えるんじゃないぞ。」

ユーは誰が何と言おうとも優しい女の子だ。」

それを聞いてユーは少しずつ顔を上げた。

泣いている。目元は涙を流しすぎたためか少し赤くなっている。

『私がそばに居るだけで飛翔の運命は変わってしまう…それで「ユー」
!!!!』

気づけば俺はユーを抱きしめていた。

「ユー、もう我慢しなくていいんだ、俺はユーのそばにいるしユーの事を守る。

運命がどうのこうのって前に俺は、その、ユーと一緒に居たいんだ。

理由がこれだけじゃ不十分かな?」

フルフルッ

『すごく嬉しい』

「そうか」

そういうとユーは肩を震わせた、きつと泣いているんだろう。

もう、ユーに悲しい思いなんてさせない。

それを胸に刻むためか、ユーを抱きしめている手をいつそう強めた。

「はア、はア、げほオ!!…くそがア、このオ、ウア、たし、がア…」

暗い森の中、彼女は歩いていて。月明かりは闇夜に飲まれてしまったかのように彼女の行く手を照らしてくれない。それでも彼女は歩く。

聞こえてくるのは自分の足で草を踏みつける音のみ。

「まさ、か、ジャンプ、を、使う、ことに、なるなん、ウオエ!!」

彼女はさつき使った魔法を口にする。ジャンプとは一種のテレポートで、所持者の魔力が残り少なくなると所持者の意思で残りの魔力を使い、できる限り遠くへワープするというもの。

ただし、移動場所を大まかにしか設定できないためあまり使用されないアーティファクトである。

「とに、かく…ヴィリ、エ、に、戻ら、ない、と、いけないエ、なア」

彼女は近くにあった木に寄りかかる。

「ま、さか、あんな、わけ、わから、ん、奴、に…グッ!!」

肋骨の2、3本は折れているだろう、それほどに強力な一撃だったのだ。

思い出しただけでも腹が立つ。魔装錬器は弾き飛ばされた時に置いて来てしまっているため

今は残った魔法で作った布切れ1枚だけ身につけている。

「と、にかく、あの、かた、の、もとへ、いそ「ガサツ」…!!」

咄嗟に少女は戦闘態勢に入る。こんな森の奥まで来ている奴だ、

只者でないことは容易に想像がつく。

ガサツ、ガサツ、

一歩、また一歩と近づくと足音、少女はこちらから仕掛けるべきかと悩む。

そして近づいてきた人物を見て少女は安堵する。

「○○○様!!」

「○○○○」

「すみ、ません。失敗、しました。途中で、わけの、わからない、奴に、邪魔され、まして……………」

「OOOOO, OOOOOOOOO」

「OOO様…」

「OOO,」

「へ？」

「sleep」

ドンッ

「どう…し…て…」 「ドサツ」

少女が最後に見たのは自分をあざ笑うかのような月だった。

しばらくしてそこに3人のフードを被った人物がきた。

「carry」

先ほどヘラと会話していた人物がその3人に指示を飛ばす。
先の人に指示され、3人はヘラを連れその場から消える。

「irregular…」

一人残ったその人は月を見上げるように顔を上げる。
なぜかその顔には、狂ったような微笑がうかんでいた。

第4話 介入

あの魔装少女襲撃から随分経った。

高校受験は何とかうまくいき、この春はれて俺は高校生になった。

前世じゃ男子校だったから、男女共学の高校に通うのは初めてだ。

まあ普通二度も高校生活送るなんて事できないけど…。

太陽の日差しが眩しい、もう高校に入ってから初めて

…いや、俺にとつては二度目の夏がきた。やはり地球温暖化の原因だろうか、

とても蒸し暑い…つと、この天気じゃあいつが心配だ

「おーい、歩！生きてるか〜？」

「つ…飛翔、いい所に、み、水を…」
「ガクツ」

「はいはい、いつものね。」

そう言つて俺はかばんに入れていたペットボトルを取り出す。

毎度毎度こうなるので常時入れているのだ。

………カーテン閉めればいいのに。

そう思いつつ俺は歩に水を頭からかけてやる。

「うう、サンキュー飛翔、助かったよ」

「いいって、俺たち親友だろ？」

「お前と出会えてホントよかった」

「おおげさだな」

ああ、説明が遅れたな、こいつの名前は相川歩…

ゾンビだ。

まあ、いきなりこんなこと言われてもピンとこないからな…

少し時間をさかのぼることにしよう。

あれは今から数週間前だった…

「マジですか？」

俺はいつものように学校が終わってからコンビニで買い物して、自分の住んでるマンションに帰ってきたところだ。

ああ、ユーとは今会っていない。

べつ別に嫌われたとかそんなんじゃないぞ!!

冥界でやる事があるからって、俺が高校生になつてから冥界に帰つたんだ。

それで、今日はコンビニでクラスメートの相川とたまたま出会ってコンビニの話で意気投合して、

いい友達ができていい気分だった。実は俺女性恐怖症の上、

人見知りもするからクラスの人に話しかけれなかったんだよな…。

んで、そんな気分のいい俺に最悪のニュースが突きつけられた。

「ええ、どうやらお隣の部屋の人のタバコの火の不始末だそうです。」

そう、なんと俺が住んでいたマンション、正確には俺が住んでいた部屋の階のほとんどが黒こげ状態だった。原因は俺の部屋の隣の人のタバコの不始末だそうです。

「隣というだけあって、あなたの部屋の被害が大きくて

「しばらくは別の場所で寝泊りしていただけますか？」
と警察官は申し訳なさそうに俺に言った。

「いや、そんな顔しないでください。あなたが悪いわけじゃないんですから。
とりあえず寝泊りできるところを探して見ます」

「そう言っていただけだと、こちらとしてもありがたいです」
そう言つて俺はその場を後にした。

「とは言つたものの…これからどうするか」

いつもユーと会つていた公園のベンチに座つて俺は途方にくれていた。

だつていきなり家がなくなりましたつて言われても実感わかないだろ？

とりあえず…今日は誰かの家に泊めてもらおうかな？

いや、いきなり泊めてといつて了承してくれる友達がいない…。

今からホテル探すか。

「はあ、不幸だ」

「ん、井之上じゃないか、こんなところでどうしたんだ？」

俺はその声に導かれるように顔を上げた。

そこにはコンビニの袋をぶら下げている、今さつき友達になったばかりの相川の姿があった。

「ああ、相川か？」

「どうしたんだ？そんなやつれた声を出して、何かあったのか？」

「いやな、実は……………」

「そっか、火事で……………」

「そつ、でこれから今日泊まるホテルを探しに行こうとしてたところだ」

そうやって俺は立ち上がる。

「こんな話聞いてくれてありがとな、相川。じゃ、俺行くわ」
そう言って歩き出した、が

「なあ、井之上がいいんなら俺の家に来ないか？」

「え？」

「いや、俺ん家両親海外旅行してて何時帰ってくるかわからんし、

井之上が嫌じゃなかったら…」

「いいのか？」

正直ありがたい話だ。でも会ってまだ間もないのにそんな凶々しい事するのも…。

「当たり前だろ？俺たちもう友達じゃんか」

「相川……」

俺はいい友達にめぐり合えたんだな…。

このことを祝かのように夕日は真っ赤に燃えていた。

「ありがと、相川。それじゃあお言葉に甘えさせてもらおうよ」

「ああ、それと俺のことは歩いて呼んでくれ」

「なら俺も飛翔って呼んでくれ」

「ああ、わかった飛翔」

「おう、歩!!」

こうして俺らは親友になった。

それから歩の家に居候しだしてから2週間ぐらい経ったころだ。

今は夜の11時前、ちなみに俺は歩の家の一室を借りてパソコンをしてた。するとコン、コン、とノック。

「入っていいよ歩」

「ああ」

そう言って入ってきた歩は財布を持っていた。

「どっか出かけるのか?」

「ああ、ちよつとコンビニまで。飛翔はどうする?」

「愚問だな。ちよつと待っていてくれ、準備するから」

「ああ、わかった」

そう言って歩はドアを閉める。

「さてと」

俺はパソコンの電源を落とし、財布を持って歩の後を追った。

「月が綺麗だな」

「飛翔がそんなこと言うなんてな」

「ん、知らなかった？俺月好きだよ」

歩と俺はすでに暗くなった夜道を歩く。街灯がちかちかしてあまり役に立っていないが、

今夜は満月、月明かりを楽しむにはよい仕事ぶりだ。

「へえ、おっ着いたぜって…」

そう言った歩が固まっていた。まるでゴーゴンにでも見られて石になったかのように…

いったい何を見て……………

そこまで言っただけ俺も固まってしまった。

コンビニの入り口の端にちよこんと座っている女の子、

世界が嫉妬しそうなほどの銀髪のロングヘアー、おとぎの国から来たような西洋の鎧、

間違いない…

「ユー…」

俺は小さく呟いた。高校生になってから会っていないから約2ヶ月強かな、

それだけの時間なのにとても長く感じた。それほど俺の中でのユーの存在は大きいものなんだ。

そんな感動に俺が浸っていると…

「すみません、ものOけ姫を信じますか？」

歩がバカな質問をした。

いやいや!!ここ感動の場面なんだよ!!雰囲気一気にbreakしてくれちゃったよ

!!

プイッ

ほら見ろ!ユーもそっぽを向いちやったじゃないか!?

そう思い歩を見るとなんだか膝をついて落ち込んでいる。

喋りかけたかったの？今ので？

すると歩は何か思いついたように顔を上げその場から少し離れる。
何する気だ？

「おりゃー!!」

そう言う歩はいきなり走り出した。

あの構えは………ロンダートからのムーンサルトオ!!!

歩そんなことできたのか!!?

グキッ

あつ、今嫌な音が。そう思った途端、

「ぎゃあー!!」

歩むが盛大にずっこけた。見ると足を押さえている、

…足首ひねった音だったんだ、今の。

そう思いユーに視線を向けると肩が小刻みに揺れている。

…笑ってるのかな？

するとユーは歩むの服を引っ張る。

『面白かった』

ユーが歩に突き出したメモにはこう書かれていた。

歩はそれを見て少し安堵したように見える。

：よかつたな歩、苦労が報われて。

そう思っているユーは再びメモを見せてきた。

『だから二度とするな』

歩は「何でやねん」って顔してるな。まあ、ユーの事知らなければそうなるわな。

一呼吸おいて俺はユーに話しかけた。

「ユー、久しぶりだな」

『飛翔、久しぶり』

「あれっ、飛翔たち知り合いなの？」

「まあな、それよりユー、お腹減ってるだろ、いつものでいいか？」

コクツ

ユーは首を縦にふる。

「じゃあ、ちよっと待っててくれ〔ニコツ〕」

『！〔コクコクツ〕』

そう返事するとユーは顔を赤くして頷いた後下を向いた。

やばい、超可愛い

最近会っていないからホント寂しかったんだよ!!

こうしちゃいられないな。早くファミOキを買ってこなくては!!

「じゃあ歩、ちよつとユーの事見ててくれ」

「ちよつと待て、ファミOキ買ってくるんなら俺の分も買ってきてくれ。

金後で払うからさ」

「わかったよ」

そう言っただけで俺はコンビニに足を踏み入れた。

「はい、お待ちどうさん」

「おっ、悪いな」

『ありがとう飛翔』

「いいって、これくらい」

そう言つて俺はファミ○キを二人に渡す。実はこれがラス2だったりするため俺の分は無い。

まあ、ファミ○キが欲しかったわけじゃないけど……

『飛翔は食べないの?』

「あれ、ホントだ。飛翔、お前の分は?」

俺が食べないのを不審に思つてか二人が心配してくる。

「ああ、その2つで売り切れちゃったんだ。俺は腹減つて無いから二人とも食べていいよ」

そういうと歩は「そうか、悪いな」と言つて食べることに戻つた。

ユーはと言うとなにやらファミ○キをじつと見つめている。

「?ユーどうかしたのか?」

そう聞くとユーは

『はんぶん』

と言つて自分が持っていたファミ○キを手で2つに割りその片方を俺に渡してきた。

「えー…いいのユー？」

コクツ

少し顔を赤らめてユーは言った。

い、いいのか俺!!ここで受け取ってしまつて!?

なんかすごく恥ずかしいんですけど!

歩もニヤニヤしながらこちらを見ている。

断るべきか……

『嫌?』

「ううん、もううよ。ありがとうユー」

あんなこと言われて断れるわけ無いじゃん!!上目遣いだぞ!

もともと全然嫌じゃなかったし!!

それから俺ら3人は他愛も無い雑談をした。

しばらく話して歩は

「俺さき帰るから、遅くならないうちに帰って来いよ」

と言って先に家に帰った。歩ありがとう!!

今の歩はとても輝いてるよ!!

ということではユーと二人つきりだ。

やっぱユーは可愛い。見ていて全然飽きない。

『どうかしたの?』

俺がユーを見ていたからだろうか、ユーが尋ねてきた。

「いや、俺嬉しいんだ。ユーとまた会えて」

『私も嬉しい』

「そっか」

ユーもそう思ってくれてたんだ。なんかいいな、こういうの・

ポンッ

『!』

「えっ、あーごめん、つい…」

気づくと俺はユーの頭に手を置いていた。なんか自然に動いたってゆうか、急いで手を引つ込めたけど、まずかつたかな…

『いい、嫌じゃなかった』

「そ、そうか。よかった」

ひとまず嫌われていないことに安堵、

ふと思つて夜空を見上げる。夜空では満月が神々しく輝いていた。

クイツ

夜空を見上げているとユーに服を引っ張られた。

「どうかしたの?」

そう言うとユーはメモを見せる。

『歩が危険』

えっ……………

ユーに連れられて俺は住宅街に来ていた。

「ねえ、ユー。歩が危険つてどういうこと!?!」

『この辺りで魔力が使われた痕跡がある』

「あのとときの奴か?」

フルフルッ

ユーは首を横にふる。

『あの時のとは違う』

「そうか……で歩は何処に」

『ハハハ』

そう言つてユーはひとつの家を指差した。

「よし、ユーはここで待つてて」

そう言つて俺はその家に入る。

家の中は酷いものだった。壁は血まみれ、家具も何かに切られたように大破していた。

そしてその廊下で倒れている人を見たとき、俺は絶句した。

「おい、歩!!しっかりしろ歩!!」

そう言つて俺は胸を貫かれ血まみれになっている歩を抱き起こす。

しかし息があるわけが無い、これだけの重症だ、即死だっただろう。

「せつかく、親友が出来たつてのに……こんな別れ方あるかよ!!」

そう言つて俺は冷たくなった歩を抱きかかえる。

「なにか、何か方法は無いのかよ……」

そう思っているといつの間にかユーが隣に来ていた。

「なあ、ユー。歩を…救う方法は無いのか？」

『ある』

そのメモを見た俺は驚きを隠せなかった。

「あるのか!？」

『ここでは出来ない。人のいない場所に移動しないと』

「もしかして、言葉の力を使うのか？」

コクッ

ユーは頷いた。確かにユーの力なら出来るかもしれない、でも…

「それ、痛いんだろ？」

そう、ユーの言葉の力は強大だがそれなりのリスクを伴う。

それを使うと激しい頭痛に襲われるのだ。

『大丈夫、耐えられるから』

「ユー…」

『それに、歩は飛翔の大切な友達。』

「ああ、そうだ。ありがとうユー」

そうして俺とユーは人のいない場所に移動した。

「ここでもいいかユー？」

『問題ない』

「そうか」

そう確認して俺は歩を地面に寝かせた。

『飛翔は離れていて』

「ああ、わかった」

そう言つてユーから距離をとる。

ユーの言葉は聴いた者すべてに影響を与えるからこうするのである。

しばらくすると歩が起き上がった。

「あれ、俺確かに貫かれて……君は飛翔の……」

『落ち着いて』

「もしかしてこれしたの君？」

『そう。私が死なないようにした』

「はあ!!じやなにか、君はネクロマンサーだとも言うのか!？」

『そう』

「まじかよ…」

「歩!!よかった!」

「飛翔!!これはいつたいたいということだ!?!もしかしてお前もネクロマンサーだったりするのか!？」

「生憎俺は違うよ。まあ多少一般人と違うところがあるとすれば…」

これかな——

ブワツ!!

俺は〔天翼〕を出現させる。

「!」

これ見せちゃもう歩の家にはいれないかもしれないかもしれんが…

見せないとなんか騙してゐみたいだな。

「驚いただろ、歩が嫌って言うんなら俺は歩の家を出て行くけど…」

「何言ってるんだよ。飛翔がどんな姿になったって飛翔は飛翔だろ?」

「歩……」

「たかが翼だろ？これからも頼りにしてるよ親友！」

「……………ああ!!これからもよろしく、親友!!」

なんかいいなこういうの……温かい気持ちになる。

「あ!でも俺が生きてるってばれたらまた犯人が……」

『心配ない、私が一緒に居る』

「え、じゃあユー歩の家にするのか？」

『そう』

「じゃあ、ユーと一緒に住めるのか。これからよろしくなユー」

俺はユーと握手した。ユーの手は思っていた以上に柔らかかったと言っておこう。

「なんか俺、忘れられてね？」

「そんなこと無いぞ!?!なっユー!」

コクコクツ!!

まあそんなこんなで今の状況だ。

「歩く。日も落ちたし帰ろうぜ」

「おう、そうだな」

家ではユーが待ってるし、さてと、今日の晩御飯は何にしようかな。

第5話 魔装少女

「眠いな…」

俺こと井之上飛翔は退屈していた。飛翔以外のクラスの人は先生が話すことを真剣に聞いている。

本来ならば飛翔もそうしなければいけないんだろうが、

前世の記憶が残っている飛翔にとって今やっている授業は以前やっているのだ。

そのため知っていることをしゃべられても退屈以外の何ものでもなく……

「ZZZZZZ」

耐え難い睡魔であると言うことだ。

キーンコーン、カーンコーン

「ZZZZ………んっ、もう終わりか？」

俺はいつの間にか眠っていたようで視界に入ったのは教室から出て行く先生の後姿だった。

さらに言うと、すでに太陽は傾いており放課後の合図であることを示している。

「飛翔、お前午後の授業ほとんど寝てただろ。そんなんで大丈夫なのか？」

「大丈夫だ。問題ない。〔キリッ〕」

「そっそうか」

今話しかけてきたのはクラスメートの織戸。

名前？

……………忘れた。織戸って呼びやすいから、

名前呼ばないんだよ。

「あれ、そういえば歩は？」

「ああ、相川ならあそこでたそがれてんよ」

そう言つて織戸は窓側の後ろから2番目の席を指差す。

そこには人生のすべてでも悟ったかのように顎に手を当てている歩の姿があった。

俺は歩に近づく

「歩く。さき帰っててもいいか？」

俺の言葉に歩は顔を上げてこつちを向く。

「ん、ああ飛翔か。いいぞ別に、俺はもう少ししないと…な」

そう言つて歩は窓に視線を向ける。

そう、歩はゾンビのため日差しの中を歩けないのだ。

歩こうものならすぐにボタンキューだ。

「ああ、わかつてる。悪いな、居候なのに先に家に帰つて…」

「そんなの全然気にしてねーよ。…それに飛翔はユーのこと心配してんだろ？」

「なあ!!ちよつ!歩!!!」

「はいはい、わかつたから。先帰つていいぞ」

「俺何も言つてないんだけど!!」

たつ確かに早くユーの顔が見たいとか少しは思つてるけど…//

ほつほら、帰つてから晩御飯の準備しなくちゃいけないだろ!!

「じ、じゃあさき帰らせてもらうわ」

「んじや、俺も帰るわ。またな相川」

「おう」

そう言われ俺は織戸とともに教室を後にした。

「ただいま〜」

今しがた織戸と別れて相川家に帰宅。

『お帰りなさい』

「ただいま、ユー」

リビングに来るとユーがテレビでお笑い番組を見ながらお茶をすすっていた。

その光景は、まるで絵画の一部を切り抜いてきたような完成された物のようだ。

〔綺麗だな〜〕

俺はそう思った。出来ればこのままずっと見ていたいな…

『どうかしたの?』

ユーが首をかしげてこちらを見てくる。

「あー！ 詳しいや、なんでもないよ……」

『？』

ユーはわからないって顔してる。

言えない！ ユーに見とれて固まってたなんて！ 死んでも言えん！！

何か、何か話を………あ！

「そつそうだユー！ 晩御飯何が食べた？」

咄嗟の切り替えしだがなかなかだと思う。

ユーは少し考えるようにしてからメモを向けてきた。

『満漢全席』

えっ………と………

「ごめんなユー。俺、満漢全席なんて作ったことないんだ………」

その代わりカレーじゃ駄目かな？ 一応味には自身あるけど………」

俺はユーに妥協案を出す。無理です、実際俺が作ったことのある料理自体少ないのに、

たぶん両手両足の数で足りると思う。………マジで。

そう思つてユーを見る。するとユーはメモを向けてきた。

『飛翔のカレーは大好き』

.....

.....

.....

はっ!!! 思考がフリーズしとった!! いかんいかん。

「そっか、よかった。じゃあすぐ作るから少し待つてね「ニコツ」

『!.....「コクコクツ」』

ユーは頷くとすぐに俯いてしまった。

顔が赤い気がしたけど気のせいかな？

ジャツ、ジャツ、ジャツ、

今俺はお米をといでいる。当たり前だろ？

カレーに白米が無いとか何の冗談だよ。

とか思っていると、いつの間にかユーが隣に立って自分の手を見ていた。

「ああ、いいよユーは、手伝わなくて、座ってて」

そう俺は言ったがユーは首を横にふる。

『手伝いたい』

そう言ったユーの瞳は真剣そのものだった。

「え、でも」

『手伝いたい』

再度ユーはメモを突きつけてくる。

でもどうしよう………うーん

「……じゃあユー、スプーンとか出しておいてくれるかな？」

『……「コクコクッ」』

そう俺が言うとうちはトトトと食器棚に向かっていった。

ホント、優しいなユーは……。

「さてと、今日は目いっぱい腕によりをかけて作るぞ!!」

といって一人意気込む俺だった。

「さて、カレーの準備はばっちりだな」

「ただいま。…ん、このにおいは……………カレーか!？」

ちようどカレーの準備が出来たと同時に歩が帰ってきた。

…狙ってやってないよな？

「『いただきます』」

そう言っつて俺らはカレーにありつく。

…うん。悪くないでさだ。今までで一番いいかも。

「おう!! やっぱ飛翔のカレーはいつ食べてももうまいな」

「そう言っつてくれると嬉しいよ」

クイツ、クイツ、

不意に服を引つ張られる。

『とてもおいしい、おかわり』

「そっか、よかった。ちよつと待ってて」

そう言つて俺はユーのお皿にカレーを注ぐ。

「はい、どうぞ」

『ありがとう「ニコツ」』

「!?」

え!?今ユー笑つた?

『?』

ユーは何事も無かつたかのようにカレーと食べ始める。

……………気のせい…かな。

そう思いつつ俺はカレーを食べた。

現在時刻は11時、晩御飯を終えて俺は今部屋でパソコンをしてる。

〔例の歩を殺した犯人、おそらく魔装少女だろう。ユーは魔力が残っていると書いていたから、

たぶん間違いない。それだとネットの情報は期待できないな。そんなハマあの輩がするとは考えにくい。となると、やっぱり自分が餌になるのがベスト、か〕

そう思いパソコンをシャットダウンさせる。

コンッ、コンッ

「どうぞ〜」

「ああ、俺だ」

そう言っ入ってきたのは歩だ。

「今日も行くのか?」

行くと言うのは例の犯人探しである。歩はゾンビになって以来、

毎晩犯人を探し回っている。まあ、現状それがベストだし。

「ああ、飛翔はどうする？」

「そうだな……行くよ、ちよつと待っていてくれ」

「わかった」

そう言つて歩は部屋から出て行つた。

「さてと、何か収穫があればいいけど…」

そう思い俺は部屋を後にした。

「今日も何もなしか〜」

「犯人も相当考えてるんだと思うよ」

今俺と歩は墓地に来てる。月の明かりで墓石が妙に光っており、柳の木が風に揺れていてより一層不気味な感じを漂わせている。

歩曰く、ここが静かで落ち着くそうだ。

まあ、静かなのはわかるけどね……………静か過ぎない？

ふと歩に目を向けると、歩は持っていたペットボトルを空に投げているところだった。

俺と歩はそのペットボトルを目で追っついていき……………つてあれ？

影がなんか2つにふえてるんですけど……………

しかも……………こっちにおちてくるううう!!!

「ちよっ!!歩何したの!?!」

「知るか!!」

そうこうしてる内にその2つの影が墓地に落下してきた。

ザクツ!!

ん?今なんか音が…

辺りを見回すとなぜか歩がピンク色のチェーンソウを握っていた。

何持ってるの歩……………。

しかもおもむろにクレーターに近づいてるし…。

「いたたたた」

そう思っているとクレーターの方から声が聞こえた。

目を凝らしてよく見て見ると………女の子だ。

ピンクを基本としたコスチュームを着た、髪は短髪で色は茶色、背はユーと同じくらいだろうか？

「おい、大丈夫か？」

歩が少女に近づく。

おいおいチェーンソウ持ったままとかやばいだろ。

「あ——————っ!!!」

すると少女は歩を見て大声を上げた。

そりやそうだ、見ず知らずの男が片手にチェーンソウ持って迫ってんだもん。

誰だってこわが——

「あたしの魔装錬器っ返せ!!」

って………はあ!!

魔装錬器って言ったたら、あの俺たちを襲ってきた魔装少女が使ってた代物じゃないか

!!!

俺は咄嗟に戦闘態勢に入る。

「待て待て、魔装錬器って何だ？」

「歩!!早くその子からはな…れ……………」

そういうおうとして俺は固まった、いや歩もだな。

何と少女が着ているコスプレ風コスチュームが光の粒子になって消えた。

……………考えて見よう。服が消えたら人はどうなる？

当然…裸だ。

「ほら、早く返せよ」

少女は自分の状況に気づいていないようだ。

少女はお構いなしにチェーンソウを取ろうとする…が

バチィ!!

突然チェーンソウから火花が散り少女は触れることが出来なかった。

「うっそ!!なんで!？」

少女はもう一度試すが結果は同じ、触れることが出来ない。

「それより、着替えとか無いのか？」

歩が意を決したように尋ねる。その間俺はずっと顔に手をやってた、

当たり前だろ!?!女の子の裸見ちゃ悪いだろ!!

「ほえ?」

少女は数秒考え……あつ、顔が真っ赤になった。

「みっ見るな!!変態!!エ〇スペシャルが!!」

少女は目にも止まらぬ速さで歩にジャンピングキックを決める。

…あれ見ると俺の中の魔装少女のイメージが根本から覆るのだが…。

そんなこと思っていると歩の後ろから何か…!!

「歩!!危ない!!」

「飛翔?何言つて…!?!」

そう歩が言い終わる前に、歩は墓石めがけて吹っ飛んでいった。

「くっ!?!いったい何が」

そう言いつつ歩は立ち上がる。

ゾンビってホント便利だなおい、痛み感じねーのか?

「そいつはB級メガロの凶悪女子高生クマツチだ!!」

早く逃げろよな!!じゃないとアンタなんかすぐ殺されちゃうんだからなっ!!」

そう言う少女は近くの墓石に隠れた。

まあ、あの格好じゃ動けないよな。

「はあ、なあ、学ランでいいか?」

「はあ!!アンタ何言って…」

歩は頭をかきながら言う。

「お前の着替え」

「へ？」

そういうと歩はクマ〔?〕に向かってダツシユ、

もちろん人間じゃ到底出せないようなスピード。

ゾンビである歩は人間が自らセーブしている力を無理やり引き出すことが出来る。

普通身体が耐え切れないが…歩はゾンビだからそんなことお構いなしだ。

歩はそのままクマ〔?〕の背後に回って

………首を引きちぎったあ!!グロイよ!!

「すごい…B級メガロのクマツチを一撃で…」

アンタいったい…」

そう言われて歩はこっちに振り返って言う。

「俺の名前は相川歩、生ける屍さ」

「むううん」

少女はさつきのクマツチ「覚えた」から強奪した学ランを身にまとい、さつきからチェーンソウトにらみ合っている。

「何で私がミストルティンに拒絶されないといけないんだ」

「知るかよそんなこと」

歩は少女と話している。俺は少し離れた所で少し考えていた。

「どういうことだ？ ユーからあらかた魔装少女のことは聞いていたけど……」

この少女はどうやら敵ではないようだな。……………とりあえず様子を見るか」

「ちよつとアンタ、電話貸して」

「電話？ えつと… あつた」

そう言つて歩は携帯電話を取り出した。

「ちよつ!! 何その魔道具」

「いや、ただのケータイだけど」

「ホントだな!? あたしを騙したらそのクマツチみたいになるからな!!」
そう言つて少女はクマツチを指差す。

見てみるとクマツチは光る粒子となつて消えている途中だった。

………いやいや、今の君からそんなこと出来るように見えないんだけど。

それから少女は歩からケータイを借り「奪つ」て電話している。

ここからじゃ遠くて聞こえんな。

…あつ終わったっぽい。

「アンタ、あたしの魔力奪つただろ!!」

少女は電話が終わるや否や歩を指差しそう宣言した。

当然歩は「何言つてんの?」みたいな顔してる。

わかるよ、俺もそうだもん。

「と・に・か・く! アンタを魔装少女として任命すつからな!!」

よつて、アンタは今日から魔装少女だ!! 光栄だろ!!」

うわくなんか歩厄介ごとに巻き込まれてんな。

ああ、もちろん助けませんよ。何かあるといけないし。

「ちよつ!!ちよつと待て! そんな簡単に…」

「それから…超ウルトラスーパー不本意だけど、

「問題が解決するまでアンタん家に居させてもらおうかな」
「俺の話を聞けえ!!」

静まり返った墓地に歩の叫び声がよく響いた。

まあ、ドンマイだよ、歩。困ったら助けるから。…頑張れ。

第6話 戦闘

どうも、飛翔です。

あれから結局ハルナ〔あの時のチェーンソウ少女の名前〕は相川家に居候することになった。

歩はこの世の終わりみたいな顔してたな。

相変わらずクラスのみんなは先生の話に耳を傾けてる。

「…あつ、そうそう忘れるところだった」

そう思い俺はカーテンに手をかける。そしてそのままカーテンを後ろの奴にバトンパス。

その後ろの奴とは、

「すまん、飛翔」

「かまわないよ」

そう、先日ゾンビになった歩だ。前にも言ったが、

歩……正確にはゾンビは日光にとってもなく弱い。

日の光に当たり続ければ干乾びてしまう。

前回の席替えでたまたま歩の前の席になったから、

こうやってカーテンを取ってやるのが俺の仕事になってる。

…今日もいい天気だな。

キーンコーン、カーン、コーン

とりあえず、考えに耽っていると午前の最後の授業が終わった。

お昼時だ。いつもならコンビニで買ったおにぎりやパンなのだが、

今日は違う。なぜかと言うとそれは今朝の話だ……………

「あたし、卵焼きには自信があるんだ!!」

歩に指をさしながらハルナはそう宣言。

今朝は台所にこもって何やら熱心に作っているようだったが……
そういうことだったのか。

いかにもお花見に持っていくような大き目の箱をハルナは歩に渡す。

「べつ別に、アンタのために作ったわけじゃないかな!」

……そんなセリフ言われながら渡されて、それ信じる奴が何人いると思ってるんだ?
?

「あつそうだ。アンタの分もあつからな!」

そう言つてハルナは俺にも弁当を渡してきた。

正直、ちよつと嬉しい。女性の手料理なんて母親の以外食つたためしないから……

「ああ、ありがと」

そう言つて俺は弁当を受け取る。

ジーーーーー

「?どうしたユー?」

何かの視線を感じてそちらを向くとユーが俺のほうを向いていた。

だがいつも俺に対して向けて向けている瞳ではなく、

なんかこう……とげとげしい感じ?の視線。

「どうかしたの?」

『なんでもない』

そう言っつてユーはテレビに視線を戻した。

でもその表情はちよつと怒っているように俺には見えた。

「何か俺、ユ一の機嫌損ねることしちやったのかな？」

いつもは玄関まで来て『いつてらっしゃい』ってやってくれるのに……
帰ったら謝ろうかな。

「おーい、飛翔！一緒に食おうぜ！」

「ああ」

織戸に呼ばれ俺は机を反転させる。

歩はなんだかうかれてる……。そこまでハルナの手料理が楽しみなのか？

それで歩は弁当のふたを開ける……って!?

「相川に井之上が弁当持参なんてめずら……うお!？」

織戸も絶句してる。そりやそうだ、弁当の中身が卵焼き一色だとそりやびびるわな

……

「……って!?!歩の弁当がそうならまさか!?!」

そう思い俺は弁当の中身を確認して……

「マジかよ……」

啞然とした。俺の渡された弁当も歩の弁当と寸分の狂いも無く卵焼き一色だった。

「……、井之上もかよ。」

お前らこのボケは体張りすぎだろ……」

織戸が哀れな目で俺らを見てくる。

まあ、作ってもらった身だから文句いえないよな。

「俺、卵焼きが好きなんだ」

歩う。それは無理があるって…。

そう言いつつ歩は卵焼きを一つ取って食べる。

「むうはあ!!!」

「どっ、どうした!?歩!」

「なんだこの卵焼き!?めっちゃうめえ!!」

おいおいマジか?卵焼きでそこまでって…

そう思いつつ俺も卵焼きを食べる。

「ぬオオ!!何このうまさ!!ここまでですごいなんて!」

ガチだ、このうまさはガチでやばい。

「おいおい2人共、たかが卵焼きでそこまで…」

そう言つて織戸は歩の卵焼きを一つつかみ食べる。

まもなく…

「うおお!!何だこの卵焼きは!?おいみんな来てくれ!!」

相川と井之上の弁当が大変だあ!!!」

織戸のその一言により、俺と歩の卵焼きは瞬く間にパンやらジュースやらに早代わり。

皆卵焼きのおいしさに当てられたらしい…。

昼休みはこの話題で持ちきりだった。

午後の授業も終わりもう放課後。

夕日が差し込む教室には俺と歩、それから織戸しか残っていない。

「なあ、最近遅くまで残ってるよな。何してんだ？」

織戸がそんなこと聞いてきた。

「寝てる」

「授業中あれだけ寝てるのにか？」

と言うか、歩は帰るに帰れないんだよな。

……………日が落ちないと。

「まあ、いいけどさ。最近近所で殺人事件起きてるだろ？」

家が近いからいいけど、気をつけろよ」

珍しく織戸が心配してくる。

こういうところ表に出せば織戸もモテルだろうに…

「あ、俺ちよつとトイレ行って来るわ」

「おうわかった」

そう言つて俺は教室を後にした。

「そうそう相川、お前に会いたいわって言う子がいるんだ」

飛翔が教室から出て行ってから織戸が話し出した。

「俺に？ いったい誰だ？」

「俺の妹の友達で京子っていうんだが、知ってるか？」

「いや、知らない名前だが？」

「そんな名前の友達いなかったと思うが……」

「例の殺人事件に遭遇したんだ、京子は」

「なんだって……」

あの連続殺人事件には生き残りはいないんじゃないんじやなかったのか？

「歳は妹と同じだから14だな。金髪の超美少女だ」

「……おまえ、手エ出したりしてねえよな？」

もし出してたら、即行で警察に突き出さないと。

「バカ言え、俺は大人な女性が好みだ」

「お前の好みとかどうでもいいがな」

「で、どうだ。会ってくれるか？」

……もしかしたら、何か情報が手に入るかもしれないな。

じつとしてるよりは全然ましだ。

「ああ、俺は全然OKだ」

すると織戸は安心したような顔をした。

「そうか、よかった。じゃあ明日の夕方でもいいか？」

「ああ、大丈夫だ」

それに早いほうがいいしな……………

「ああ、それから井之上も誘って明後日ボーリング行こうぜ。

たまたま福引で当てたんだよ」

そう言つて織戸はボーリングのチケットを見せる。

「ああ、戻ってきたら伝えるよ」

「おう、じゃな」

そう言つて織戸は教室から出て行つた。

ふと外を見てみるとグラウンドで部活に勤しんでいる生徒の姿があつた。

……ホントよくこの日差しの中を走れるよな。

そんなこと思つてると、

ゴシヤアア!!!

いきなり窓を突き破つて教室に何かが入り込んできた。

ふむふむ、両手がハサミみたいで体の色は赤、

学ランを着てて……………つて!?

「ザリガニい!!？」

「ふう、すつきりしたあゝ」

差し込む夕日で照らされた廊下を歩く。

この時間校内に残っている者はおらず、辺りは静まり返っていた。

「さて、これだけ日が落ちれば傘差せば歩も帰れるかな」

そう思い歩のいる教室に向かう。

「早く帰って、ユーに「ゴシヤアア!!」…!!」

そう思っていると、教室のほうからものすごい音がした。

俺はすぐさま音がした方へダッシュする。

しばらくすると歩のいる教室が見えてきた。

見ると、遠目からでもわかるくらい無残な姿になっている机が、

教室の廊下の前に散らばっていた。

俺はすぐさま教室のドアを開ける。

「歩!!無事か!!?」

「飛翔!!」

教室に入ってみると、人よりも一回り巨大な学ランを着たザリガニ〔?〕が、

歩と対峙していた。

歩は格好からしてハルナを庇ったのか、背中を切り裂かれている。

その後ろには地面に突き刺さったミストルティン「チエーンソウの名前」

と……………

「ハルナさん、裸が趣味なのですか?」

これまた裸のハルナさんであった。

「ふおおおおお!!もう一つ魔力がこちらに近づいていることはわかっていたが…

まさかそれも男だったとはなあ!!」
ザリガニはそう言つて俺を見てくる。

「俺に魔力がある? どういうことだ?

もしかしてこいつ「天翼」のことを…」

そう思つて俺は身構える。

「すまん飛翔! ハルナを頼む!!」

そう言つて歩はザリガニと向き合つた。

「ふおつふおつふお!!」3人まとめて殺してやるよお!!」

そう宣言したザリガニは自分の左腕を構えて

ドンツ!!

…つて腕が飛んだあ!!? 何処のマジ〇ガーだよ!!?

普通こんなの食らつたら、死んじまう。

普通なら……な。

ガシイ!!

歩は飛んできた腕を片手で受け止めた。

「な!! 何イ!!? 人間にこんな力あるわけ……!!?」

ザリガニは困惑してる。そりやそうだ、

自分の攻撃がよもやただの、人間に止められるなんて想像してなかっただろう。歩は腕を受け止めつつ話す。

「教えてやるよザリガニ野郎!!人間ってのはなア、

肉体が勝手にセーブしちゃうから、100パーセントの力を出せないんだと!!

だがなあ俺は………ゾンビだ!!そんな限界お構いなしだ!!」

そう言つて歩は受け止めていた腕を放り投げる。

「ゲババア!!?」

さすがにこれにはザリガニも驚いてのけぞる。

歩はその隙を見逃さず、奴の懐へ潜り込む。

「100%!!」

ドガア!!

歩はザリガニに殴りかかる。人間が出せる、最大限のパワー。

「ゲババババ!」

「120%!!」

ドガッ、ドガッ、ドガッ、ドガッ、!!

歩は人間の限界を超える力でザリガニにラッシュをかける。

「140%!!」

とどめ!と言わんばかりに両手を握って、ザリガニの腹にキツイ一撃をいれる。
「ゲバア!!!」

ザリガニは歩の一撃を受けて黒板に激突する。

……………これ誰が直すんだろ？

「アイツ……………ホントいったい何なんだ!」

俺の横にいるハルナが叫ぶ。

ハルナは今さつき教室のカーテンを引っぺがして、それをまどつている。

……………まあ、ゾンビだからな。

「硬すぎんだろ……………つてうお?!腕が変な方向に!」

見ると、歩の腕は真ん中からポツキリ折れてしまつてゐる。

そりや人間の限界値を超えた攻撃したんだ。当たり前といたら当たり前だろう。

「ゲバババ!!所詮は人間かあ!!」

見るとザリガニは立ち上がつてゐた。

歩があれだけ殴つたのにあまり効いていないようだ。

「ゲババ!!お前の相手は後回しだ!まずはその奴を仕留める!!」

そう言つてザリガニは俺に目を向けてきた。

「ばっバカ!!アンタ早く逃げろよな!!」

隣でカーテンに包まったハルナが叫ぶ。

「ゲババ!!もう遅いわ!!」

そう言つてザリガニは俺との距離を一気に詰め、
残つた右腕を振るつてくる。

「飛翔!!」

歩も俺に向かつて叫ぶ………が

「おい、ザリガニ。お前まさか自分が俺より強いなんて……」

思ってるのか——

ブワツ!!!

「又オオオオオ!!?」

次の瞬間、ザリガニは吹き飛ばされ、再び黒板に激突する。

だが、さつき歩が飛ばして出来た傷よりも壁に深くめり込んでいる。

「ちよっ…」

「いつ、いつたい何したんだ!? アンタ!?」

歩はしゃべれず、ハルナは質問してくる。

「説明は後でするよ。とりあえず、

こいつをどうにかしなくちゃ」

そう言つて俺は「天翼」を広げた。

第7話 戦闘Ⅱ

「説明は後でするよ。とりあえず、こいつをどうにかしなくちや」

そうやって俺は「天翼」を広げた。

ザリガニは「天翼」を出現させたときの突風で黒板に埋まってるが、腕が動いているのを見る限り、まだ死んではないようだ。

「この前歩が倒したメガロ」「こいつらの総称」は確か、光る粒子になってたな。それまでは気が抜けない……か」

俺は気を引き締める。

するとザリガニが復活した様でこつちを見てきた。

「ゲバババ!! 貴様もどうやらただの人間では無いようだなあ!!」

ならば、なお更殺してやらんとなあ!!」

そう言うとザリガニは戦闘態勢に入ったのか、雰囲気が変わった。身体からは紫色のオーラみたいなのが出ている。

「メガロと戦うのは初めてだが……………」

ま、どうにかなるだろ」

「ゲババ!!行くぞ人間!!」

その声を合図にザリガニは再び距離を詰めてきた。

ザリガニの右腕が大きく振るわれる……………が。

「甘い!!」

ドゴツ!

俺はそれを「天翼」で受け止める。

「ゲババ!!受け止めただとオ!!」

「何言ってやがる、お前の目は節穴か?」

「ゲバア? 貴様何を言って……………!!?」

パキツパキツ、

言っている途中でザリガニは気づいた。

俺の「天翼」に触れている自分の右腕が凍らされている事に……………。

俺の〔天翼〕には強度を変える以外にもう一つ能力がある。

それは〔天翼〕自体の温度変化だ。

初めの頃は、少し冷たいか温かい程度にしか操作出来なかったが、

……ユーを守ると決意してから、この温度変化の特訓を密かに続けていた。

まだ瞬時に温度を変えることは出来ないが、さつき〔天翼〕を出したときからしてたから、

随分冷えてたみたいだ。

さらに〔天翼〕は触れたものにそれを伝染させる。

そのおかげで〔天翼〕の触れてる空気は冷え、霰が出来ている。

そして今ザリガニはその〔天翼〕に触れている、となれば当然凍っていくわけだ。

「ゲババ!!腕があ!!腕があ!!」

ザリガニはいきなり自分の腕が凍った事にパニックしており、右手をブンブン振りまわす。

俺はその間に今度は〔天翼〕の温度を急激に上昇させる。

「この人間」ときがあ!!」

ザリガニは凍った右腕が使い物にならないと判断し、歩にやっつたように右腕を俺に飛ばしてくる……………だが！

「少し判断が遅かったな！」

ジジジジジャツ！！

そう言つて俺は飛んできた右腕を「天翼」で文字通り真つ二つにした。

「はああああ！！！！」

ザリガニだけでなく歩とハルナも驚いている。

今のも「天翼」の温度変化。今度は逆に温度を上げて切り裂く。

熱断切つと言つたところか。

「きつ貴様あー！いつたい何者なんだ！！」

腕を凍らせたかと思つたら次は腕を熱で真つ二つに切るなんて！！」

ザリガニが震えた声で俺に向かって叫ぶ。

そりやそうだ、ただの人間に自分が追い込まれているのだから。

「よし、アユム！！今の内に魔装少女に変身しろよな！」

ハルナは今がチャンスと言わんばかりに歩に向かって叫ぶ。

……

……………

.....

魔装少女って昨日の晩になってたあれか？

あの歩の姿は……失礼だが気持ち悪すぎる。

でもまあ、あれにならんと歩は勝てないだろうし……。

それから導き出された答えは……

「呪文の時間は稼いでやるよ、歩」

「いやいや!! 飛翔なら倒せるでしょそのザリガニ!!」

「いやね……この温度変化、結構しんどのよ。」

しかも今回全力でやったからね。キツイからバトンタッチ、歩」

そう、「天翼」全体の温度を変化させるんなら疲労そこまでせんけど、

今回は「天翼」の一枚一枚の温度を変えていたから結構きついんだこれが。

なんせ6枚もあるから集中力を半端なく使う。

「くっ、分かったよ」

どうやら歩は渋々承諾してくれたようだ。

地面に刺さってるミストルティンを手に取り……構える。

「ノモブヨ、オシ、」

そして歩は呪文を唱え始めるが、もちろん……

「ゲバババ!! させるか!!」

ザリガニはこれ以上何かされては困ると歩の邪魔をしようと動く。

今アイツは歩しか見ていない、よって……

「悪役はヒーローが変身するのを待つのが礼儀だぜ!!」

俺は奴の懐に「天翼」を振るう。

ドガッ!!

温度操作はしてないから切り裂いたりは出来ないが、

これでも十分な威力だ。ついでに言うと言とうと強度を上げる特訓もしてる。

「ゲバア!!」

ザリガニは本日三度目の激突。これにくたばってくれたらいいんだが、

どうやらそう甘くは無いようだ。

「ハシタワ、ドケダ、」

そろそろ呪文も終わるな。

あきらめろザリガニ……………

「グンミーチャ、デー、」

相手がわるかった……………

「リブラ!!」

呪文が終わったと同時に歩の身体が光りだす、

その格好は、以前ハルナが着ていたピンクを基本とする

ヒラヒラの洋服つまり……女物だ。

「この格好だけはなりたくなかったんだがな」

「やっぱ似合ってるねーわ、歩」

「当たり前だろ！」

「そう怒るなって、歩。とつととあいつ倒してくれ」

そう言ってる俺は辛うじて立ち上がっているザリガニを指差す。

「ゲボボ!!俺は変態なんか殺されたくない!!」

……

……

……

「歩ひどいな」

「飛翔がとどめさせて言ったんじゃないか!？」

「いや、ザリガニの言う事が正論すぎて……」

「飛翔!お前も俺の事変態だと?!」

「その格好で言われて納得する奴が何人いると思ってるんだ!」

「それは言わない約束でしょお!!こんちくしょうがー!!」

今の会話で自暴自棄になった歩がザリガニに突っ込みつつ、ミストルティンで切りつける。

当然ザリガニに回避手段は無く……………

「ゲバアアアア!!こんな変態にイイイ!!」

そんな捨て台詞を残して光る粒子となった。

「で?どうすんだこれ…」

戦闘が終わってから俺と歩が見ているのは、

粉々になった机や椅子、傷だらけの壁と黒板、

グラウンドで何事かと話をしている多量の生徒であった。

「これを修復するなんて無理があるぞ、歩」

「ど、どうすれば!?!」

歩は唸った。まあ普通こうなるわな………
で、マジでどうしよう。

そんな俺たちの前にアホ毛が顔を出した。

「ハルナ？」

歩が呼ぶ。

「ほら、アユム！とつとと修復しろよな！

魔装少女ならそんなくらいできる。あと記憶も！」

「ほ、ホントかハルナ！」

「当たり前じゃん、魔装少女舐めんよ！」

そうやってハルナは胸を張った。

「魔装少女ってのはそんな事までできるのか、

だとしたら、ほぼ連続殺人の犯人は魔装少女で間違いないな。

目撃者がいないのは記憶を消していたからだろう」

飛翔は一人、歩たちの修復作業を見ながらそう考えていた。

さっきのメガロ「歩に聞いたところ名前はザリー」

との戦いが終わり俺と歩、ハルナは相川家に帰宅した。

家ではユーがいつも通りバラエティ番組を見ながらお茶をすすっていた。

「ただいま、ユー」

『!』

俺の声を聞くとユーはこちらを振り返り立ち上がった。

「?どうかしたユー」

するとユーは俺の身体を見回すようにして、

手や足、肩などにふれる。

「えっ、ちよっ、ユー?」

一通りふれてユーがメモを向ける。

『怪我不い?』

そうメモには書いてあった。

そっか怪我の心配してくれてたんだ。

ホントに優しいなユーは……………。

「大丈夫だよ、ユー。何処も怪我してないから」

『本当?』

「ユーに嘘なんてつかないよ。

心配してくれてありがとな、ユー〔ニコッ〕

そうして俺はユーの頭をなでる。頭をなでるとユーは顔を赤くして俯いた。

ホント可愛いなユーは。

「飛翔、お取り込み中悪いんだがどいてくれ、俺らが入れん」

「あ!!ごめん歩!」

そう言っつて俺はその場を退く。

「まあ、微笑ましいが……………程々にしとけよ」

「くそう、この手の話題で歩に勝てん…」

どうも恋愛話は苦手だ。俺が女性恐怖症だからなのか？

「ああ、そうだ。今日の晩御飯何がいい？」

そう悩んでると歩からの質問。

「卵焼き以外!!」

『肉がいい』

「何でもいいよ」

各々好きな事を言うな、この家庭……。

「じゃあ、豚キムチでいいか？」

うん、歩、ナイス案だ。

「いいんじゃないか？」

「うん!それがいい!!」

『OK』

「じゃ、作ってくるからちよつと待っていてくれ」

「ああ歩、俺も手伝うよ」

「おう、助かる」

「料理のレパートリー増やしておきたいからさ……」

「？」

ユーにいろいろな料理作ってやりたいからな。
こつちも頑張らないと。

「お待たせ〜。出来たぞ」

「それじゃ——」

「『『いただきます』』」

今日はいろいろあつたから結構腹が減ってるんだよ。

でもあの戦闘のおかげで、現時点での力が分かったから収穫は上々だ。

「お！この豚キムチうまいな」

「まあ、飛翔のカレーには敵わんがな」

「いやいや、逆言うとな俺カレー意外ほとんど料理作れんし」

「得意料理一つあつたほうが、いろいろ作れるよりいいと思うぜ」

「そうかな」

そう言ってもらえると結構嬉しい。

クイツ、クイツ、

不意に服を引つ張られた。

まあ、見なくても分かるけど。

『おかわり』

「うん…はいどうぞ、ユー」

『飛翔ありがとう』

「どういたしまして」

「アユムツ！めっちゃおかわりだ!!」

どうやらハルナもお腹が減っているようだ。

「はいよ…ほれハルナ、おかわり」

そう言つて歩はハルナにお茶碗を手渡す。

「そういえば、今日の卵焼き、うまかったぞ」

そう言つて歩はハルナの頭を撫でる。

「うっ！あ、当たり前だ。あたしを誰だと思つてんだよ」

ハルナは照れているようで顔を赤くしていた。

そんなハルナを見て歩は微笑んだ。

「うっ、何笑ってんだよ、キモツ、死ぬ！バーカッ！」

！ハルナその言葉を使っちゃ……………!!

パンツ！

そう思ったときだった。ユーが身を乗り出してハルナの頬を叩いたのだ。

歩とハルナは驚いている、そりやそうだ、大人しいユーがこんな行動に出たのだ。

そうしてユーはメモを突きつける。

『軽々しくその言葉を使うな』

ユーの突きつけたメモにはそう書かれていた。

〔ユー……………〕

そう、ユーはこの言葉の重さを知っている。

自分の力でそれを言ってしまうえば簡単に奪えてしまう。

だからこそ…ユーは命の重さを誰よりも知っている。

「ハルナ……………その言葉、そんな簡単に使わないでくれ。」

言葉は時としてどんな武器や兵器よりも強力なものになるんだ。

だから……………な」

「うっ……………」

「飛翔、ユー……………」

それから沈黙、きつと考えてくれているのだろう。

そして……

「だああああ!!」

ハルナはやけ食いしだした。

ユーもいつも通り、食事に戻った。

「アユムツ!!めっちゃめっちゃおかわりだ!!」

そう言つて再び歩にお茶碗を渡すハルナ、

歩はハルナのためかかなり大盛りになっていた。

『飛翔、おかわり』

「はいはい、ちよつと待つてくれな。

………はい、どうぞ」

『ありがとう』

「やっぱ食卓は楽しくないとな…」

さっきの事が嘘のように、

食事が再開されたのに安堵を感じながら自分の食事に戻った。

「私は味噌汁を頂きたいのですが？」

はい？

気づくとそこには長い黒髪をなびかせた美女が座っていた。

……誰？

第8話 夜の翼

どうも、飛翔です。

今俺は絶賛驚き中です。皆で楽しく食事してたんですが、

「トラブルもありましたが……」

そこにいきなりの侵入者！

髪型はポニーテールで髪の色は黒、

瞳は綺麗なヒスイ色〔緑っぽい色〕をしており、モデルのような体つきと言った所。

まあ、とりあえず……

「はい、どうぞ」

「ありがとうございます」

俺はついできた味噌汁を美女〔？〕に手渡す。

まあ、なんだ……これが俺の性格だから。

食事が一区切りしたところで、

「でさ、アユム。こいつ誰？」

ハルナが歩に聞いていた。

「ハルナの知り合いじゃない、という事は……」

そう思い俺はユーに視線を移す。

ユーは美女「？」に気にすることなく食事を続けていた。

「ユーの知り合いでもないか……」。

となると冥界人でも魔装少女でもないな……

前にユーから聞いたユーを狙う奴は大体聞ける。

残りはメガロか吸血忍者だが、メガロは動物がモデルだからそれは無い。

となると……」

そこまで考えていた所で歩が美女「？」に話しかけた。

「えつと………とりあえず自己紹介とかしてくれないか？」

恐る恐る歩が尋ねる。

「わかりました。私の名はセラフイムです」

凜とした声でセラフイムさん「？」は答えた。

「……………」

ズズズツ。

セラフイムさんが味噌汁をすする。

「……………」

……………沈黙。

「えー今ので自己紹介終わり!？」

歩も面食らっているのか固まっていた。

そんな自己紹介に不審に思ったのは俺らだけではなかった様で、

「それだけ？好きなものとか特技とか、趣味とかあるじゃん」

ハルナが俺らの思っていた事を代弁してくれた。

「好きなものは秘剣、燕返し」

それが好きなものなの？

「特技は秘剣、燕返し」

それはまあ、わかるけど……………

「趣味は秘剣、燕返しです」

.....

「全部秘剣、燕返しなんですな」

歩は少しあきれたようにセラフイムさんに言う。

「それで、セラフイムさん？は何者なんですか」

歩は再びセラフイムさんに問いかける。

「はい、私は吸血忍者です」

セラフイムさんは淡々と答える。

「やはり吸血忍者か。となると目的は……」

「セラフイムさんはユーに何か御用ですか？」

俺は少し威圧しながらセラフイムさんに問いかける。

セラフイムさんは少し驚くような顔をしたが、すぐに表情を戻す。

「なるほど、貴方が一時期噂されてたナイトウィング「夜の翼」ですか」

「ナイト……ウィング？」

歩とハルナは頭にクエスチョンマークを浮かべていた。

「ああ、歩、俺前にユーと一緒にいた時期があるって話したよな」

「ん？確か中3の秋から冬にかけてだっけ？」

「そうそう。その時からユーにちよつかいかけてくる奴等がいてさ、

そういう連中捻ってたら、いつの間にかそんな風に呼ばれるようになってたってわけ」

ホント何処の厨2病野郎のネーミングセンスだよ。

「噂では藍色の髪に、天使も嫉妬するような純白の翼を纏っている、

と聞いていますが………」

「翼は常時出してるわけではないから。」

「……………で、セラフイムさんはユーに何の用?」

「安心してください。私は争いに来たものではありません」

するとセラフイムさんはユーに向き直った。

「ユークリウツド・ヘルサイズ殿、お力をお借りしたい」

セラフイムさんは続ける。

「私の任務はヘルサイズ殿へ同行を求めることと、その命を守る事にあります。

我等の中には、強引にヘルサイズ殿を連れて行くこうとする輩もいるようです。

ですが私たちはヘルサイズ殿のお力に敬意を払っております。

出来るだけ、ご本人の意思でお越し願いたい」

するとユーはメモを見せてくる。

『歩、かまわない、追いつ返せ』

まあ、そうなるわな。

すると歩はちよつと迷っているのかユーに尋ねる。

「ユー？何もそこまで、話ぐらい聞いても……」

トントン、

ユーはメモをペンで叩く。

『歩、かまわない、いいから追い返せ』

……あの一瞬で書き足したのか。

そこまで速いとは俺も知らなかった。

するとセラフイムさんが会話に入ってきた。

「さつきから、あなたはヘルサイズ殿のなんなのですか」

歩を見ながらセラフイムさんは話しかける。

「いや、俺はなんというか」

歩が言いよんどんでいるとユーがメモを突き出す。

『下僕』

そのメモを見ると歩はうな垂れた。

まさかお兄ちゃんとか言ってほしかったのか？

「ならば私も下僕となりましょう。私のことはセラとお呼びください」

セラフイムさんはそう言う………が

『下僕は1人でいい』

ユーのメモにはこう書かれていた。

それでもセラフイムさんは諦めないようだ。

「でしたら、あなたはいいりませんか？ どう見ても頭が悪そうですし」

「なんだと……」

………

「でしたら、あなたはいいりませんか？ どう見ても頭が悪そうですし」

セラフイムさんは俺にそういうところちを睨みつけてくる。

おいおい、いきなり人の悪口言うのかこの吸血忍者様は……………。

ゾンビだつて怒る時は怒るんだぜ、

そしてしばらく睨み合った後、

「どこか、人のいない所へ参りましょう」

セラフイムさんから申し出てきた。

ああ、やってやる、ゾンビだつて言われればなしは趣味じゃないんだよ

「ああ、のぞ「待て、歩」……………」

そう言つて飛翔が立ち上がる。

でもいつもと雰囲気が違う、なんか触れるものすべてをピリピリさせるようなそんな
感覚。

「セラフイムさんとは俺がやろう」

「私は別にどちらでもかまいません」

飛翔の急な提案だがセラフイムさんは受け入れるようだ。

「じゃあ、場所を移動するか」

飛翔は居間を後にしようとした……………が

クイツ、クイツ、

ユーに服を引っ張られたようだ。

『飛翔、危ない事しないで』

ユーの瞳は俺から見ても少し悲しそうに見える。

そんなユーに飛翔は優しく頭を撫でた。

「心配ないよ、ユー。怪我なんかしないから。

ちよつと待っていてくれ〔ニコツ〕

『……………』

それでもユーは迷っているようだ。

するとユーは何か思いついたのか、メモを突き出す。

『帰ってきたら、一緒にお茶』

そうメモには書いてあった。

飛翔は少し驚いた顔をしてから笑顔になった。

「わかったよ、ユー。約束だな、

帰ってきたら一緒にお茶を飲もう」

コクツ、

ユーは約束したからか、今度は俺にもわかるような嬉しそうな顔を見せていた。

まあ、承諾は得ることができたようだ。ユーは飛翔の服から手を離した。

「さあ、早く済ませよう。この後俺は約束もあるしな」

「……………参りましょうか」

きっとあの約束は、必ず帰ってきてというユーの本心なのだろう。

セラフイムさんは飛翔の即KO宣言に少々お怒りのようだ。

そんなピリピリした雰囲気ですら飛翔とセラフイムさん、俺と何故かついてきたハルナの4人で家を出た。

ところ変わって墓地。

こんな真夜中の墓地に人が来る事なんて有り得ないからここを選んだ。

この間、ハルナ落下事件があったところだが、

今では壊れた墓石も、抉れた地面も元通りになっている。

10メートルぐらい離れたところで俺とセラフイムさんは対峙する。

少し離れたところには観客なのか、歩と何故かハルナもいる。

「飛翔！油断すんなよ！」

「羽の人〜！またあれ見せてくれ！」

歩は応援してくれているが、ハルナはどうやら俺の「天翼」を見に来たようだ。

ちなみに羽の人っていうのは、ハルナが俺に付けたあだ名だ。

それにしてもまんまだろハルナ……………。

そう思っているとセラフイムさんが話しかけてきた。

「噂の「夜の翼」の力、見定めさせてもらいます」

「なあ、セラフイムさん、一つ聞いていいか」

「別にかまいませんが……………何か？」

「さつき歩に言ったこと……………本気か？」

「当たり前です。あんな頭が悪そうな者、ヘルサイズ殿の下僕に相応しくないかと……。」

なぜあんな者がヘルサイズ殿の近くにいるのかさえ理解できません」

「そうか……。わかった、これで俺も吹っ切れた。」

あとなセラフイムさん、俺は大ッ嫌いな事が一つある」

「はい？こんなときに何を……。」

「それはな……。」

人のことを知らずにイ！その人のことをわかったように話す奴だ!!」

ブワツ!!

俺は〔天翼〕を出現させる。

これにはセラフイムさんも驚いているようだ。

この〔天翼〕の力を感じているからか、セラフイムさんも戦闘態勢に入ったようだ。

さっきのヒスイ色の瞳が赤い色に変色している。

しかも手には近くの葉っぱが集まり、剣のような形を取っている。

だが今の俺には関係ない……………

「俺の親友を貶した罪！そっくりそのまま返してやるぜ!!」

そう言って俺は〔天翼〕を展開し、空中へ浮上。

真夜中の空を背景に俺の〔天翼〕は神々しさを増していた。

俺は相手の出方を伺いながら〔天翼〕の温度変化を開始する。

「今見ている限り、セラフイムさんの武器はあの葉っぱ……………。なら」

「空中に浮上して逃げたつもりですか!」

そういうと辺りの葉っぱがセラフイムさんの元へ集まり、

大きな緑色の翼を作り上げた。

「へえ、そういう使い方があるんだ」

「行きますー！」

その掛け声を合図にセラフイムさんがこちらへ飛んでくる。

スピードはかなり速い。

「秘剣、燕返し！」

セラフイムさんが剣を振るう。

と自分で思ったときには既に「天翼」にセラフイムさんの剣がぶつかっていた。

「咄嗟に「天翼」でガードしたから良かったが……。いったいどれだけ速い攻撃なんだ」

今の攻撃は辛うじて防げたが、結構危なかった。

「ほう、今の攻撃を防ぎますか……」。

どうやら噂はあながち間違いでもなかったようですね」

「それはどうも。でもそんな悠長にしないで良いのか？」

「何を……?!?!」

やっと自分の剣が溶かされている事に気づいたようだ。

ザリガニの時みたいに一枚一枚変化させず、「天翼」全体の温度を変化させているか

ら、

集中力をそこまで使わずに済む。

そして今回は温度を可能な限り上昇させた。

当然、葉っぱで作り出した剣はあっさり溶けていた。

セラフイムさんは一旦離れ距離をとった。

「いったいどの様な術を……………」

半分溶けた剣を修復させながらセラフイムさんは呟く。

「戦いで敵に情報を与えるほど、俺は優しくくないんでね」

「滅らざ口を……」

そういうとセラフイムさんは再び辺りの葉っぱを集め始めた。

「秘儀、百鬼漸殺!!」

するとセラフイムさんの辺りに集まっていた葉っぱが無数の刃と化した。

「いきますー!でりやあああ!!」

その葉っぱはセラフイムさんの号令によって俺へと放たれる。

「飛翔!」

「羽の人!」

歩とハルナが叫ぶ……………が

「無駄だ」

そうやって俺は「天翼」をおもいつきり振るう。

今の「天翼」はフレアモード「温度が高い状態の天翼」であり、当然この状態で振るえば空気に熱が伝わり、

ゴシューウウ!!

「なっ!!?!」

大きな熱の風が生まれる。

それはセラフイムさんが放った葉っぱを全て焼き尽くし……

「ぐっ!!」

セラフイムさんの元へ到達した。

セラフイムさんは咄嗟に葉っぱの盾を作ってダメージを軽減したようだ。

「先ほどから私の攻撃が全く通用しない!?!」

セラフイムさんは吸血忍者でも上位の実力者かもしれない。

そんな自分の攻撃が、いとも簡単に受け止められているのだ。

もう既に俺との実力差を感じているかもしれない。………だが

「参ります!」

セラフイムさんは再び剣を生成し、距離をつめてくる。

「まだくるのか………」

「秘剣、燕返し!?!」

おそらくセラフイムさんの渾身の一撃だろう……しかし、
「こつちも、約束があるんでねえ!!」

俺は6枚の「天翼」を一斉に操作した。

ガキイイイイイーーン

「私の……負けですね」

セラフイムさんは負けを認めた。

セラフイムさんの剣は俺に届くことなく「天翼」によって溶かされていた。

それに対して俺の「天翼」は剣を防いでいる以外の5枚の翼は、

それぞれがセラフイムさんの急所の一手前で止まっている。

完全に俺の勝ちだ。

「まさかここまでの実力とは……………」

セラフイムさんは剣を消しながら言う。

「セラフイムさんも十分強いよ。最初の一撃は危なかったから」

俺の言葉にセラフイムさんは首をふる。

「いえ、それでもあなたの方が随分と上手だ」

それからセラフイムさんは俺に頭を下げる。

「先ほどの事、謝らせて貰います。」

あなたの友人に失礼な事を言ってしまった、申し訳ありませんでした」

どうやらこの人は真っ直ぐな人らしい。

その瞳は既に綺麗なヒスイ色に戻っていた。

「わかってもらえたならそれでいいよ、セラフイムさん」

「私のことはセラと呼んでくれて結構ですよ」

「じゃあ俺も飛翔で構わないよ」

「では、良い試合をありがとう、飛翔」

「こちらこそ、セラ」

「おーい。二人とも！怪我ないか？」

セラと友好が深まったところで歩とハルナがよつて来た。

「あつ、そうだ。歩、セラと試合しろよ」

俺は近づいてきた歩に言う

「はあ!?!なんで!?!」

「だって元々ユーの下僕を決める戦いだろ?俺ユーの下僕じゃないし」

うな垂れる歩にセラが口を開く。

「そうでした、ではあなた、早々に構えなさい」

「はあ、わかったよ」

そう言つて対峙する二人。んで俺はというと……………

「じゃ、俺は先帰るから」

「はあ!?!なんで……………つて聞くまでもないか。わかったよ、また後でな」

「おう、じゃあな」

そう言つて俺は「約束」のために一足先に家に帰った。

「ただい．．．」

俺が玄関を開けるとそこには．．．

『おかえり』

ユーが直立不動で立って待っていた。

「ユー、もしかしてずっとこの状態で待ってたの？」

するとユーは少し俯きながらメモを突き出す。

『飛翔と一緒にお茶飲みたかったから』

ユーにしてはめずらしく長い文章。

それほど楽しみにしてくれていたのか、ユー……

「ああ、約束だ。一緒にお茶飲も「ニコッ」

『「コクツコクツ」』

俺はユーと一緒に居間に入った。

しばらくユーと一緒にお茶を楽しんでいるとセラが現れた。

「えっと………何しに来たの？」

俺は理由がわからなかったのでセラに尋ねる。

「歩との勝負は負けました。」

ですが、任務は遂行しなければなりません」

ああ、なるほど、俺は勘違いしてた。セラって全部が全部真っ直ぐなんだ……。

「つて?!?何でここにいるんだよ」

その後帰ってきた歩と1悶着あったがセラが歩の下僕になる事で話はまとまった。

その事で歩が調子に乗ったので

「うるさいですよ、このクソ虫」

と罵倒された。

ん？ 助けないのかって？ 当たり前だろ、100%歩が悪いもん。

余談

「あ、ユーちよつとこっち向いて」

ユーが飲んでいたお茶が唇の端から零れていたので、ハンカチで拭いてあげた。

「よし、もういいよユー」

『ありがとう』

ユーの顔は少し赤くなっており、

その顔にとてもキュンときたのは内緒だ。

第9話　メガロ

セラが相川家の居候になったのは昨日の話。

何故か最近相川家に居候するのがブームにでもなっているのか、よく人が集まる。それに厄介事も増えているようだ。

まあ……居候の俺が言えることでもないが……

そんな考えに浸っている間に学校も終わりを告げて、今は放課後。

「あ、飛翔！今日は先に帰ってくれていいぞ」

「ん？歩なんか今日予定あつたっけ？」

見るとそこには歩と……そうそう、織戸がいた。

「織戸の友達が俺に会いたいわって言ってるらしいから、ちよつと行つて来るよ」

「織戸の友達が？」

「まあな」

「んじゃ、行つて来るわ」

「おう、わかった」

そう言つて歩と織戸は教室の出口へ向かう。
すると途中で歩がこつちを向いた。

「そうだ、悪いけど晩飯作つといってくれない？」

「ああ、別に構わないよ」

「ありがとな」

そう言つて歩は先に出た織戸の後を追つて行つた。

「晩飯……何にするかな？」

「ただいまあ」

家に帰るとユーはバラエティ番組を見ながらお茶を、

ハルナは床をゴロゴロといつもの光景が目に入った。唯一違うのはセラが家事をしている所だ。

俺はユーの隣に腰掛けた。

『おかえり』

ユーはメモをこちらに向けてくる。

「ああ、飛翔帰ったのですね」

「あ、羽の人じゃん」

セラとハルナも声をかけてくる。

「おや、あの産業廃棄物は一緒ではないのですか？」

セラが聞いてくる。

ちなみにセラがこのような罵倒で人を呼ぶのは歩だけだ。

前は怒ったけど、最近歩の態度見てると自然と良いように思ったのよ…

「歩なら今日友達に会いに行ってくるから遅くなるって」

「そうですか」

セラはこれ以上興味が無いのかキッチンへ歩いていった。

次に俺はユーに視線を向ける。

見るとユーはバラエティ番組に夢中のようにだ。

「面白い？」

俺はユーに聞いてみることにした。

するとユーは少し考えた素振りを見せた後、メモを見せる。

『星2つ』

「まあ、そこそこって所か」

コクツ

首を縦に一振り。

するとユーは再びメモを突き出す。

『飛翔も飲む?』

ユーからのお茶のお誘い、俺はもちろん

「うん、飲むかな」

それから俺もお茶を飲みつつ、ユーと一緒にバラエティ番組を見た。

「こんな日が毎日続けばいいのにな……」

俺は心からそう思った。

しばらくそうして時間を潰していると、急にハルナが立ち上がった。

「羽の人、葉っぱの人！メガロが出た！」

そう言つてハルナはミストルティンを手にする。

「ノモブヨ、オシ、ハシタワ、ドケダ、グンミーチャ、デー、リブラー！」

聞き覚えのある呪文をハルナが唱える。

しかし…

バリッ!

「うきゅ!」

やはりというか、なんというか…

ハルナの衣装は光を放って消えてしまった。

「まだ、魔力が復活し切れてないんだ…」

悔しそうにするハルナだったがそう落ち込んでいてもいられない。

「兎に角ハルナ、メガロの居場所に案内してくれ」

「わかった、あたしはアユムを呼んでくっからな!」

そう言ってハルナは家を飛び出した。

……あれ?居場所聞いてないんだけど。

「京子、相川に会えて嬉しかったみたいだ」

京子ちゃんの病院からの帰り道、織戸は話しかけてきた。

「そうか？」

「ああ、京子あんまし笑わなかったからな…」

ホントありがとな相川、来てくれてよ。

「気持ち悪いな、お前がまともに感謝するなんて」

「最初にも言ったが、京子は俺のもう一人の妹みたいな奴だ。

感謝するのは当たり前だろ？」

織戸はそう言つて笑顔を向けてくる。

「たまにこいつがかっこよく見えるんだよな…」

そう思っていた俺に思わぬ声がかかる。

「ふん！こんな奴の何処がいいんだか」

その声の出所を見て俺は固まった。

栗色の髪のアホ毛をつけた、Yシャツにピンク色のヒモパン姿のハルナがそこに立っていた。

「お、おい相川、誰だこの極上美人は」

織戸はハルナを見て呆然と立ち尽くしていた。

そんな事言われても俺には困る。というか説明したくないぞ、絶対面倒な事になる。

「ハ、ハ、ハ……っち見んなー!」

ハルナはYシャツで必死にパンツを隠そうとしているが、隠れきつてない。

そんな事思っていると急にハルナが叫んだ。

「アユムー来るー!」

そう言っつてハルナは俺の背中に隠れる。

来ると言われてもなあ…

いつも空から来ていたようなので今回も空を見てみるとする。

すると、いた。全長二千メートルくらいの超ドでかいシロナガスクジラ…のメガロが。

「あれは! トリップルAランクの常敗無勝のシロナガ!」

いやいや、それひどいでしょ!?! あの子魔装少女達にいじめられてるんじゃない!?!

「あ、ちがった、えつと……悪魔男爵シロナガ！」

とにかく困ったら悪魔男爵なのね、ハルナは…

「てかちよつと、このでかさは異常じゃない？」

「妖怪にはこのような者もいるのですね」

また再び別の声、振り返ってみると…

「よつ、歩。悪い、晩飯の用意なんもしてないわ」

「早くしてください、このクソ虫」

1人は藍色の髪を靡かせ、天使のような翼を生やした飛翔。

もう1人は昨日から家にいる吸血忍者のセラだ。

「さて、ユーも家でご飯待ってるんだし…

出来るだけ早く片付けないと」

「お前は何でもユーが基準なんだな」

「…………ハルナ、アイツどうやったら倒せる？」

「〔あからさまに話題変えた!!〕」

今セラと意識が通じたような気がしたよ。

「そんなの簡単じゃん。…首を落とせば死ぬだろ？」

…ちよつと待て、あんなでかい奴の首を落とすだど？

「いいんじゃない？一番わかりやすいし」

「そうですね」

「ちよ！俺以外やる気なんですかあああ！」

俺は心の中で一人叫ぶが、皆やる気だ。

「ホントにそれでいくのか？」

俺は再度、皆に確認する。

「それが一番だと俺は思うよ。あんなデカイ奴に小細工なんて通用しないだろうし」

「それは確かに……」

「それとも歩には何な別の策があるのですか？」

「……………それで行こう」

別にほかに考えつかなかった訳じゃないよ！飛翔の意見が尤もだったからだからね

！

「それじゃ、いきますか」

そう言つて飛翔は「天翼」を全開に広げた。

「では、私も参ります」

セラも瞳の色が真紅になり、手には葉っぱの剣が握られている。

俺も構えるが……

「歩は変身しろよ？ そうしないとお前飛べもしないだろ？」
「…やっぱ？」

そう、魔装少女になれば飛ぶ事もできる。いろいろ便利ではあるがあの格好が…
飛翔は俺の気持ちを察してくれたみたいで俺に声をかけてきた。

「大丈夫だ歩。どうせ俺ら以外皆忘れるから…」

「それ地味にフォローになってないよな？」

でも飛翔の言うとおり魔装少女にならないと無理だ

「…しゃーなしだな」

俺はミストルティンを構え、長ったらしい呪文を唱える。

「ノモブヨ、オシ、ハシタワ、ドケダ、グンミーチャ、デー、リブラー！」

ピンクを基本としたコスチュームが俺を包む。

変身が終わり皆に視線を移す。

「気持ち悪いですね、とてもとても気持ち悪いですね」

「まあ、ドンマイだ歩」

「うん、変態だな」

三者三様の答え。

もう俺鬱で死にそう……………

「歩、落ち込むのもわかるが今はアイツを倒すぞ、愚痴は帰ってから聞いてやるから」
そう飛翔が声をかけてくれた。

ありがとう、飛翔！お前だけだよ、俺の味方は！

「さて、歩も準備できたし、さっさとやりますか！」

飛翔の合図で俺らはシロナガへ向かって飛んだ。

「さて、どうやって首を落とそうか？」

俺は巨大なシロナガのメガロを見つつ、呟いた。

全長二千メートルに達するメガロの首はそれでもなくともデカイ。

直径100メートル位はあるだろうか。

「そうだな…よし二人とも、うまくいくか分からんが試したいことがあるんだ」

魔装少女に変身してへんた…強くなった歩が俺とセラに話しかける。

「何ですか、歩」

「セラ、お前あのメガロの首に切り込みを入れることできるか？」

「それは可能ではありませんが…その後どうするのですか？」

「俺がその切り込みに向かって蹴り込む」

「なるほど…歩のゾンビパワーで切り込みを入れた首を強打して、

そのまま切り落としちまおうって事か」

現状その考え浮かばないし…

「よし、それでいこう。俺はセラのバックアップをするよ」

「頼みます、飛翔」

「二人とも頼んだぞ」

「任しとけて」

「では、いきますー！」

そう言って俺とセラはシロナガメガロに向かって飛ぶ。

シロナガは俺達の接近に気付いて紫色のオーラを出した。

次の瞬間、シロナガの口からビーム「？」が飛び出してきた。

「ちよ?!」

「くっ！」

俺は「天翼」で受け止め、セラはすばやく避けた。

セラが避けた光線は山を貫いて空に消えた。

俺は受け止めたはいいが、かなりキツイ。

「大丈夫ですか、飛翔！」

「ああ、なんとか…つて！」

俺がシロナガに視線を移すと、潮を吹いていた…

そう、あのシロナガが潮を吹いたのだ。当然、

「歩、飛翔、町が！」

そう、あんな量の潮が町に落ちたら一大事だ。

しかもシロナガ自体、下に下りてきている。間に合わん…！

そう思った矢先、シロナガの降下が止まった。

何かに当たったようだが、一体、

「天才魔装少女！ハルナちゃんに任せろ！！」

そんな声のするほうを見るとハルナが病院の屋上で何かしてる。

「でかした、ハルナ！」

歩が叫ぶ。どうやらシロナガの降下を止めているのはハルナのようだ。

とにかく助かった。今のうちに俺とセラがシロナガに近づく。

ウオオオオ！！

シロナガが接近に気付いたようで、さつきでた潮を鞭の様にして攻撃してくる。

だがそんな事関係ない。

「悪いが、ここは通らせて貰うぜ!!」

俺は「天翼」をフリーズモードに変え、触れる潮を簡単に凍らせてセラの援護をする。これが俺のもう一つのモード、フリーズモード。

「天翼」の温度を低くし、触れるものを凍らせる。

おかげで「天翼」の周りは潮の結晶が大量に出来ていた。

シロナガは潮の噴出を諦めたのか、次はさっきの光線を撃ってきた。

「それも無駄だったの!」

俺は「天翼」の強度を最大限にし、光線を弾く。

セラもうまく避けているようだ。

20発越えたあたりでシロナガは光線の連射を止めた。

「今だ!セラ!」

「はい!」

この隙を逃さずセラはシロナガに突っ込む。

突っ込んでいる間にセラは自分が持っている葉っぱの剣を巨大にしていた。

そしてシロナガの元に到達する頃には俺の身長3、4倍の大きさになっていた。

「いきます…秘剣、燕返し!!」

そう言うのとセラはその剣を振るい、シロナガの首に大きな切り込みを入れた。

「歩!!今だ!」

俺は歩に向かって叫ぶ。

「おう、サンキューな二人ともお!」

そう言つて歩は空へと飛んだ。

そして歩が米粒よりも小さくなつた所で上昇を止め、

シロナガ目掛けて降下してきた。

「つけえええええええええつ!!」

そう叫びながら歩はシロナガの首に蹴りを入れる。

すると、思っていた以上に歩の蹴りが強かつたのか、

シロナガの首がほぼ消し飛んでいた。

ドンだけだよ……

シロナガが光る粒子になったのを見届けてから、俺とセラは地面に降り立ち、歩は元の姿に戻っていた。

「はあく。疲れた」

「お疲れさん、歩」

「クソ虫の割には、よくやりましたね」

「それはどうも」

セラからの賞賛を歩は軽く受ける。

すでに日は地面に差し掛かっており、結構な時間が掛かっていたようだ。

「さてと、帰るか」

歩がそう言って歩き出す…が

「アユム！危ない！」

ハルナの声とほぼ同時に歩の胸が貫かれる。

その貫いたものの元を辿ると…アrikuiがいた。

「あれは…ヘビー級メガロ、モハメド・クイー！」

ハルナが指差しながら言う。

「へビー級って…さっきのシロナガよりも強いのかよ!？」

俺はそう思いつつ、再び「天翼」を出現させる。

「くっ?!秘剣、燕返し!」

セラは既にアリクイに向かって攻撃を開始していた。

歩は貫かれた胸が直ったようで、再びミストルティンを手にとつて魔装少女になろうとするが、

「魔装少女になれるのは24時間に一度だけだ。あたしが変身できれば…」

そう言われて歩は唇をかみ締めていた。

「という事は今まともにやれるのは俺とセラだけか…」

ガキツ、ガキツ、

セラは葉っぱの剣とアリクイの拳がぶつかる。まるで鉄同士を打ちつけているかのようだ。

刹那、セラがこちらに下がってきた。

「飛翔、少しの間代わってください。血が足りません」

そう言ったセラの手には、剣をつくっていた葉っぱがただの葉っぱに変わる。

「わかったセラ。さがってる」

俺はセラの前に立つ。セラは歩とハルナの元へ歩いていった。

「さてと、セラが回復するまでこのアリクイの相手を1人でしなくちゃいけないのか…」
そう思いつつ俺はアリクイと対峙する。

「さつきセラと戦ってるのを見てたが…こいつ、スピードが半端じゃない」
そう、セラが弱っていたとはいえ俺達の中で一番速いセラと対等にやりあってたんだ。

到底俺の速さじゃ話にならない。

ジャブ、ジャブ、ジャブ、

アリクイはさつきからジャブの練習をしている。

とりあえず…

「先手必勝！………つて言いたいのが、ちよつと待て」

俺は「天翼」を広げて空中へ一旦浮上。

「早急に温度変化を開始、モード、フリーズ」

俺は温度変化を開始する…が

「はあ?」

なんとアリクイが飛んで俺にパンチを入れようとしてる。

「いやいや、念のためと思って空飛んだのに…」

俺はそのパンチを「天翼」で受け止める。

「まだ完全じゃなかったが…まあ、上出来だ」

「天翼」に触れたアrikuiの腕が徐々に凍っていく…が

バキツ!!

「嘘!？」

なんと腕を凍らせた氷を軽く砕きやがった。

そしてそのまま俺にパンチを繰り出してきた。

「クソツ、だが！」

俺は「天翼」6枚全てでアrikuiのパンチに応戦する。

「速さで勝てないのなら…手数で補う！」

ドガツ、バギツ、ガツツ!

アrikuiのパンチと俺の「天翼」がぶつかり合う。

「温度変化は続けてんのに、コイツ…氷を簡単に割ってきやがる！」

フレアモードにもさつきしてみたが、アrikuiは何食わぬ顔で平然とパンチを続けてきたので、

再びフリーズモードに戻したが結局効いていない。

力で押ししてもいいのだが、さつきのシロナガとの戦いでほとんど力を使っているか

ら、

身体への負担が半端ない。

「飛翔！下がってください！後は私が！」

そろそろ手詰まりと思っているとセラが復活したようで声をかけられた。

「すまんセラ！後は頼む！」

そう言つて俺はアリクイを「天翼」でなぎ払つてから地上に降りる。

セラは俺と入れ違いでアリクイに向かつていく。

「秘劍、燕返し！」

セラはいつの間にか両手に剣を生成し、二刀流でアリクイと戦っていた。

その2本から繰り出される燕返しは強力のようだ。

だが、アリクイも負けておらずセラの剣にジャブを当てている。

「秘劍、燕尾返し！」

ジャブと秘劍の打ち合いが続いていたが、突如アリクイが距離をとった。

「何を……」

するとアリクイは両手からエネルギーの塊を出していた。

しかし、セラも負けていない。

「あれから私も鍛錬したのです」

そういったセラの手から剣が消え、辺りに葉っぱが舞う。

その葉っぱはその身を刃とさせ：

「秘儀、百鬼漸殺!!」

その号令とともに刃と化した葉っぱがアrikuiを襲う。

アrikuiは逃げようとしたが、足に当たり、腕、胸、頭と次々刃が突き刺さった。

全身に刃が刺さり動かなくなったアrikuiに背を向け、セラがこちらに歩いてくる。

「ばか！何終わつたみたいな顔してんだ！」

ハルナはセラに向かって叫ぶ。

「そうだ、メガロは死んだら粒子になるんだった！」

と次の瞬間アrikuiはセラの懐に入り込み、アツパーを放っていた。

しかし、アツパーが捕らえたのはマントがついた丸太だった。

忍者御用達の変わり身の術だ。

肝心のセラは既にアrikuiの後ろに陣取っていた。

「秘剣、龍尾返し」

そうセラが言った瞬間、アrikuiは縦に真っ二つとなつて粒子になっていた。

「とりあえず、終わり…か？」

歩は俺に近づきつつ言った。

「さすがにこれ以上は来ないでほしいな」

歩は苦笑しつつ言っていたが、俺は考えていた。

「今の俺の力じゃまだまだだ。もつと強くならないと、

…ユーを守るって誓ったんだ。こんなところで、満足してちゃいけない」
大切な者を守るため、俺は決意を固めた。

余談

「ただいまあ」

『おかえり』

皆でメガロを倒して家に帰ってきたらユーが出迎えてくれた。

『飛翔、疲れてる?』

「ああ、今日は連戦だったからね」

シロナガにアリクイ、でも俺はそいつ等よりも強くないと…

『飛翔、無理しちゃ駄目』

ユーはズンと顔を近づけ…近づいて!!?

「ちよ!?!ユーの顔がこんなに近づい!」
「ボンツ」

そこから俺は晩御飯まで眠っていたらしい…

第10話　ボーリング

シロナガ&アリクイ戦があつたのが既に昨日の事。

今日は歩と織戸に誘われて、ボーリングに行く予定になっている。
今はマスク・ド・ナルドで昼食を買っていた。

「いらつしやいませ〜」

俺達は普通にマスク・ド・バーガーセットを頼んだが、

「^ズ一緒にマスクはいりませんか？」

店員がウルウルした目で俺と歩を見てきた。

俺は…すぐにギブアップしたよ。歩も熱心な勧めに負けたようだ。
俺と歩はバーガーセットとマスクを手に先に行つた織戸を追つた。

昼食も食べ終わって、俺達はボウリング場にきていた。

友達とボーリングなんて何年ぶりかなんて思っていると、準備が出来たようだ。

「よおし、相川、井之上！漫画本一冊賭けて勝負だ!!」

織戸はボールを持ちながらそう言った。

「ホント、織戸といるとこれが日常なんだって思えてくるな」

俺は心の中で日常を与えてくれる織戸にちよつと感謝した。

そうしてしばらくボーリングを楽しんでいると、織戸が急にしゃべりかけてきた。

「おい見ろよ、二人とも！あそこのグループ！」

そうやって織戸は隣のレーンを指す。

「だらっしやあああ！」

バコーンッ!!

聞き覚えのある声がある、既に歩はうな垂れていた。声ができるほうに視線を向けると……

「よし、やっぱあたし天才だな！天才美少女悪魔男爵だな！」

アホ毛をピコピコと揺らしているハルナに、

「ハルナ、少し静かにしないと。周りの人のことも考えてください」

そのはしやぎっぷりにブレーキをかけているセラに、

『……「グビツ」』

ボトルのお茶を飲んでいるユー……

相川家の居候集団が全員集合していた。もちろん俺を含めて……

「あそこのグループ滅茶苦茶レベル高いなあ〜」

織戸はそんな事を言っている。

「あの人は美人だなく。俺の好みドストライクだ！」

織戸はセラを見てそう言った。

「どうやら織戸は大人っぽい人が好きなようだ。」

「あの子は爽やかなストライフ」

次に織戸はハルナを見て言った。

……ハルナさん、ボーリングの玉をそんな風に回さないで、皆見てるよ。

「しかし、あの子は何故鎧を着てるんだ？」

「…あ、そうか！コスプレで撮影なのか！」

次はユーを見てそんなこと言ってた。

織戸、ユーにだけは手を出させないからな。

「あれ、待てよう？もし俺と歩とあの3人が一緒に住んでるってばれたら…」

やばい、本格的に、ガチで、真面目にやばい。

歩と目が合う、

「(なんとしても、ばれちゃいけない!!)」

俺と歩の心がシンクロした!!

そして歩はおもむろにさっき買ったマスクを…被るのお!?

「(ごめん、歩。俺こんなところでそれは無理だわ…)」

それで無くとも人見知りなんだ！こんな目立つの無理い！

マスクが効いているのか、まだハルナ達はこちらに気づいてなかった。

ユー達は全員がストライクという恐ろしいスコアだった。

それに比べ俺達は一般的で、

順位は歩、俺、織戸の順だ。今は歩が投げてる。

歩はストライクこそ取れなかったがきつちり全部倒してスペアを取った。

俺と織戸が拍手していると、

「へたくそ、集中力不足もいいところ」

…ハルナがいた。

「ばれたああああ!!絶対ばれたよねこれえ!?!」

織戸は美少女が来たことに感激してどう言葉を掛けようか迷っているようだ。

「えっと、どちらさまですか?」

歩はまだ騙すつもりでいるようで必死に落ち着いた声を意識して尋ねていた。

「何言ってるの?」

ハルナはわかっていないようだ。万事休す!

「ハルナ、あなたの番ですよ」

セラさあああん!ありがとう、ホント助かったよ!

ハルナは自分のレーンへ帰っていった。危機は…

「ところで歩、何故そんな気持ち悪いマスクを被っているのですか、

いつもの3倍は気持ち悪いですよ」

『飛翔、何してるの?』

…すぐ目の前でした。

「まったく、相川も井之上も、俺に隠し事してたなんてな…」

結局、セラとユーの一言が決定打となり織戸に説明を要求された。

まあ外国から来たって言って誤魔化しているけど。

「悪いな、こつちもバタバタしてたからさ」

「俺も歩の家に厄介になってる身だから、何も言えなかったんだ」

今俺達はデパートに来ている。

ハルナがパーフェクト出したから服を買ってくれと歩に強請ったからだ。

「まあいいけどよ、話してくれまし…」

で、アレはしたのか？なんつうかこう、トキメキイベントは…」

織戸は俺等だけにきこえるように聞いてくる。

「そんなことしたら、俺は今頃バラバラになってるよ」

歩は深刻そうな顔つきで言った。

これにはさすがの織戸も動揺しているようだ。

「トキメキイベントか……」

「ただいまあゝ」

スーツ姿の俺をエプロンを着たユーが出迎える。

「おかえりなさい、」

「ご飯にする?」

お風呂にする?」

それとも……………」

「お、おい! どうした飛翔! 顔が真っ赤だぞ?」

「き、気にしないでくれ」

「そ、そうか」

〔何考えてんだよ俺! これじゃただの変態だぞ!〕

俺は変態という名の紳士になった覚えは後にも先にもない!〕

結局しばらく顔は真っ赤のまんまだった。

「あー。アレ可愛い! アユム見て!」

ハルナはさつきから服を選んで歩に見てもらってる。

セラもユーも服を選んでいて、織戸は男として服の選別を手伝っているようだ。

「ユーも楽しそうだな……ん？」

そこで俺の視線はある店に向いた。

「今日は楽しかったなく、んじやまた学校でな、相川、井之上！」

あれから歩はハルナとセラに服を買って、俺達はデパートを出て織戸と別れた。

ユーにも俺が「ほしい服があつたら言っていよいよ」と言ったが、

フルフルと首を横にしか振らなかつたので、ユーの服は買っていない。

「楽しかったな、ボーリング！また行こうな！」

「そうですね、また行きましょう……4人で」

「もしかしてそれ、俺を抜いてですか……」

歩とセラとハルナは俺とユーの少し前を歩いている。

「丁度いい……」

「なあ、ユー」

『何?』

「そう言つてユーは俺のほうを向く。」

「あの、さ、これ」

「そう言つて俺は小さな赤い袋を取り出してユーに渡す。」

『これは?』

「ユーは不思議そうに袋を見つめる。」

「開けてみて」

「コクリと頷いてユーは袋の中身を出す。」

「ユーが手に持っていたのは木で出来た三日月が印象的なネックレスだ。」

「ユーは驚いた顔で俺のほうを見る。」

「さっきのデパートの服売り場の隣が小物ショップでさ。」

「それでその……ユーに似合うと思つて……」

「そう、さつき皆が服を選んだときにたまたまそのネックレスを見つけたのだ。」

「作りもいいし、値段は……ちよつとしたけど。」

『これを私に?』

「もしかして、嫌だった？」

俺は少し心配したが、

ユーが首をこれでもかと思うほど横に振ったので安心した。

『ありがとう、大切にする』

ユーはメモを見せた後、

ネットクレスを両手で握り締めながら嬉しそうな「俺がそう思っただけだが」顔をしていた。

「どう？アユム、可愛い？」

ハルナは先ほど買った服を着て歩に見せている。

「ああ、可愛いと思うぞ」

歩は少し照れているのか顔が少し赤い。

「だが、この猫耳ヘアバンドを付けてくれ！できればメイド服で!!」
「こんの変態!!」

…何時から俺の親友は変態になってしまったんだろう。
少し現実から目を背けるために居間へと視線を移す。

居間ではユーが俺からもらったネックレスを早速付けてくれている。
それ以外はいつもと変わらない居間の風景だ。

そう思っていると、歩が居間からどこか見ているのが目に映った。

「今日はピザを取るか〜♪」

「どうしたんだ歩。なんか急に〜」機嫌だな」

「いや実はね…」

そう言って歩が指差したのは玄関の方。

いったい何が…

そこではさつき歩が持っていたと思われる猫耳を装着したセラがいた。

「なるほど、確かにピザだ」

「だろ?」

セラの意外な一面を知った記念に……だ。

「いや、アルフレットガナーソンLなんて久しぶりだ！」

ピザを見て早々、ハルナはそんな事を言った。

「アルフレットガナーソンL？ハルナの世界の食べ物かな？」

そう俺が思っているうちにハルナはピザを一口。

「こ、これ、アルフレットガナーソンLじゃない!？」

食ってわかったのが、ハルナは落胆していたが

「あ、でもこれもうまいな！」

と言っていた。隣で歩が「いいのかよ……」と突っ込んでいたがハルナはピザを食べるのに夢中だ。

「歩、今日の命令の「今日一日わがままを言っていていい」というのはまだ有効ですか？」

セラが歩を見てそんな事を言ってきた。

「セラが服買ってたのってそれが理由か」

道理で今日は機嫌が良かったわけだ。歩のこと名前で呼んでるし。

「どうしたんだセラ?」

歩が尋ねるとセラは思い切ったような顔で話し出した。

「実は私、和食以外口にすることがないのです。

恥ずかしながらこのような食べ物は少々、その、怖いのです」

「大丈夫だよ、一口食ってみろって。うまいぞ」

「…吸血忍者たる者、いかなる敵が現れても臆さず戦うべし」

歩に背中を押され、

セラはまるで嫌いなものを食べる小学生のように目をつぶってピザを一口。

「…これは」

そうして目を開け一口、また一口。

「これほどまでとは…」

どうやら気に入ったようだ。

食卓はピザの登場で今日は一段と賑わっていた。

「ふい、ピザって言うのもなかなかうまいじゃん。アユム、携帯貸して〜」

「ほらよ」

ピザを食べ終わって、少し休憩しているとハルナがどこかに電話するようだ。

プルルルル、プルルル、

「あ、大先生ですか？——あ、そうですか。」

ではリフネイン年ライジング組、出席番号634526379番のハルナから連絡が

あったとお伝えください」

「いやいや、一クラス何人いるんだよ！」

6億?! 普通にどっかの国の人口だろそれ。

「はあく、アーティファクトは見つかんないし、魔装少女にはなれないし、

大先生とは電話できないし、最悪だ〜」

「なあ、ハルナ。そのアーティファクトってなんだ？俺も探すの手伝うよ」

テンションが落ちたハルナを励ますように歩は言う。

「アユムなんかじゃ見つけられないっつーの」

「それでも、1人でも多く探したほうが見つかるだろ？」

「名前はなんていうんだ？」

「うん、そうだな。確かにその通りだ。えっと名前は……キョウドウ、

いや……キョウフ、そう、キョウフって奴だ」

「ハルナは指をびしつと向けて言い放った。

「恐怖？それって形ある物なのか？」

「当たり前じゃん！こう白くて……四角い……」

「ハルナは身振り手振りで表現するが何かわからん。

「歩も分からないらしく、俺とセラに視線を向けてきたので俺とセラは首を横に振った。」

「まあ、見つかったら伝えるよ」

「あんま期待してないけどな」

ピンポーン。

突如相川家のインターホンが鳴る。俺は時計に目を向け時間を確認すると既に10時を超えている。

「こんな時間に誰だろ？」

ピンポーン。

「はーい、今でまーす」

歩は居間を出て玄関へ向かった。

「まさか織戸が来たりとか「ドゴオオ！」…!」

いきなり玄関の方から大きな音がした。

見に行こうと立ち上がると同時に、肩が血まみれの歩が居間に入ってきた…

第11話 再戦

「歩!!」

俺は立ち上がって居間に入ってきた歩を支える。

肩には何かに挟られたような跡があり、血が多量に出ている。

「おい、歩! しつかりしろ!」

『飛翔、歩を』

いつの間にかユーが隣に来ていて右のアーマーを外している。

「! ユーそれは!」

『大丈夫』

そうしてユーは歩の肩に右手で触れようとするが俺はそれを止める。

「駄目だ! それに歩はゾンビだからこの程度じゃ死なないよ、

敵は俺が倒すから……」

俺はユーが力を使おうとするのを必死で止める。

前にユーの力をすべて聞いていたので俺にはわかる。

ユーの手には傷を癒す力があるけど、それにも言葉の力と同じようにデメリットがある。

傷を癒す代わりにユーがその傷の痛みを受けてしまうんだ。

俺は真つ先に俺に対してこの力を使わないよう言った。

ユーを守るために戦った傷をユーに受けさせたら意味が無いからだ。

だからこそ、ユーにこの力を使わせてはいけない。

「ユー、なんだか知らんが俺は大丈夫だ」

そう言つて歩が1人で立つ。傷はまだ回復しきつていなかったが、

とりあえず大丈夫なようだ。

「おやおや、往生際が悪いですね……相川さん」

玄関から声が聞こえる、恐らく歩に攻撃した奴だろう。

俺は「天翼」を出現させ戦闘態勢にはいる。

「諦めて死んでください」

そう言つて声の主が居間に………つて

「ケルさんじゃないですか!」

「おや、これは…飛翔様にユークリウッド・ヘルサイズ様!

道理で最近見ないと思つたら、こんな所に…」

「え、何? 飛翔、コイツと知り合いなの」

ただいまケルさんを含め、状況を確認中。

ちなみにケルさんとは犬型のメガロである。

名前がケルベロス・ワンサードだからケルさんと俺は呼んでいる。

んで、状況を確認すると歩は一回冥界に来たのにこの世界に戻ってきたから、連れ戻そうとケルさんが来たようなんだけど、ユーの仕業ならOKらしい。

でもユーが伝えるのを忘れてたから………現在の状況に至るといわけだ。

「もう、それならそうと一言言っておいてくださいよ」

ケルさんは少し呆れた声でユーに言う。

『ごめん、忘れてた』

そういう大事な事は忘れちゃいけないと思うけど…

「でも危なかったんだよケルさん。」

ユーが歩に治癒の力使おうとしたんだから…」

「なんと！そうでしたか…誠に申し訳ない」

ケルさんはそう言うと言と頭を下げてきた。

「別にケルさんを攻めてるわけじゃないって！」

俺はそう言つてケルさんにお茶を渡す。

「そう言つていただけると、私としてもありがたい」

そう言つてケルさんは受け取つたお茶を飲む。

「つーか飛翔。誰なんだこの犬は？」

歩はお茶を飲むケルさんを指して言う。

「ああ、ケルさんはメガロだよ。」

俺とユーが前に一緒に居た時期に何度か会つてたんだ」

「んじゃ、いい奴なんだろう？」

「そうだけど…なんでそう思うんだ？ 仮にも歩を殺そうとしたのに」

「飛翔の知り合いに悪い奴なんかいないだろう？」

歩はさも当然のように言ってくる。

「ホント、歩はこういう時かっこいいよな…」

俺の中で歩の好感度が上がった所でケルさんが立ち上がった。

「それでは、私はこれでおいとまさせていただきます。

ヘルサイズ様には飛翔様がついているようですし、問題ないでしょう」

ケルさんはそう言うのと帽子を被って玄関へ向かう。

「駄賃代わりと言っては何ですが、近くで人の殺されているようなので、

その魂でも持って帰るとします」

「ちよ！ 待ってくれ！」

歩は行こうとするケルさん呼び止める。

俺も正直驚いてる。近くで人が殺されてるって…

「たぶん…俺を殺した奴だ！」

歩はケルさんの後を追って、殺人現場に向かっている。

俺も行くこうとしたのだが、

「悪い飛翔、これは俺の問題なんだ」

そう言われたので俺はついて行かなかった…いや、ついて行けなかつたんだ。

殺された歩本人にとっては自分で解決したいんだろう。

そんな思いが目に込められていたんだ。

『心配?』

隣にいるユーがメモを向けてくる。

「確かに心配だけど…大丈夫だっても思ってる」

『?』

ユーはわからないって顔してるな、無理ないか…

「俺は歩が無事に帰ってくるって信じてるんだ…」

「なにより、歩が犯人なんかには負けやしないさ。強い奴だよ、歩は…」
コクツつとユーは首を縦に振る。

「!」

『どうかした?』

「いや、なんでもないよユー。」

「そうだユー、ちよつとコンビニ行ってくるけど何か食べたい物ある?」

『プリン』

「プリンね、わかった。じゃ、行って来るね」

『いってらっしゃい』

「いつまで隠れてる気なんだ？」

家の外から俺だけにわかる殺気出しやがって……」

コンビニへ歩き出して近くのパークで俺は後ろを振り返り言った。

コンビニに行くというのは建前で戦う場所を変えたかったのだ。

あそこにはユーやハルナがいる。セラは戦えるかもしれないが庇いながら戦うのは不利だ。

だからこそ、人気のないこの公園にやってきたんだ。

すると一人の女の子が出てきた。俺はその姿に見覚えがあった。

「まさかお前だったとはな……」

紫色の短髪をなびかせ、手には前回の2倍はあると思われる斧が両手に握られていた。

「ユーに聞いたが名前はヘレだったか……また懲りずにユーを狙ってきたのか？」

俺はへれに喋りかけるがへれは返事を返そうとしない。

「もしそうなら今度は遠慮なく「ギヤしゃアアア!!」……!!」

いきなり奇声を上げたかと思つたら次の瞬間一気に距離を詰めてきた。

両手に持つている巨大な斧を振りかぶる。

「つたく、皆奇襲が好きだなおい!？」

ガキイイーン!

俺は「天翼」を出現させて斧を防ぐ。

へれは追撃せず、一旦後ろに下がった。

「ウアウアウアたたたたししし……」

なんか知らんが様子がおかしい。

いつもは独特な話し方で喋ってくるのにそれがない。

身体は異常なほど震えているし、言葉にならない声を発している。

だが、

「ネクロ………マンサーを……よこせえ!!」

そう言いつつ再び突っ込んでくる。

「上等だ、何があろうと………」

ユーに手出しさせねえぞお!!」

俺は「天翼」を広げ空中へ飛び、ヘレの攻撃をかわす。

その隙に俺は温度変化を行う。

〔温度変化を早急に開始…モード、フレア〕

相手の武器が刃物類ならフレアモードで熱断切させるのがいいと思つてのフレアモードだ。

俺はヘレに向かって急降下、ヘレに向かって「天翼」を振るう。

ヘレは受け止めるつもりでいるようだ。

〔掛かった!〕

俺は確信した。これで相手の武器が使い物にならなくなる。

魔装錬器が無くなれば、魔装少女の力はほとんど無いに等しい。

それはハルナを見ていてわかつている。

これでだいぶ戦いを有利に進められる、そう思った………が、

ガキイイイン!!

「なっ!?!」

なんとヘレは……いや、正確には斧が俺の「天翼」を受け止めた。

温度変化で高温にしておいたのに……だ。

「死ねエエエ!!」

ヘレは両手に持っている斧をこれでもかと言わんばかりに振り回す。

ガッ、ガッ、ガッ、ガッ!

「クソッ、どうなってるんだ!?!前に戦った時とは比べ物にならないほど強い!」

俺はヘレの攻撃を「天翼」で受け止めているがかなりキツイ。

確かに斧が違うのからかもしれないが、

それでもこの力は異常だ。とても彼女が出せるような力じゃない!

「ちい!」

ブワッ!

俺は〔天翼〕をへれに振るうが、
ガキツ！

へれは攻撃していた斧をまるで棒切れのように巧みに操り、
〔天翼〕の攻撃を受け止め、再び攻撃に移る。

ガツ、ガツ、ガツ、ガツ、ガツ、ガツ！

へれの攻撃は勢いが落ちるどころか、さらに速く、強くなっていく。

このままでは俺も危ない・・・

〔どうやったら彼女に：：！〕

そう思つて彼女の腕に視線を移すと、

そこには血が多量なんて言葉では表しきれないほど噴出していた。

「お、おい！お前何やってんだよ！」

俺はへれに話しかけるが返事は返つてこない。

代わりに返ってくるのは凄まじい力で振るわれる斧だった。

〔クソツツ！どうなつてんだ!?!〕

いくらなんでもあの量はやばいの限度をとつくに超えてる。

普通なら、こんな巨大な斧を持つことさえも無理なはずだ。

しかし彼女は、今この瞬間も凄まじい勢いで斧を振るっている。

「ちいー！」

俺は一旦下がって、へれと距離をとる。

へれはすぐに追撃しようとはせず、その場に佇んでいる。

その足元には…大量の血で地面が真っ赤に染まっていた。

「クソが！そこまでしてユーの力がほしいのかよ！

ユーは…ただ普通に暮らしたいだけなんだよ！

そのために、周りに迷惑掛けないように感情を押し殺してるんだぞ！！

そんな彼女の日常をお前に奪う事なんて…俺が許さねえぞ!!!」

俺は駄目元でへれに声を掛ける。

しかし…返ってきたのは意外な言葉だった。

「……たす…け…て…！」

「！」

俺は予想外な言葉に度肝を抜かれた。

彼女の顔を見ると、彼女の瞳には涙が流れていた。

彼女は消え入りそうな声で続ける。

「もう…何も……いらない…から…手出し…

しない、から……たす…けて…」

へレは前に聞いたときの口調ではなく、

ただただ…か弱い、何処にでもいる女の子そのものだった。

「お前…一体何が「うわああああ!!!」…！」

再び奇声を発しへレが突っ込んでくる。

俺は「天翼」で彼女の攻撃を防ぐ。

再び一進一退の攻防。しかし、

ガキッ!

一瞬だが腕の動きが止まった!

俺はすかさず「天翼」を振るう…

「……たす…け…て…！」

「！」

さっきのへレの言葉が頭をよぎる。

それによって動きが一瞬止まってしまった。

それがいけなかった…

ザッ!

その隙にヘレは一気に俺の懐に入り込み、

「！しまっ!？」

ザシュツ!!

「ぐっ!ぐああああ!!」

俺の横腹から血が噴出する。

その痛みで俺はその場に倒れそうになるが、何とか思いとどまる。
不幸中の幸いは真つ二つにならなかったことだろう。

「ぐっ!がはっ!」

今まで骨折のような大怪我なんてした事なかったから、

これほどの痛みを感じるのは初めてだ。

しかし、

「何で…追撃、して…こない?」

今なら俺は怪我に意識がいつているから、確実に殺せるはず…

なのに彼女は斧を下ろしたまま、俺の前で静止している。

「もう……やめ……て……」

彼女は再び喋りだした。

「痛い……いた、い……」

見ると彼女の腕はもう血で真っ赤に染まっている。
動かせるのが奇跡なくらいに……

「わた、し、は……………操り……………人形……………なんて……………いやあ」

〔操り……………人形?〕

よく見るとヘレの腕や足、頭の後ろから何か光るものがある。

〔あれは……………糸、いや……………針金か?〕

傷を手で抑えつつ、俺は見る。

確かに……………針金だ。細くて今まで見えていなかったが、確かにある。

「うー……………うアアアアアア!!」

針金が動いたと思ったら、再びヘレが動き出した。

〔あの針金が……………ヘレを操ってるのか……………なら〕

俺は一気に空へ上昇した。

ヘレも俺の後を追う。巨大な斧をヘレは俺に向かって振るう。

〔よし、これを試すに……………この身体だと少しヤバイけど……………〕

そんな事、言っ……………られな、い〕

息も荒く、血もドンドン出てくる……………正直飛ぶのさえ苦しい。

それに……………まだ数回しか試した事のない技だ、失敗するかもしれない。

だが…

「俺は……大切なものを守らなくちゃいけないんだよお!!」

俺のその声を合図に俺の「天翼」を構成している羽一つ一つが、

へレに向かって飛来する。

これが俺の開発した新しい技だ。と言ってもセラのパクリだけど…

「きヤアアア!!」

既に斧を振りかぶっていたへレに回避する方法は無く、

無数の羽が襲いかかる………と思われた。

…が、

プチンツ!!

何かの切れる音がした瞬間、へレは地面に落ちていく。

俺はそれをギリギリの所でキャッチする。

今の攻撃はへレに対してではなく、その後ろにある針金を切断するためだ。

「な……ぜ?」

へレは驚いた表情で俺を見てくる。

「…俺は、どうしようも…ない、ほど…お人よしなんだよ。

人を、殺す、事、なんて…出来ないような、な」

俺は息も絶え絶えに続ける。

「それに、ユーなら……殺す、事は、望んで……ない、から、な」

俺の言葉を聴いてヘレは……笑った。

「やっぱ、アンタ……偽善者、だわ……」

その言葉を最後に彼女は気絶した。

ガクッ！

俺はそれで気が抜けてしまったのか、肩膝をついた。

「こりゃ、本格的に……マズイ、か……」

ヘレを地面に置き、一先ず持っていたハンカチを自分の横腹に当て止血する。

今すぐヤバイと言うわけではないが、時間が経てば大惨事だ。

「でもコイツをおいて行く訳にも……」

正直、俺よりコイツの方が危ない。

腕はもう使い物にならないかもしれないが、命が助からないわけじゃない。

死にそうな奴を見捨てるなんてユーはしない、例えそれが敵だとしても……

ユーはそれほど優しい子なんだ。

「でも、……いつを運ぶ力は残ってないし「すみません」……！」

どうしようか迷っていると、綺麗な声が響いた。

振り返ってみるとそこには緑の短髪を綺麗に整えてある髪形の女性が立っていた。

「単刀直入に申し訳ありません。私の名前はエルスと申します。」

マテライズ魔法学校の受付をやっております。今日はその子を捕らえにきました」
礼儀の見本のような言葉で自己紹介をする女性。

「マテライズ魔法学校：おそらくハルナの通っている学校か：

とりあえず、敵の襲撃とかじゃなくて良かった」

そうして俺は地面に横になっているヘレを指差す。

「あの子の…事ですか？」

「そうです。彼女は私達の世界の法を破る事をしました。」

よって、拘束するのです。この世界の住人である貴方にまで危害を加えて…」

そう言つてエルスと名乗る女性はヘレの元へより彼女を抱き上げた。

俺は咄嗟に聞いた。

「その子…どう、なるんですか？」

女性は一旦考えるような素振りをして口を開いた。

「そうですね…まず、100年は牢屋入りでしょう」

「なあ!？」

それって事実上終身刑じゃないか！

「この世界で一般の人に危害を加えてはいけないのに、彼女はそれを破りました。当然の処置かと…」

女性は淡々と語る。

俺は…

「俺は、危害なん、て…加えら、れて、無い」

息も絶え絶えに言う。

「何を言っているのですか？」

女性は少し驚いた顔をして聞いてきた。

それでも俺は

「加え、ら、れて…無い」

そう言った。

「…」

女性はしばらく俺を見たのち

「わかりました。それでは、失礼します」

ポウンツ!!

その言葉を最後にその女性とヘレは消えてしまった。

「ホント俺って…」

お人よしだよな」

『飛翔の帰りが遅い…』

私は時計を見ながら彼の帰りを待っていた。

歩が帰ってきて、私の力のことを聞きたいと言ってきたので、

私は少し迷ったが、全部話す事にした。

話を聞き終わった歩は、

「そんなこと気にしないよ、それにユーには飛翔がついてんだろ？」

と言つてくれて嬉しかった：

それが既に10時をとつくに回っていて、今は12時にさしかかろうとしている。

『まさか、飛翔の身に何か「ただ……いま」……！』

玄関から飛翔の声がした。

『良かった、少し遅くなっただけなんだ』

そう思つて私は玄関に向かった：

でもそこにいたのは

血を流している飛翔だった。

「なんとか、帰ってこれたな」

歩の家の前で何とか辿り着いた。

正直もう限界だ。足はフラフラしっぱなしだし、意識も朦朧とする。

それでも何とか玄関のドアを開ける。

「ただ……いま」

何とか声を振り絞って出した。正直歩に出てきてほしい……

ユーにこんな姿見せたら、絶対に自分を責めるから……でも現実はどううまくいかな
い。

でてきたのはユーだった。

ユーは俺の姿を見るとすぐに駆け寄ってきた。

『飛翔！その傷！』

ユーは必死にメモを突きつけてくる。

〔マズイな……もう意識が……それでも……〕

『すぐ手当てするから!』

「ユー……心配ない、か……ら……」

そこで俺は意識を失った。

第12話 犯人

「……………んっ……」

目に朝日がしみる。俺は重たいまぶたを何とか開けることに成功し、辺りを見回す。

すぐに目に入ったのはユーだった。

俺が寝ているベットに寄りかかったまま寝息をスヤスヤたてて寝ている。

俺は意識があつたときのことを思い出す。

「確か……あの魔装少女と戦って、怪我して帰ってきて……」

駄目だ、そこから気絶しちまったのか」

俺が頭の中で思い起こしていると、部屋のドアが開いてセラが入ってきた。

「……飛翔、起きたのですね」

セラは起きていた俺に声を掛けてくる。

「ああ、今さっきな…」

「それで…何があったのですか？」

セラはユーを起こさないように毛布をかけ、問いかけてきた。

「…以前ユーを狙っていた奴がまた襲ってきたんだ」

「そうでしたか。しかし、飛翔ほどの者があそこまでの怪我をするとは思えないのですが…」

それに、一度撃退した相手なのでしょう？」

「あり得んほど力が上がっていた…でもそれはソイツ自身をも苦しめていた」

「自身も？」

「操られていた、と言うのが正しいかな。実際その子には戦う意思が無かった…」

俺はあの時のヘレの顔を思い出した。

ただどうしようもなく、戦い続けるだけ…

それがどれだけむなしい事か、

「とりあえず、ヘルサイズ殿に感謝しておいてください。」

飛翔が気絶してからずっと起きて看病していたのですから」

そう言つてセラはユーの方を向く。

ユーの瞳の下には薄っすらと隈ができていた。

俺は眠っているユーの頭を撫でる。

「心配かけて、ごめんな。守るって約束したのにな…」

すると俺の声に反応したのかユーが瞳を開ける。

ユーは俺が起きているのを見るとメモを突き出してきた。

『起きてても大丈夫？』

「ああ、大丈夫だよ…」

それとユー、少しだけ治癒の力、使ったでしょ」

『…』

俺がそう言うとユーは俯いた。やっぱり…

そう思って俺は患部に手を当てる。

〔天翼〕 以外は普通の人と変わらない俺にしては、傷の治りが早すぎる。

完全に治せばれると思って少しでとどめてあるけど、俺には分かる。

「全く、俺は情けないな。その力は使わせないって思ってたのに…」

『情けなくなんか無い！』

ユーにしてはらしくない、強気な態度でメモを突き出す。

『飛翔は、いつも私を守ってくれてる』

「ユー…でも俺は」

『飛翔が…』

ユーは俺の言葉を遮り、メモを突き立ててくる。

『飛翔が死ぬのは…嫌』

ユーはメモを突き出してから俺があげたネックレスを握り締めていた。

「バカか俺は、いつもユーに心配かけてよ…」

そうしてまた俺はユーの頭を撫でる。

「ありがと、ユー。おかげで助かったよ…」

怪我治ったら、ユーの好きなもの作ってあげるよ」

するとユーは安心したみたいでいつもの調子でメモを見せてきた。

『カレー』

「それでいいの？遠慮しないで、なんでも良いんだよ？」

俺がそう言うがユーは首を横に振る。

『飛翔のカレーがいい』

俺は少々呆気にと取られたが、ユーがそう言うならそうするまでだ。

「わかったよ、ユー。約束ね〔ニコツ〕」

俺は何故か顔を赤くしているユーの頭を撫で続けた。

「……私はお邪魔のようですね」

「い、いやセラさん！これはその……！」

ユーとカレーを作る約束をした後、俺は歩にここ最近の出来事を聞いた。俺は気絶してから丸一日寝ていたとユーから聞いたからなんですけどね……なんとハルナが探していたアーティファクトが京豆腐だったらしい。

キョウフツて名前違うじゃん：

それでその京豆腐、前に歩がお見舞いに行った織戸の友達の京子ちゃん〔？〕が用意してくれたらしく、

今夜9時にハルナの先生である大先生に渡しに行くらしい。

そして現在時刻は8時20分。

「んじゃ、飛翔。病み上がりで悪いけど、皿洗い頼むな」

歩は立ち上がりながら俺に言う。

「大丈夫だよ。ユーのおかげでだいぶ良いから」

「そっか、じゃ俺行つてくるから」

そう言つて歩は、京豆腐の入ったビニールを持って家を出て行つた。

その後をハルナがついて行くのを見たことはスルーしておいた。

俺が皿洗いをしているとセラが台所に入ってきた。

「どうしたんだ、セラ？そんな慌てて…」

「ヘルサイズ殿が歩の元へ行ってきたと…」

見るとセラの手にはミストルティンが握られていた。

「歩が戦ってんのか!？」

「ええ、そのようです。私は行きますが飛翔は此処で待っていてください

今の飛翔では戦場に立つには身体が持たない…」

俺が行こうとするのをセラはそう言って止める。

「心配いりません。では私は行きます」

そう言ってセラは無数の葉っぱに囲まれたかと思うと、消えていた。

「…まあ、歩とセラなら大丈夫かな」

俺は自分に言い聞かせつつ、皿洗いに戻った。

「ふう〜終わった」

さすがに5人分全員の皿の量は結構あった。

お茶でも飲もうと居間に俺が入ると、いつもそこでお茶を飲んでいるはずのユーの姿が無い。

「あれ、トイレかな？」

そう思ったがちやぶ台に視線を移すと一枚のメモ。

『少し行ってくる』

そうメモには書いてあった。

数十分前…

俺は大先生との待ち合わせ場所である墓場に来ていた。

「やっぱり此処は静かで良いな」

ゾンビになつてから妙に静かなのが気に入っている。自分でも分からんが：

そんな事を考えていたが、不意に看板の所に人影が見えた。

こんな時間にこんな所に来るのは、ゾンビか待ち合わせだけだろう。

そう思つて俺はその人影に声を掛けた。

「大先生ですよね？頼まれていた物を「グシャー」……え？」

俺はいきなり取られた行動に驚くしかなかった。

大先生だと思つてたのに、そこにいたのは……

今俺を刀で刺した京子ちゃんだった。

「しぶといですね、相川さん」

お前かよ……

「貴方はあと何回殺せばいいんですか？」

俺を殺したのはお前だったのかよ！

「ノモブヨ、オシ、ハシタワ、ドケダ、グンミーチャ、デー、リブラー！」

最近では聞きなれた呪文を京子ちゃん、いや、京子が唱える。

呪文が終わると同時に京子はコスプレ衣装に包まれた。

右手には剣、左手には木刀〔仕込み刀〕が握られていた。

ヤバイツと思つてはいるが、何故か身体が動かない。

「そんなちつぽけな魔力で私と戦おうなど笑止です。結界1つで動けないんですか？」

記憶操作が効かなかつたのには多少驚きましたが…まあ、もう関係ないですよね〜相

川さん」

そうして京子は俺の心臓に剣を突き立てた…が、

俺は横腹に衝撃を受け、その場に転がる。

「アユム…アユム！」

どうやらタツクルしてきたのはハルナらしい。

俺を心配してくれているのか、ありがと、と口を動かす事もできない。

「なるほど、ハルナが…道理で記憶操作が出来ないわけです」

京子の言葉を見無視し、ハルナは呟く。

「なるほど結界か、なら…えい！」

ハルナが俺にチョップすると次の瞬間俺は動けるようになった。

「で、アユム。コイツ誰？」

「俺を殺した魔装少女様だ」

「アユムの敵?…だったらあたしの敵だな」

ハルナと俺は構える。

「ふふ、たった2人で私に勝てるので「いいえ、3人です」…!」

そう言うのと辺りに葉っぱが舞い、セラが現れた。

「ヘルサイズ殿に言われて来てみれば…敵は人間ですか」

「心配すんな。アレは人の皮を被った化け物だ」

「そうですか…貴方も大変ですね、この町は私がいた里よりも殺し合いが多いようです」

そう言うってセラは戦闘モードに入る。

「あれ?その目…私と同じじゃないですか」

そう言った京子の目も真紅に染まる。

「どういうカラクリだ?」

「分かりませんが…関係ありませんね!」

そう言うってセラが京子に向かって走る。

「秘剣、燕返し!」

セラの必殺技が放たれる…が、京子は簡単に弾き返す。

「これが秘剣?なら、私の秘剣を見せてあげましょう!」

京子がそう言った途端、2つの竜巻が出現してセラを襲う。セラもこれには耐え切れず、後ろに弾かれる。

「セラ！大丈夫か」

「何とか…歩、貴方も手を貸してください」

「ああ、わかった」

俺はセラが持つてきたミストルティンを持ち、セラと並ぶ。

最初に飛び出したのは俺だ。

「おらああー！」

〔250パーセント！〕

ゾンビの力で振るうが京子はあっさりとかわす。

それでも俺はミストルティンを振るって京子に迫る。

ガキツ、ガキツ、

京子は俺の攻撃を受け流すようにしてかわす。

力の差が歴然だなこりや…

そう思っているといつの間にか竜巻が俺の両側から襲って来た。

「ぐ、あああああああー！」

身体がすり潰される…

「あははは！バカですな〜。」

さて、このまま刻んであげましょうか？」

「それは困るな！」

そう言つて俺は残っている力で京子に抱きつく。

攻撃から逃げられないように：

「秘剣、燕返し！」

凜とした声が響き、俺と京子の身体を葉っぱの剣が貫く。

俺はゾンビだから死なんが、京子は別だ。

「そん、な……」

京子はそのまま地面にひれ伏した。

竜巻も消えている。何とか勝てたみたいだ。

「終わったようですね」

そう言つたセラがこちらに歩いてきて、俺の胸に飛び込んだ。

「おいおい、何——」

俺は目を疑つた。セラの背中には剣が突き刺さっており、

それを持つているのは今殺した少女——京子だ。

「お前……なんで」

「残念でしたね。私は後10回ほど死ぬますので……」

「生体の宝珠……」

ハルナが何か呟く。

「死んだ者を生き返らせるアーティファクトだ。

生きてる者に使うと死を一度無効に出来る……」

「ふふ、その通りです。ハルナ」

「なんだよ、じゃあと10回も殺さないといけないのか!？」

そう思っている俺に京子は剣を向けてきた。

「今度は消し炭なんてどうでしょうね!」

そう言つて火の玉が飛んでくるが……俺達に届く前に消滅した。

「あは! やつと来てくれましたね……ネクロマンサーさん」

見ると京子の視線の先にはユーがいた。

京子はユーを確認すると大量の魔法弾のようなものをユーに飛ばす。

しかしユーは手を払うだけでそれを消してしまった。

京子は魔法が駄目とわかるやユーに突っ込んでいった。

ガキッ!

ユーは京子の剣をガントレットで防ぐが、一撃の重みに耐え切れず膝を崩す。

続いて京子は蹴りを入れユーは避けられずに後方に飛び、ユーはフラフラしながら立ち上がっていた。

「なるほど、その防具は魔力を消す力がありますが…扱う人間が弱すぎです」
京子はそう言っただけ息をつく。

「もしかして、ユーの戦闘能力は低いのか？」

確かに考えてみれば、飛翔がユーを守るなんて事しないはずだ。

ユーに自分の身を守る力が無いから、飛翔が守っていたのか？

再び視線をユーに向けると、ユーは落ちていたミストルティンを拾い上げていた。

「まさか…!？」

ユーが何かを呟いたと思ったらユーはピンクのコスチュームに変わっていた。

「そうか…俺がハルナの魔力を奪ったんじゃないかと、ユーが奪っていたんだ！」

そう思っているとユーは魔装少女の姿で京子と打ち合っていたが、

ユーがこちらに飛んで来た。

「魔装少女になってまだこの程度ですか」

京子は物足りないと言った表情でユーを見ている。

でも、戦力が増えた事は確かだ。

俺はユーの隣に立つ。

「ユー、俺も一緒にたたか——」

するとユーは地面を指差す。そこには砂利で文字が書かれていた。

『逃げろ、邪魔』

「でもユー、アイツは10回も殺さないよ——」

そこでユーはまた地面をさす。

その目には大きな決意が込められているようで、俺は頷くしかなかった。

「本当に大丈夫なのか……」

大木の方へ戦場を移したユーと京子を見て、俺は心配だった。

そして俺はユーの所へ行こうとするが、セラが袖を掴む。

「待ってください、貴方が行っても足手まといです」

「でも、もしユーに何かあったら……俺は飛翔になんて言えばいいんだよ」

セラもそれを感じ取ったのか、少し目を伏せていたが言葉を続ける。

「しかし、今行っても逆にヘルサイズ殿の力の邪魔になるだけです」

「ユーの力って……言葉のか？」

「そうです。見てください」

そうしてセラが指差すと、京子は膝から崩れ落ち、

ユーはチェーンソウを地面において両手で頭を押さえている。

昨日の夜ユーから力のことは聞いていた。

魔力、不老の血、治癒、そして言葉。

ユーの言葉は絶対実現する…

「ユーの言葉は対象者を選べないのか…」

「その通りです。そして今、ヘルサイズ殿はこう言葉にしているのです」

『死んで』

その言葉一つで人が死ぬ。

それを知っていたからユーも飛翔も「死」って言う言葉に反応してたのか…

激しい光が墓場に瞬いた。

見ると何かが空から落ちてくる。

コスプレの衣装が消えてしまっているユーだ。

「まずい！」

俺は急いで落下地点に入る…が

ブワッ！

ユーは地面に届く前に空で静止した。
いや、静止したのではなく受け止められたのだ…空で。

「まったく…何が『少し行ってくる』だよ」

そこには夜中には一層光り輝いて見える純白の6枚の翼…

「心配かけさせるなよ、ユー」

藍色の髪を靡かせた飛翔がいた……

第13話 約束

「心配…掛けさせるなよユー」

俺はユーを抱きかかえながら俺は言う。

ユーの身体は今にも崩れてしまいそうなほど、か細いものだった。俺はその身体が壊れないように、そつと地面に降り立つ。

〔ユーまで家からいなくなつたから来てみたら…〕
降り立つた俺の元に歩たちが近づいてくる。

「飛翔！お前身体は…」

歩は少し焦つた声で聞いてくる。

「俺の心配はいい。それよりも…ユーを頼む」

俺はそう言って歩にユ一を任せる。

「お、おい飛翔！アイツは生体の宝珠って言う死を無効にするアーティファクトを持つてるんだ！」

その身体で——」

「悪い歩…少し黙っててくれ」

「悪い歩…少し黙っててくれ」

俺は飛翔に声を掛けたが、飛翔の雰囲気がいとも全く違う。

飛翔から放たれるオーラに俺は何も言えなくなった。

飛翔は京子の所へ向かおうとするが、

グイツ、

俺に抱えられたユーが飛翔の袖を引つ張った。

飛翔は振り返ってユーを見る。

『殺しちゃ…駄目』

ユーのメモにはそう書かれていた。

飛翔は少し驚いた表情をしたが、すぐに笑顔を作った。

「……分かったよ、ユー」

飛翔は一言そう言うと、京子の元へ歩き出した。

俺は敵であると思われる女の子の元へと近づく。

「へえ。もしかして貴方が夜の翼ですか？ネクロマンサーの付き人って話でしたけど

…

まさか本当にいるなんて——」

「一応確認しておく」

「はい？」

「ユーを攻撃したのは…お前か？」

俺の問いに返ってきたのは高笑いだった。

「当ったり前じゃないですか、馬鹿なんですか貴方は。」

その人の魔力をもらうためにやってるんですよ。

アレだけの魔力を持っていながら使い手が話になりません…宝の持ち腐れですね」

女は続ける。

「それに負けると分かれば次は『死んで』と連呼して…

全く話に「黙れ」……！」

そう言つて俺は「天翼」を振るう。

女は咄嗟に剣でガードするが…

ジュツ！ バキン！

「なっ!?!」

剣は「天翼」に触れると同時にあっさり折れた…いや、斬られたと言ったほうが良いだろう。

既にフレアモードになっていた「天翼」の翼に魔装錬器はあっさりと壊されたのである。

魔装錬器が破壊されたことで女はコスプレ衣装が消え、マントのみとなった。

だか、これでは「天翼」の勢いは止まらず…

ジュジャ！

「ああああああ!」

そのまま女の身体を横に真つ二つになってその場に崩れた。

俺は女の復活を待たずに空中へ飛ぶ。

〔温度変化開始、モード、フリーズ〕

「く、クソが…!?!」

女は上半身と下半身がくっついて立ち上がろうとしていた。

〔そんなの…待つわけ無いだろ〕

俺は以前へレにやった技を放つ。

しかし今回は少し違う…

「何?！」

女が驚く。

そう、フリーズモードで放った羽一枚一枚はまるで1つ1つが氷柱のようだ。それが吹雪のごとく女に襲い掛かる。

「ちいー！」

女は2つ竜巻を発生させ、氷柱を防ごうとするが…

シユシユシユ!

「そ、そんなー！」

氷柱は竜巻なんて無かったように竜巻を消し去り、女を襲う。

「きやああああ!!！」

女は竜巻を出して安心していたので、氷柱は遠慮なく女に突き刺さる。

腹、胸、足、腕…身体のいたるところに氷柱を受け、女は再び地に伏した。

〔これで2回…もう数えるのも面倒だな〕

俺が地面に降り立つとさつきと同じように女は立ち上がった。

「こ、この…化け物があー！」

少女はがむしやらに魔法弾を作って発射してくるが、

俺の〔天翼〕に全て防がれる。

魔法弾の連射が途絶えたところで俺は近づく。

「お前は感情を抑えないといけないのが…どれだけつらいかわかるのか!!」

ドガッ!

「がはっ!!」

〔天翼〕で女の横腹を強打…いや、砕く…

「声を出す事ができないつらさがわかるか!!」

ゴシヤ!

「げぼっ!」

次は肩…

「普通に生活できないつらさが…お前にわかるか!!」

ドスッ!

「あ、あつあつ…」

そして心臓を貫く。

女はまた地面に倒れこむ、前と同じでまた女は立ち上がる。

「…、のおおおお!800!!」

女はさつきとは比べ物にならないほどの大きな魔法弾を連発するが

結果は変わらず、「天翼」を突破できない……

「う……そ……」

もう勝てない事が分かったのか女は震えだした。

女は魔法弾を撃った反動で手はもう使い物にならないでいる。

ゴシヤア!

俺は再び「天翼」で女の身体を切断する。

さつきと同様女はまた生き返ったようだが、ずるずると俺から逃げようとする。

「どうやら、これでラストらしいな……」

「い、いや……死にたくない……」

女の声には既に戦意はなく、身体も震えている。

「お前には……感謝してる」

「えっ?」

「俺の大切なものを改めて認識させてくれた……だから」

俺は「天翼」を振りかざす。

「俺は……大切なものを……ユーを傷つけたお前を許さねえ!!」

ドゴオオオオオ!!

一際大きな音が墓場に響いた。

「バトンタッチだ、歩」

「いいのかよ、確かに俺は止めをさしたいけど…」

それは飛翔も同じだろ？」

俺は歩達の所へ歩いてきた。

あの女は殺していない、最後の一撃は顔のすぐ横の地面に突き刺さった。
「確かにさしたいたいのには山々だけど…」

俺はユーの方を見る。

「約束だからな」

「…そっか」

「それに…結構頑張りが過ぎて少しやばいのよ」

「！」

俺は小声で歩にそう言おうと歩は驚く。

「…大丈夫なのか？」

「まあ、大事無いよ。一応…」

俺はそう言った後、歩の顔を見て言った。

「それに、この件は歩が背負ってたんだ。幕を下ろすのは歩の仕事だろ？」

俺は歩の肩に手を乗せながら言う。

「…ああ、わかった。お膳立てありがとな」

そう言って歩は女の所へ行った。

俺はそれを見送ってからユータちのところへ来た。

「羽の人！アンタすごいな！」

ハルナがはしゃいだ様に話しかけてきた。

「お疲れ様です、飛翔」

続いてセラが労いの言葉をかけてきた。

『終わったの？』

ユーが心配そうに俺を見てきた。

「ああ、それに…約束は守ったよ」

『…ありがとう』

その時、ユーは少し嬉しそうな顔をしていたと俺は思った。

ふと歩に視線を向けると歩は女に向かって振りかぶっていた…が次の瞬間、その腕は突然現れた何者かに止められた。

歩の声が聞こえる。

「おい、止めるなよ。コイツを生かしておく訳にはいか——」

「貴方がアユムさんですね〜」

おっとりとした女の子の声が響く。

「うちの生徒に何してるんですかあ〜」

歩の腕をつかんでいる、青い髪の毛のツインテールをした少女はにっこりと微笑んだ。

第14話 ゾンビ

「うちの生徒に何してるんですかあ〜」

おっとりとした声が墓場に響く。

白衣を着た、青髪をツインテールにしている少女が歩の腕をつかんでいる。

「だ、大先生!!」

ハルナが不意に叫ぶ。

「この人がハルナの先生、

まさかこれだけ離れてるのにここまで力が伝わってくるなんて…」

ピリピリとした雰囲気はここまで伝わってくる。

至近距離にいる歩は嫌と言うほど感じているだろう。

「大先生、離してくれ。コイツはやっちゃいけないことをしたんだ」

「嘘です！私何もやってません！」

歩の言葉に女は異議を唱える。

「あの女、ここまで腐ってるなんてな……」

俺は女を睨みつける。

「大先生！アムを信じてくれよ！」

ハルナも大先生に向かって叫ぶ。

「でもお、この子は良い子ですしい、

何より——今あなたがしてる事があ、いけないと思うんですがあ？」

そう言つて大先生は歩を投げ飛ばし、歩は砂利の上を転がる。

歩が立つと同時に大先生はポケットから日本刀を2本取り出し、両手で構える。

「まずいな……歩だけじゃ100%勝てねえ。」

加勢に行きたいが……正直もう身体動かすのが精一杯だ」

「大先生！何で信じないんだよ……アムは……こいつ等は、良い奴らなんだぞ！」

ハルナが必死で説得しようとするが、大先生は聞かない。

「ん、信じるにはあ、材料が少なすぎますねえ」

そう言つて大先生は京子を庇うようにして立つ。

「三人とも下がつてろ。俺がやる」

歩はミストルティンを構え言つた。

「あ、アユム！あんた大先生に勝つつもりなの！バカなの！」

ハルナはさつきより大きな声で叫ぶ。

「歩。私まで下げるつもりですか？」

そう言つてセラが瞳を真紅に変えて、手にはいつもの葉っぱの剣が握られていた。

「悪いな、俺も戦えればいいんだが……」

「何言つてんだよ。飛翔は十分戦つただろ？そこにいろつて」

歩はそう言つてくれた。正直助かる。

「んじゃ、いっちょ行くか！」

「参ります！」

その言葉と同時に歩とセラが大先生に向かって走り出す。

「秘剣、燕返し！」

一番速いセラが切りかかる。

ガキツ、ガキツ、ガキツ！

大先生とセラの打ち合いが続く。

するとセラが歩の方に飛ばされた。

歩はセラを受け止めて、大先生に突っ込む。

ガキイイイン!

日本刀とチェーンソウがぶつかり合う。

「すごいですねえ。アユムさんはあ、私の授業をちゃんと受けたら、

きつと最強クラスの魔装少女になりますねえ」

大先生の前では歩も子供扱いされているようだ。

それでも、力では限界突破できる歩が少しは有利のはず…

だが——

「そこまでだ…」

ドシヤアア!

急に発生した黒い霧によって、歩と大先生が吹き飛ばす。

黒い霧を目で追うとそこには怯えていたはずの女が立っていた。

「そんな…なんで…」

「ユー!? どうしたんだ!？」

隣にいるユーは震え、少しだけ声もだした。

まるで何かにおびえるように…

「安心してくれ、ユークリウツド。何もしないからさ」

女はさつきとはまるで雰囲気が違う。何かを女を通して話しているようだ。

「今日はこれで失礼するでしょう。それでは…」

そう言った女の身体を黒い霧が包む。

「…アユムさんが正解だったんですね。逃がしませんよお！」

大先生は消えてく女を追う。歩は力を使いきったのか、その場に座り込む。

俺は歩に近づく。

「大丈夫か、歩？」

「ああ、なんとかな…」

そこにハルナも来る。

「すごいじゃん！大先生相手にあそこまで戦えるなんて！」

ハルナにしては珍しく歩を褒めている。

「歩、歩きづらいです。松葉杖になってもらいます」

歩の意思は無視なんだ…セラ。

俺はユーの方を向く。震えはもう収まっているようだ。

「なあ、ユー。さっきの奴は一体誰だ？」

するとユーは少し悲しそうな目をしてメモを向けてきた。

『あれは私が消滅させたはずの…』

『ゾンビの力』

あの事件から数日たった。

おかげで横腹の傷は完治した。傷が悪化したのをユーに知られた時、かなり怒られた。

まあ、俺が悪いのだが：

結局大先生はあの女〔織戸の友達で入院してた京子と言う人物だった〕を逃がしてしまつたようだ。

でも、これからは俺達に協力してくれるようだ。

京子の捜査も続けるそうだ。まあ、前にあつたエルスと言う女性も言っていたが、

この世界での殺しは魔装少女達の法に引つかかるそうだ。

これで、歩が殺された件はひとまず解決したわけだ。

で、今は数少ない休日なのだが：

「なんでプリン作つてたら石鹼になるんだっ！」

「ハルナが用意した食材に問題があると考えますっ！」

ハルナとセラが絶賛喧嘩中。

あれから知ったのだが、セラはかなり料理が下手だ。

一度お粥を作ってもらったのだが……ガチで意識が飛んだ。

ちなみに今俺はユーとお茶を飲んでる。

「はあ？ちゃんとこの世界の物に合わせたじゃん！マズイ料理はあつてもマズイ食材なんかないの！」

「みんなでもう一回作ればいいんじゃないか？」

喧嘩を見かねた歩が仲裁に入る。

「……………まあ、アユムがそういうなら」

「———そうですね。過ぎたことは忘れましょう」

2人とも歩の登場で落ち着いたようだ。

再びプリン作りに戻る。

「では私は牛乳を唐津焼に……………」

「よしセラ、お前は風呂を沸かしてきてくれ」

「早速戦力外通告か、歩。…まあ、正しいけど」

「飛翔まで……………わかりましたっ！」

そう言うのとセラは風呂場へ向かった。

「そういえばユーって料理できるのかな？」

ふと疑問に思ったので俺はユーに聞いてみる事にした。

「ねえ、ユーは料理って出来るの？」

するとユーは少し考えてメモを見せてくる。

『飛翔は料理できるほうがいい？』

何故か疑問に疑問で返された。

「ん？いや、それは、料理できるんなら、その…」

ユーの手料理も食べてみたいって言うか／＼／

「って何言ってるんだ俺え！メツチャ恥ず！」

そう思ったが時すでに遅し。

ユーは俺の答えを聞くと何か考えているようだ。

『「今度ハルナに料理教えてもらおうかな…」』

「おーい、2人ともお！手伝ってくれ！」

いろいろ考えていると、歩が声をかけてきた。

それからみんな「セラ以外」で作ったプリンを皆「セラ入り」で食べていると、

ハルナがしゃべりだした。

「そうだアユム！メガ口駆逐作戦に抜擢されたぞ！」

「メガロ駆逐作戦？」

俺と歩は同時に首を傾げた。

「最近メガロが大量に出てるから、

ヴィリエから魔装少女がたくさんくるんだぜ！爽快だろうなく」

ハルナは浮かれていたが歩は逆にうな垂れていた。

まあ大変そうだな、駆逐作戦：

ふと隣に視線を移すと、ユーがプリンを食べていた。

少し顔が赤くなっているのがまた可愛い。

「そうだ、ユー。ユーは今の生活どう思ってるんだ？」

唐突に思い出した質問。

ユーはスプーンを置いて、メモを向けてくる。

『嫌いじゃない』

第15話 短冊

「——で、この超新星爆発により」

どうも、飛翔です。

あの京子襲撃事件から一週間ほど過ぎて、

今はメガロの襲撃もなく、穏やかな日々を送れている。

「んで、百年ぐらい前に内乱を起こしやがった訳。…まあ、男が魔装少女に勝てるわけないけど」

んで、俺と歩の学校はテストの時期に入り、次の月曜日にテストがある。

「そもそも、魔法が使えない連中集めてクーデターを起こす。って発想が面白いよな」
俺は前世の知識が多少役にたっているため、欠点を取ることはないだろうが歩は違
う。

それに今回テストの出来が悪いと夏休みに学校で補修をするそうだ。

日差しの中呼び出されるのは、ゾンビにとってはこの上ない地獄と言えるだろう。

そのため歩はハルナに勉強を教わっているのだが…

「そしてその連中だけで一週間も優勢だったなんて、考えられないよな！」

〔何故数学の勉強がヴィリエの歴史の授業になつてんだ？〕

俺は一人で問題を解いているのだが、

歩は訳のわからないハルナの説明でさらに困惑しているようだ。

「…つと、あれ？ここはどうかやるんだっけ？」

と言つても俺も勉強しないとイケない。

やったとはいえ、だいぶ日が経っているから所々分からないところが出てくる。

俺が問題に悩んでいるとユーがやってきた。

『どうかした？』

「ああ、ユー。ちよつと分からない問題があつてね…」

『貸して』

「?」

意味が少し分からなかったが、俺はユーに問題集を渡す。

するとユーは俺が分からなかったところの問題をスラスラ解いてくれた。

「すごい! ユーって勉強も出来るんだね」

『他の所は大丈夫?』

「うん、後は一人でも解けそうだよ。ありがと、ユー」
「ニコツ」

『\\\\\\\\\\\\』

俺が微笑むとユーは顔を赤くしていた。

あ、やべ。可愛い。

「あ、そうだユー。出来れば歩に教えてやってくれないかな?

俺よりも歩が危ないし…」

コクツ

ユーは1つ頷くと歩とハルナの所へ向かった。

さっきの俺の時と同じように、歩の問題集を解く。

「おお!! サンキュ、ユー!」

歩は問題が解けてご機嫌だが、反対にハルナの機嫌が悪くなっているように見える。

「し、しゃーなしだ! ヤマ張ったげるよ、アユムツ!」

そう言うとハルナは歩の問題集に次々丸を付けていく。

俺？もちろんハルナがつけているところを自分のにも印付けてるけど？

何処か集中的にやってもいいと思うしね。

俺が印を付け終わると、ふとユーが視線に入った。

ユーはさつきまでの穏やかな表情から、少し悲しむような瞳に変わっていた。

「なあ、ユー。1つ聞いてもいいか？」

『何？』

「あの黒い霧…ユーは何か知ってるのか？」

これは前から聞こうと思っていただけだ。

あの時のユーは怯えていた。声を出してしまおうほど…

「なあ、ユー。知っていたら教えてくれないか？」

ユーは目をつぶり、少し考えるようにしてからメモを見せてきた。

『冥界には私と同じように強い力を持った者がいる。』

彼もその内の1人で、とても強くて頼りになる存在だった。

でも、彼にも死が訪れた。

私は彼をゾンビに変えたが、不死身の身体を手にした彼は悪意が増していった。

彼を止めたのは私だけだった。だから私は彼に言った。

消えて　と

私は彼をその場から消した。

まさかこつちの世界にいたなんて…』

「も、もしかして恋人とかっ?」

ハルナが顔を赤くしてユーに聞く。

フルフルツとユーは首を横に振るのを見て俺は何故か安心した。

「し、心配すんな!天才ハルナちゃんがいるかな!」

ハルナは立ち上がって声を上げる。

「そうです。私が守ります」

凜とした声でセラも…

「俺も出来る限り力になるよ」

歩も…

「ユー。前にも言っただろ?俺はユーを守るって」

そして俺もハルナに同意する。

『ありがとう』

ユーは今日やっと嬉しそうな顔を見せた。

「つて初めてだよ。テストがここまでスラスラ解けるのは…」

そう言った俺のテスト用紙は既に全て埋まっており、見直しも終わっている。前世ではテストに苦悩していたというのが嘘のように出来た。

「これで補修は心配しないでいいな…」

キーンコーン、カーンコーン

チャイムと共に答案用紙が回収される。

すると後ろで座っていた歩が急いで荷物をまとめていた。

「歩どうしたんだ？確かにこれから帰れるけど歩は「メガロが出たらしい！」…！」

俺の問いに歩は焦ったように答えた。

歩は続ける。

「さっきハルナが来たんだが、先に行っちゃって…」

「わかった、俺も行く。で場所は？」

歩が固まる。

「まさか……ハルナ教えていかなかったのか？」

「飛翔の思ってる通りだよ、クソッ！」

とりあえず、俺と歩は織戸に「歩が体調悪いから先帰る」と言っただけで学校を出た。

「なら……ユーかセラに電話で聞けば」

「そうか、それがあつた！」

そう言っただけで歩は電話する。

しばらく電話していた歩が顔を上げた。

「飛翔、場所がわかった……商店街の裏路地だ！」

「見つけたー！」

歩が日差しにあたらないようにしてきたからかなり時間がかかってしまったが、何とか間に合ったみたいだ。

歩の指差す方向にミストルティンを持ったハルナと馬〔？〕が対峙していた。

しかしハルナは力なく地面にへたり込んでいるのを見ると、

まだ魔力は回復していないらしい。

「おらああー！」

歩はハルナを救うために馬に思いっきり殴りかかる。

ドゴツ！

馬はハルナに気を取られていて、歩の攻撃に気づかずにモロに受け、後ろに吹き飛んだ。

「あ、アユム…」

「大丈夫か、ハルナ！…つてぐはっ！」「バタリッ」

「つたく…日差しの事忘れてかつこつけるからだ」

俺は少々呆れたが馬が立ち上がりそうになっているのを見て、

歩にハルナが持っていたミストルティンを投げ渡す。

「早く変身しろ、歩。日差しのあるここじゃそれしかない…」

「し、しやーなしだな」

歩はそう言うのと呪文を唱え始めた。

「ノモブヨ、オシ、ハシタワ、ドケダ、グンミーチャ、デー、リブラ！」

そうして歩はいつものコスプレ姿になった。

「おっしや！日差しが気持ちいいぜ！」

「そこまで変わるものなのか？」

少し魔装少女の便利さに呆れつつ、俺は「天翼」を広げる。

ウマアア！

歩が殴り飛ばした馬が距離を詰めてくる。

ガキイン！

馬のヒヅメとチェーンソウが激突する。

「このまま、俺も加勢に「羽の人、歩！後ろだ！……！」

ハルナが俺らに向かって叫ぶ。俺は咄嗟に飛び後ろを振りかえると、

そこには50匹程のクラゲ「？」がいた。

「……って?!この数は反則だろ?!」

ブオンツ!!

俺は「天翼」でクラゲに攻撃するが、数が一向に減らない。

するとハルナがクラゲに捕らえられてしまった。

「うわ！こら！あたしに触るなあ！」

ハルナは抵抗するが、今のハルナでは1人で脱出できない。するとクラゲは次のターゲットを歩に変更した。

「歩、あぶねえ！」

「飛翔？どうし…：がはっ！」

歩は馬と戦っていて、クラゲの接近に気づかなかつた。

身体を触手で貫かれ電流を流されている。

「クソッ！」

ブオンツ、ブオンツ！

「二人を助けに行きたいが、数が多すぎる!!」

ウマアア！

「ちい！」

ガキイン！

歩が相手をしていた馬まで俺に攻撃してきた。

「ただでさえ狭い裏路地で「天翼」がまともに使えないって言うのに…！」
手段がなくなり、俺は防戦一方になっていた。

そんな時……

「お待ちせしました！」

裏路地に一人の声が響いた。

俺が振り返って見るとそこには黒いマントを身につけ、帽子を被った奴がいた。

「ホントに助けが来たのか？」

俺は少々不安を抱いていたが、その不安は一瞬で吹き飛ぶ事になる。

「よつとー！」

黒マント「？」は両手に何かを持つ。

アレは……………

——とんこつラーメン。

もはや味方敵以前に何故とんこつラーメン!?

「はあああ!」

俺の疑問をよそに黒マントはそのとんこつラーメンをクラゲにぶつ掛ける。するとクラゲはたちまち光る粒子になっていた。

「とんこつラーメンで死ぬのかよ!?!」

あまりの衝撃に俺は突っ込んでしまった。

しかし、実際見るとすごい威力だあのとんこつラーメン…

メガロを一瞬で倒しちまうとは

「おりやああ!」

黒マントのおかげでクラゲは既に壊滅した。残ってるのは…

ウマツ!?

「てめえだけなんだよお!」

ドゴツ、バギツ、グシヤ!

強化した「天翼」で馬の身体を貫き、馬は消滅。

これでとりあえず一安心かな…

「どうやら少し遅かったようですね…」

「ん？セラか」

丁度地面に降り立つと同時にセラが現れた。

「セラフイム！久しぶりだなあ。元気にしてたか？」

すると向こうから黒マントがこっちに走ってくる。

セラはそれを軽くかわし、関節技をかける。

「気軽に近づかないでください」

「い、痛い！セラフイムギブ、ギブって！ギブの大号令だつてば!!」

関節技を決められている黒マントは苦しそうにもがく。

「なあ、セラ。ソイツと知り合いなのか？」

変身を解いた歩がセラに聞く。

「ええ、一応。名はメイル・シウトローム、吸血忍者ですが、

私とは敵対している派閥の者です」

「でも俺とハルナを助けてくれた奴なんだし、放してやれよ」

「まあ、仕方ありませんね」

そう言つてセラは腕を放す。

「いつてえ、セラフイム！お前本気で折るつもりだつただろ！」

「まあまあ、助けてくれてありがとな」

歩は黒マントにお礼を言う。

「なあ、アユム。メガロも倒したし帰ろ？」

ハルナが歩に言うが聞こえていない。

「う、うっさいな！キモいんだよ！お前どこ中だよ！」

「いやいや、俺は高校生だ！お前こそどこ中だよ！」

「何故か知らんが言い争いになつとる」

二人が言い争いを始めたのを見てハルナが切れた。

「もうっ！アユムのバカ！あたしを無視すんなよな！」

そう言つてハルナは歩の背中を押した。

予想以上に強い力だったのか、歩はそのまま前にいる黒マントを押し倒し……………

キスした。

「うわあ」

思わず声が漏れてしまった。

セラも表情が引いているし、ハルナは口を三角にして顔を真っ赤にしている。

「く、苦しいから早くどけよな！」

そう言つて少女は歩を押しつけ……ん？

「アイツ、女だったんだ………」

歩はそれを知つて固まつてしまったようだ、口をパクパクさせてるよ。

そこにハルナとセラが渾身の蹴りを入れる。

俺？俺は……

「んじゃ、先帰つてるね」

逃げる事にした。

馬&クラゲの事件から数日経ち、今日は7月7日。

今歩と家に帰っているとところだ。

そろそろ家が見えてきたところで、異変に気づく。

「なあ、飛翔？俺の見間違いじゃないなら、あそこに笹があるんだが……」

「奇遇だな歩。俺にも見えるよ」

そう、歩の家の庭に大きな笹がさしてある。

こんな物歩の家にはなかったものだ。恐らくハルナ辺りが持ってきたのだろう。

ダツダツダツ！

歩も同じことを考えたのか、ハルナの居る2階へ走っていった。

俺はそのまま居間に入る。

「ただいま、ユー」

『おかえりなさい』

ユーはいつもと変わらぬ姿で居間にいた。

俺が腰を下ろすと、ユーがメモを向けてきた。

『今日はハルナが七夕するって言ってた』

「七夕？……ああ、それか」

俺はさつき見た笹を思い出す。

「あれは七夕用ってことか……」

そう思いつつ俺はお茶を一口飲んだ。

晩御飯を食べ終えて急にハルナが、

「短冊書くかな！言っとくけど、髪形は必ずポニーテールにするんだぞ！」

そうしないと願いが叶わないかな！」

と言い出したため、今みんな短冊を書いている。

俺と歩も髪型をポニーテールにしている。

俺は少々髪が長いので、大丈夫だったが、歩のはもう何してるかわからんようなものになっっている。

「歩、似合っていますよ？」

「何故疑問系で、しかもこつちを見ないで言うんですかね？」

そう思っているのはどうやら俺だけではないようだ。

ついでに言うと、ユーとハルナもポニーテールにしている。

ハルナは短髪なのであまり変わってないように見える。

ユーはというと……

『どうかした？』

「い、いや!? 別になんにも！」

『?』

いつもと違う雰囲気があつて可愛い。

「だああ! これも駄目だ！」

ハルナはさつきから書いては投げ、書いては投げを繰り返している。

歩は気になったのか、ハルナが投げた紙を広げて見た。すると鳩が豆鉄砲を食らったような顔になった。

おもむろに歩がこちらに渡してくる。

ユーも興味があるのか顔を覗き込ませる。書かれていたのは……

「平和を愛する心、ですかね？」

……………え!? ナニコレ!?

何故に願いが疑問系であるかを問いたいよ!

隣を見るとユーは小刻みに揺れている。

お笑いに厳しいユーをも笑わせられる物なのかこれは!?

「あー!!羽の人にネクラマンサー見るなよな!他人に見られたら無効なんだぞ!」
初めてルール聞いたよ。

「とにかく、あたしのはいいから歩と羽の人さつきと書けよな!二人待ちなんだぞ!」

ハルナはそう言うと、何処かへ向かった。

「さて、願う事か……………考えることないな」

俺は迷うことなく短冊に願いを書く——

俺らはそれぞれ短冊に願いを書くと、笹に吊るす作業に移った。
ユーがハルナを手伝い、皆が書いた短冊を吊るしている。

「こうしたイベントをしていると、まるで家族のようですね」

セラが微笑みながら言った。

「確かに……家族行事っぽいもんなこれ」

「まあ、家に笹を運んだ事はチャラにするかな……」

俺と歩もセラの意見に同意する。

俺は視線をユーたちに向ける。

そこには楽しそうに作業しているユーの姿があった。

「今日見たいな日をまた皆で送りたいな……」

俺は心からそう思うと俺が書いた短冊が風になびいていた。

「俺とユーがいつまでも一緒に居られますように…」

第16話 ゲームセンター

キーンコーン、カーンコーン

「それでは今日はここまで。しっかりと復習しておくように」
それだけ言って先生は教室から出て行った。

「歩〜。弁当食おうぜ」

俺はいつも通り歩に声をかける。

ユ一達と七夕をしたのが昨日の夜の事。

俺と歩は普通の日常を満喫している。

「貴様が相川歩だな」

「はい？」

これから食事という所で一人の女子生徒が歩に声をかけてきた。髪は黒のストリートで雰囲気セラと似ている。

「話は聞いているな、これが例の物だ」

そう言つて女子生徒は歩に一つのケースを渡してきた。

「確かに渡したぞ」

「いや、これつて一体「プルルルツ、プルルルツ」……」

歩が聞こうとしたら女子生徒の携帯が鳴った。

女子生徒は携帯に出る。

「私だ、どうした……」

「えっと、あの「そんな事ぐらい自分で判断しろ！痴れ者が！」……」

歩が再度声をかけようとしたが、女子生徒は電話の相手に罵声を浴びせて歩き去ってしまった。

「歩、一体誰なんだ？」

「いや、俺も分からんのだが……」

そう言つて歩は貰ったケースを開ける。

歩はケースに入っていた物を取り出すと……

「……メガネ？」

「……みたいだな」

歩がケースから取り出したのは黒ぶちのメガネだった。

「一体何に使うものなんだ？歩に渡してきたんだからなんかあるんだろ？」

「いや、覚えが無いのだが……」

「おい！ちよ、ちよっと！」

俺と歩がメガネについて考えていると、誰かが声をかけてきた。

「……って！お前昨日の！」

「ん？ああ、この前歩とキ」「言わせねえよ！」「……」

何故か見事にハモツた二人のおかげで俺の声は遮られてしまった。

「その、な？その事でなんだけど……ほら」

そう言つて女子生徒2「？」は歩に……アレは弁当か？

「え？」

歩は突然の事に頭が回っていないようだ。

「ほら、その……あれはオレたちにとつて大切な掟なんだ……」

「掟え？」

俺には彼女の言っている事が分からん……

「いや、その掟の事はセラから聞いている。

その……この前の事は事故だろ？そんなんで結婚って……」

「でも！オレ達にとつて掟は大切なものなんだ！」

オレはその事に誇りを持ってんだ!!」

歩の意見に彼女は反論する。

「なるほど……予測だが、

おそらくキスした相手と結婚するみたいな掟があるんだろうな。なんて面倒な……」

「だから、オレは……相川の嫁だ!!!」

俺が考えをまとめていると、彼女は歩に向かってそう宣言した。

「おおー！トモノリじゃんか」

その宣言後、織戸が俺たちの所にやって来た。

「おま、トモノリ言うな!!」

「トモノリ?」

俺と歩は同時に首をかしげた。

なんせ女の子の名前とは正直思えなかったからだ。

それに……

「織戸、お前こいつの事知ってんのか?」

歩が俺の疑問を代弁してくれた。

「隣のクラスのトモノリだろ？」

「だ〜か〜ら〜!!トモノリ言うな!!」

トモノリと呼ばれた少女は織戸の襟を掴んで振り回す。

「んで、織戸。トモノリって言うのはなんだ？」

俺は息切れしている織戸に聞く。

すると織戸は黒板に【友紀】と書く。

「これ、トモノリって読めるだろ？」

「納得」

いや、納得の理由だね。

「バカ！メガネかけてよく見てみる!!」

そう言つてトモノリは歩が持っていたメガネを奪つて、

無理やり歩にかけさせた。

「うおお!」

「どうかしたか歩？」

メガネをかけた歩が何故かでかい声を出していた。

すると歩はメガネを外して俺に渡してきた。

かけてみるって事らしい。

「全く一体どうし……!!?」

メガネをかけた俺は驚いた。

なんと周りにいる人の服が透けて見えるのだ。

俺はメガネをはずし歩に返す。

そして一言……

「変・態」

「俺が頼んだんじやねえよ!!……ってあれ？飛翔、お前顔赤くなったりしないな」

「なんだ、そんなことか……」

俺は歩の肩に手を置く。

「歩、お前俺の自称病の事覚えてるよな？」

「……………ごめん」

まあ、今見たのがユーだったらたぶん俺は血の海に沈んでいただろうがな……

「んじや、また明日」

「おう、また明日」

そう言つて織戸は教室から出て行つた。

現在には放課後である。まあ俺らはいつても道理、歩が帰れるまで教室でダラダラして
いる。

「アユム」

歩を呼ぶ声がしたのでそちらを見てみると、

この前デパートで買った服を着たハルナがいた。

「ハルナ？何でここに？」

「あ、あたしが迎えに来ちゃいけないのか？」

ハルナは顔を赤くしながら答える。

「そつか、ありがとな」

歩はそう言いながらハルナの頭を撫でる。

〔迎えか……ユーが来てくれたらなあ……って何考えてるんだ俺は!〕

俺は頭に浮かんだ考えを吹き飛ばすため頭を振る。

クイツ、クイツ、

不意に制服を引つ張られた。

〔一体誰……!〕

俺はその人物を見て驚いた。

そこにはいつも通り、ガントレットとプレートアーマーをつけたユーが立っていた。

「ユー!? 何でここに?」

『飛翔を迎えに来た』

「そ、そうなの? でもどうして急に迎えなんて……」

いや、滅茶苦茶嬉しいんだけどね?

脳の処理が追いつかないんだよ。

『ハルナが歩を迎えに行くって言ったから』

「な、なるほど……」

『迷惑だった?』

ユーは突然来た事に俺が迷惑がってると思ったのか、そう聞いてきた。

「そんなことないよ！ユーが来てくれて嬉しいよ俺」

『よかった』

そんな事を俺たちが話していると歩が声をかけてきた。

「なあ飛翔。これからゲーセン行かないか？ハルナのおかげでテストがうまくいったからその礼にな」

「ゲーセン？俺はいいけど……」

俺は隣に居るユーを見る。

ユーはゲーセンが何かわからないのか首をかしげている。

「ユー、ゲーセン行ってみる？」

『…行ってみよう』

ド派手な音が耳を直撃する。

学校を出た後セラも呼んで相川家総出でゲーセンに来ている。

「何?!この魔道具達は!?!歩、私を殺す気か!?!」

ハルナはゲーセンが気に入ったのか滅茶苦茶はしゃいでいる。するとハルナはゲーセンの奥へと入って行ってしまった。

「おい、待てよハルナ!」

歩はその後を追いかける。その後をセラも追いかけていった。

「なんか……微笑ましいな」

俺がそんな風に思っていると、ユーがメモを見せてきた。

『飛翔、ここには何かがあるの?』

ユーはこの騒音に少し怯えているように見えた。

ゲーセンはユーには少し合わなかったかな?

「ユー大丈夫? キツイなら帰ってもいいけど?」

『大丈夫』

そうやってユーは俺の服をつかんできた。

こうなったら、せめてユーを楽しませてあげないと…

そう思った俺の目にUFOキャッチャーが映った。

「そうだユー。あれして見る？」

俺はユーを連れてUFOキャッチャーの前まで来た。

『これは？』

「えっと、UFOキャッチャーって言ってね、見てて」

そう言って俺は財布から100円を取り出して機械に入れ、ボタンを押す。

ウイイイイン

アームが動き出す

ボタンを操作して目標のぬいぐるみのところまで持つて行き止める。

そして……

スカッ

……

……

「うわあ！何で持ち上がらないの!?!メツチャ恥ず！」

そう思ってユーを見るとユーはこちらを瞬きせずに見ていた。

「えっとねユー。ホントはこのアームでぬいぐるみを掴んでここまで運ばばいいんだ」

俺はそう言つてユーに1000円を渡す。

『やってみる』

ユーは俺からもらった1000円を握り、UFOキャッチャーの前に立つ。

1000円を投入し、アームを動かす。

ウイイイン、ガシツ、ウイイン、ポトン

.....

.....

.....

「す、すごい……初めてで取れるなんて……」

『そうなの?』

ユーは不思議そうに首をかしげる。

どうやらユーはUFOキャッチャーが得意なようだ。

「ユー、もつとやる?」

『いいの?』

「うん、せっかく来たんだから楽しまないとね」

そう言つて俺はユーに1000札を渡す。

『ありがとう』

それからユーは再びUFOキャッチャーをし始めた。

しばらくして歩達がこっちに来た。

「……歩、どうして顔にあざが出来てるの？」

「飛翔……まあ、想像に任せるよ……」

そう言つて歩はセラの方を見る。

「……………ああ、大体想像できた」

とりあえず歩に労いの言葉をかけているとハルナが声を上げた。

「アユムツ！あれ何？」

そう言つたハルナの指差した方にはプリクラがあつた。

「ああ、あれはプリクラだ」

「プリクラア？」

ハルナが分からないのか歩に聞き返している。

不意にユーがメモを見せてくる。

『プリクラツシユセーフティシステムのこと？』

「えつと………それではないと思うよ」

「確か車の機能だつたと思うぞ」

わからない俺に歩が助け舟を出してくれた。

「んで？なににする奴なの？」

「写真を撮るものですよ、ハルナ」

セラがハルナに教える。

するとハルナは目を輝かせた。

「よし！アユム、撮りまくるぞ！撮り殺そう！」

そう言つてハルナを先頭に俺たちはプリクラに入った。

「たのしかつた〜」

俺たちはプリクラを撮った後、ゲーセンから出て帰路についている。

ちなみに俺は大量のぬいぐるみが入った袋を両手に持っている。

全てユーがUFOキャッチャーで取ったものだ。
袋もらうとき店員さん苦笑いしてたな…。

歩はさつきプリクラで撮った写真を見ている。

俺も横からそれを見る。

ハルナが手を突き上げて白い歯を見せている奴。

セラが微笑みかけている奴。

俺がユーのほっぺたを引っ張って笑顔にした奴。

どれも良い写真だと思う。

「アユム！またここ来たい！」

「ゲーセンくらいいつでも連れてきてやるよ」

「それなら少しはゲームの腕を上げることですね」

ハルナとセラはゲーセンが気に入ったようだ。

歩も二人が楽しそうなのを見て笑顔になっている。

ふと俺は思い出してユーに聞いてみる。

「なあユー。ユーはゲーセン楽しかった？」

それが不安だった。

最初の方はゲーセンの雰囲気には怯えていたから、

楽しめたのか聞いておきたかった。
するとユーはメモを突き出してきた。

『飛翔と一緒にまた来たい』

俺はそのメモを見て安心した。

「そっか、じゃあまた一緒に行こうか、ゲーセン（ニコッ）」

『／／／／／「コクッ」』

「赤は血で真っ赤になってんだよな！」

信号待ちをしているとハルナがそんなことを言い出した。

じゅるり…

セラさん、血と言う言葉にそんな敏感に反応しないでください。

周りの人が見てるよ…

そうこうしてる内に信号が青に変わった。

皆が横断歩道を渡る。

俺は普通に歩いていたのだが、隣にユーがいないことに気づいた。辺りを見回すとユーは1人の男と向かい合ってた。

少し長い髪を後ろで1つ結んだ落ち着いた雰囲気の良い男だ。

「ユーどうし」「ユークリウッド、何故ここに…」

俺は瞬時に身構える。

「この男、ユーの名前を知ってる!!」

ユーは恐る恐るメモを向ける。

『夜の…王』

第17話　アリエル

『夜の…王』

ユーは誰が見てもわかるくらい動揺している。

いつもは崩さない表情が強張って見える。

「ユークリウツド……まさかこんな所で会うなんてね。

そんなに動揺して…そんなに僕には会いたくなかったかい？」

夜の王は少し寂しそうな顔を見せながら言った。

ユーはポケットからいつも使っているボールペンを取り出していた。

俺は二人が話している間にユーの所へ向かう。

「仕方ない、会ってしまったから…それが取引でもあるからね…」
夜の王は右手を空へ上げる。

まるで何かの合図のように……

「今はまだ早すぎる…」

また、準備が整った時に会おう。ユークリウッド」

そう言つて男は黒い霧に包まれて消えた。

その直後、俺たちを囲むようにして大量のメガロが現れた。

俺は崩れそうなユーの肩を支える

「ユー！大丈夫か！」

『全て…私のせい』

ユーは震えながらメモを見せてきた。

「クソツ！俺はユーが苦しんでるのに何もしてやれないのかよ!!」

「飛翔！ここは一旦人気のない場所へ移動するんだ！」

歩はセラと一緒に一点突破でメガロの群れに突っ込む。

ハルナはその後を追いかけていった。

「とりあえず…ユー、ここから離れよう」

そう言つて俺は「天翼」を広げユーを翼で包んで飛ぶ。

飛行型のメガロはいないようで俺たちを追って来れないようだ。歩たちはメガロを突破したようで走っている。

「それにしてもメガロにしては弱いような…」

『あれは偽物』

俺がそう呟くとユーがメモを見せてきた。

「偽物？」

『メガロは魔装少女の魂が必要、

メガロシステムを知っている彼なら人間の魂での偽物なら作れると思う』

それはそれで厄介だな。

幾ら弱くても数で押されればマズイ…。

一応メガロたちは俺たちの思惑通り人気のない場所へ誘導されている。
だが……

「ふふ…お久しぶりですね、相川さん」

そこには以前戦った金髪ツインテールの京子がいた。

「よお、随分と元気そうだな」

「相川さんもお元気そうで…残念です」

「それはどうも…」

歩は京子を睨みつけ、戦闘態勢をとる。

「また懲りずに来たのか？」

俺はユーをセラに任せて、「天翼」を広げる。

京子は俺を見るとビクツと肩を震わせた。

「折角助かった命を捨てに来たのか？」

「確かに、私では貴方には勝てないでしょうね…でも」

そう言った京子の後ろから大量のメガロが現れる。

「目的を果たせば、それでいいですからね」

「挟み撃ちか…」

ドドドドドドツ!!

後ろから音が聞こえる。

どうやら誘導していたメガロ達が追いついたようだ。

「まずいな…これだけの数、ユーたちを守りながらは少しキツイ…」

そう思っていると辺りに吸血忍者と思われる集団が現れた。

その中にはあのトモノリもいた。

「トモノリ！」

「相川！助けに来たぜ!!」

どうやらトモノリは俺たちを助けに来てくれたようだ。

これで少しはマシになった。

「歩！あの女やるか？」

「飛翔駄目だ！…ここじゃまだ一般の人に迷惑がかかる！」

それにミストルティンが無いから魔装少女になれん！」

歩は俺を見ながらそう叫ぶ。

確かに：メガロは多少弱くなっているとはいえ、

AAA級がこう何匹もいると流石に対処しきれん。

「うあ!?!」

そう考えていると、メガロと戦っていたトモノリが吹っ飛ばされていた。

「大丈夫か!?!」

歩がトモノリの所へ向かう。

「なんだよ、アイツ…強いじゃんか!!」

「当然です。貴方は弱そうですねし…」

「なんだと!!お前何処中だよ!」

トモノリは挑発されて京子の肩を掴む。

「トモノリ!ソイツに触れたら…!」

歩が叫ぶがすでに遅い。

次の瞬間京子は竜巻を発生させてトモノリを吹き飛ばす。

「クソッ!」

俺は相手しているゴリラを倒して京子を狙う。

しかし…

メエエエ!!

今度はヤギのメガロが襲ってくる。

「このままじゃ、かなりヤバイ!!」

そう思った瞬間だった。

辺りの建物や道路が凍り付いていく。

「飛翔!これお前の仕業か!?!」

「ちげえよ!今の俺の温度変化じゃここまで凍らすのにこんな短時間じゃ無理だ!!」

ここまで凍らすのに10秒と掛からなかった。

今の俺じゃ絶対に無理だ、ならこれは：

「あはっ、やっぱり持つてるじゃないですか！——アリエル先生の魔装兵器っ！！」
そう叫んだのは京子だった。

「魔装兵器？一体何のことだ？」

だが、考える時間は無い。

俺は飛んでいたため凍らなかつたが歩やセラ、他の吸血忍者達は違う。

既に足まで凍っているようだ。

助けに行きたいがメガロが複数襲ってきてどうしてもいけない。

「クソッ！皆！！」

その時——

「逃げてっ！！」

その声は透き通るような声だった。

「……………あれ？」

気が付くと俺たち全員は歩の家の玄関へたどり着いていた。

「ほえ？あたし……」

「……………」

「どうなってんだ？」

『…………』

歩にハルナは状況が理解できていないようだ。

セラはユーの方を見ている。…まさか

「ユー……もしかして言葉を？」

『あの場にいた全員は元の場所へ帰ったはず』

どうやら俺の予測は当たっていたようだ。

今回はユーに助けられたようだ。

「そうだったのか、サンキューなユー」

「歩、とりあえず中に入りましょう」

「だなっ！アユム、あたしお腹すいたんだけど？」

歩はユーにお礼を言っつてセラ、ハルナを連れて家に入る。

俺はその場に立ったまま動かなかった。

『飛翔、入らないの？』

心配したのかユーがメモを見せてくる。

「うん、ポスト見たら俺も行くよ。」

ユーは先に入っつて」

『わかった』

ユーはそうメモを見せた後、家に入った。

ユーが家に入った後、

「俺がユーを守らないといけないのに……」

最近ユーに迷惑かけてばっかりだ……

あれから頑張っつてるのに、何一つ変わっつてない……」

俺はその場でただただ自分の力の無さを悔やんでいた。

次の日の夜、俺は墓地に来ていた。

「おらああああ!!」

ボウツ！ ドゴオオオ！

「はああああ!!」

パキパキツ！ シュシュシュ！

「うおおおお!!」

ブオンツ！ ドガアアア！

温度変化フレア・フリーズへの瞬時の切り替え&強化、〔天翼〕自体の強度の底上げ。

昨日の戦闘で自分の力の無さを痛感したので、

今日はこの墓地で修行しているというわけだ。

「はあ、はあ……」

「流石に飛ばしすぎたか、体中が痛い……」

でも、弱音なんて吐いてられるか！俺が守るって決めたんだ！

そう思つて「天翼」を振るおうと「あれえ〜？アユムさんじゃないですねえ〜」……！
声が出た方を見ると、そこには青髪のツインテール。

「確か……ハルナの担任のアリエルさんですよ？」

「そうですよ。たしかアユムさんたちと一緒にいた人ですねえ」

そう言つてアリエルさんは微笑む。

「どうしたんですか？こんなところで」

「それがあ、アユムさんに頼んでいた物を取りに来たんですがあ、

まだ来てないようですねえ〜」

アリエルさんは辺りを見回す。

「俺が今から帰つて呼んで来ましようか？」

「ええ〜、いいんですかあ〜？」

「いいですよ、もう帰るところでしたし……」

そう言つて俺はその場を後に……

「そういえばさつき見ましたよ。貴方、すごい力を持つてるんですねえ〜」

「！」

どうやらさつききの修行を見られていたようだ。

「よかつたらあく、私と組みませんかあ？」

「組む？」

「はい」

「……………謹んでお断りいたします」

俺はそう言つて頭を下げる。

「理由を聞いてもいいですかあ？」

「俺はもう頼もしい仲間がたくさんいますから…」

もちろんアリエルさんも入っていますよ」

「そうですかあ、残念ですねえ」

「すみません。でもこれが俺ですから……………ではまた」

そう言つて俺は墓地を後にした。

アリエルさんと会った後、

歩に伝言を言うのと急いで準備して墓地へ向かっていった。

ついでにハルナも。

家には俺、ユ一、セラが残された。

「ふあゝ。悪い、ちよつと寝てくるね」

『修行してきたの?』

「うん、それで少し眠くてね…」

『分かった』

「それじゃ」

そう言い残して、俺は自室のベツトで眠った。

俺が起きたとき、驚いたことが二つある。

1つは既に朝になっていたこと。

2つ目は歩が口から何かを出しながら死んでいたことだ。

「朝っぱらから何があつたんだ？」

「飛翔は寝てたからな……」

そう言つて歩は何故か遠くを見る。

「墓地へ向かうときにはメガ口に追いかけられるし、

帰ってきたらセラが料理してるし、

朝飯にはセラが作ったお粥を流しそーめんシステムで食わされるし……」

「わかった！俺が悪かった！だからもう何も言うな！」

なんつー不幸な事に……

セラの料理の腕は上がらないのか？希望は無いのか？

「おお、相川！お前、こんな早く来てるのか？」

そうやって話しかけてきたのは隣のクラスのトモノリだ。

何故か俺を見たとき少しがっかりした表情をした。

もしかして二人つきりが良かったのだろうか？

「そういうお前も早いだろ？」

「お、俺は、その…相川に合わせただけで…」

………なんか空気が桃色だ。

「歩、俺トイレ行って来るよ」

「ん、わかった」

そうやって俺はその空気に耐えられなかったためと、

トモノリのために教室を後にした。

第18話 別れ

あれからいつも通り授業を受け、今はもう放課後。

今日も今日とて、歩の帰れる時間帯になるまで待って一緒に帰宅した。歩の家に帰って直ぐに自室のベツトに倒れこむ。

「はあ……」

昨日の疲れが少し残っていたため、ベツトの感触が心地よかった。

しばらくベツトで横になってから、俺は学校の宿題に取り掛かった。

「ふざけんなっ!!」

宿題が終わったところで、歩の大声が聞こえた。

俺は部屋から出て、声がした歩の部屋へと向かう。

「なあ、今の——」

「ユ一の命は任務より軽いのかっ!!」

「その言い方は卑怯です! 私達吸血忍者にとつて……!!?」

歩の部屋のドアを開けるとセラと歩が言い争っていた。

しかもその原因は……

「なあ、歩。……今の質問はなんだ?」

「飛翔……」

歩は顔を伏せる。

「なあ、セラ。……何を話してた?」

「……………」

セラの方も歩と同じで何も言わない。

「まあ、今聞いた会話で大体想像出来る。

……………セラ。ユ一を殺せとでも任務がきたのか?」

「……………その通りです」

セラは肯定した。

「そうか……で、どうするんだ？」

「私は……」

そう言ってセラは黙る。

「……俺はセラを仲間だと思ってる。でもユ一の敵になるんなら」

俺は背を向ける。

「俺が相手になる」

そう言って俺は歩の部屋を後にした。

「セラ……」

飛翔が部屋を出たので、俺はセラに話しかける。

「お前はどっちなんだ？ ユーを殺したいのか、

それとも……守りたいのか？」

「殺したくないに決まっているでしょう!!」

セラは瞳に涙を浮かべつつ、そう言った。

「……お前はいつも正直だな」

「お世辞は結構です、気持ち悪い……でも」

セラがこっちを向く。

「おかげで吹っ切れました」

そう言ってセラは任務の書かれた紙を引き裂いた。

「そうか……なら、まずはそのユーを殺す原因になった装置を壊しに行くか」

「ええ!!」

「とりあえず一安心か……」

俺はそう思いつつ歩のドアから離れ、自室へと入る。

「正直内心焦ったよ……ホント」

敵にすら同情してしまうのに、元とはいえ仲間のセラが攻撃してきたら、

正直迎え撃てるか不安だったからである。

不意に部屋のドアが開いた。

「飛翔……馬鹿げた計画を壊しに行くんだ。力を貸してくれ」

「お願いします」

セラと歩がそう言ってきた。

「もう大丈夫か？」

「ええ、ご迷惑おかけしました」

そう言ったセラの目はまっすぐだった。

「…分かった。親友と仲間の頼みだ。聞かないわけ無いだろう？」

ここに来る前にセラと歩からさつきの話の詳細を聞いた。

「どうやらセラの任務は吸血忍者の頭領を生き返らせてもらうためだったらしいのだが、

メガロの大量発生がユーの性だと言うことで暗殺命令が来たらしい。

まあ、俺はユーを守るだけだが…

「これは一体……」

「そうこう思考している内に俺と歩はセラに連れられて革新派〔吸血忍者は二つに分かれており、セラは保守派〕の

アジトであるビルに来たのだが……

「全員眠ってるな」

そう……今辺りにはたくさん吸血忍者が横たわっている。

しかもその中にはトモノリの姿もあった。

「おい、トモノリ！」

歩はトモノリに声をかけるが一向に起きる気がしない。

「どうやら吸血忍者が使う催眠ガスを使ったようですね……」

セラは1人の吸血忍者を確認しながら言った。

「誰かと思えば、セラフイムか」

不意に俺たちに声がかかる。

振り向くとそこには——学校で歩に黒縁メガネを渡した女子生徒が立っ

り、

その手には水で出来たような剣を持っていた。

「一体何しに来た、セラフイム」

「サラスバティ……貴方、一体何をしていますか」

その声には怒りが含まれていた。

「人類吸血忍者化計画を円滑に進めるための作業だ」

サラスと呼ばれた吸血忍者は淡々と答える。

「まさかそんな馬鹿げた計画が我々の派閥から出たものだったとは……」

そう言つて奥歯をかみ締めるセラの眼は真紅に染まり、黒いマントが翻る。

「おいおい、私とやりあうつもりなのか？ 同じ保守派の吸血忍者だと言うのに」

「気の合う話は酒をかわしながら、気の合わない話は――

剣をかわしながらっ!!」

セラが剣を作り出し、一気に距離を詰める。

ガキイイン!!

セラの木の葉の剣と女子生徒の青い剣がぶつかり合う。

「秘剣、燕返し!!」

剣の重なり、音が反響する。

3回、4回。5回目の音は無い。

そう思った直後、セラがこちらに吹っ飛んでくる。

セラの胸元から血が滴り落ちていた。

俺と歩は今、柱の影に隠れる形となっている。

「強くなったな、セラフイム。まさか4回も耐えられるとは…」

「貴方は何も思わないのですか!!」

「この任務が矛盾していることにつ!!」

「任務に疑問を持つなど愚かな事だ。私は任務を与えられた。

ならばその任務を実行するまでだ」

「セラフ!!」

2人が言い争いをしていたが、突然歩が柱の影から飛び出した。

「歩つ!!」

グサつ!!

俺は叫ぶと同時に歩の首に女子生徒の持っていた剣が突き刺さる。

しかし歩はその剣を引き抜き、ポケットに手を入れていた。

「ん?今ので何故死なないんだ?」

「人類吸血忍者化計画とか、ユーを殺せとか…」

「どうしてそう吸血忍者はまとまりがないんだ?」

「そこまで考えれば分かるだろう?」

「今吸血忍者には絶対な指導者がいないからだ」

「そうやって女子生徒は水を歩とついでに俺にも飛ばしてきた。」

歩は横に避け、俺は〔天翼〕でガードした。

「ほう、そつちの奴も珍しい技を使うな…」

「なるほど…それでユーに頭領を生き返らせてほしかったわけか」

ブンっ!!

俺が女子生徒と話していると、歩が鉛筆を女子生徒に向かって投げる。

「そんなものが当たるとでも?」

そう言つて首を倒すだけで避けられてしまう。

「的中したさ」

そう言つて歩は口の端を吊り上げた。

次の瞬間、歩が投げた鉛筆が爆発した。

穴が開いたのは——壁。

「この装置は破壊しません。私が頂いていく」

そう言つて女子生徒は水の塊を作り出した。

その塊は空中に投げられ、四散する。

「とくと味わえ——飛劍、百鬼漸殺!!」

水の刃が一斉に俺たちに襲い掛かる。

「歩っ!俺の近くに!!」

「わかった!!」

俺は「天翼」で俺と歩をガードする。

降りかかる水の刃はかなり厄介だ。

例えるなら雨に打たれずに戦えって言ってるようなもんだからな。

「このままじゃ、ジリ貧になるだけだ。」

クソツッ! やっぱこういう狭いとこじゃ天翼の力が半減しちまう!」

「天翼」を十分広げられないのは、かなりのパワーダウンだ。

「クソツッ! こうなったら突っ込んで」

「駄目だ歩! いくら死ななくてもバラバラにされちゃかなわないよ!」

「…っ! じゃどうすれば——」

「最終詠唱を確認した。目標地点の重力を10Gに変更する」

ズゴゴゴッ!!

何か声がすると思ったら、急に俺と歩、ついでに水までもが地面に叩きつけられた。

一体何が、と考える前に俺たちの目に1人の少女の姿が映った。

その少女の後ろには、左半身が炎のように揺らめいている屈強な男が見える。

その少女とは……………

「トモノリ？」

歩が目の前に居る少女を見て眩く。

トモノリはその声が聞こえていないのか、こちらに振り向こうともしない。
「ほう、まだ眠っていない奴がいたとは……」

そう言つて女子生徒は水の剣を構える——
ドガアア!!

——ことができなかつた。

ものすごい音がしたと思つたら、女子生徒が壁に衝突していた。

それがトモノリの後ろに出ている男がやったことだと気づいたのは、
その男が腕を振り切つているのを見たからだ。

「……おい!!トモノリ!!」

「一体何が……」

「クソっ!!」

歩と俺は異常なトモノリにただ驚いている。

女子生徒は起き上がって、距離を詰めている。

「其は命の分岐点」 『第一詠唱を確認、術式解放』

静かに、しかしハッキリと……トモノリは言葉にする。

「我は生の道を、汝は死の道をゆくだろう」 『第二詠唱を確認、衝撃波、発動準備』

女子生徒はトモノリとの距離を詰め、水の剣で一閃するが、

半身炎の男がそれを受け止める。

「嘯み砕け、マステイコア」 『最終詠唱を確認した。前方へ衝撃波を発射する』

男がそう言った瞬間、外壁が一斉に吹き飛んだ。

セラは装置の後ろに隠れ、俺と歩は「天翼」でガードした。

女子生徒は咄嗟に水の壁のような物を作ったが、それでも至近距離だったため再び外壁に衝突。

女子生徒はそのまま気を失ったのか、ピクリとも動かなくなった。

「相川、歩」

「友紀!! お前どうしたんだ!?!」

歩はトモノリに向かって叫ぶが、トモノリは全く反応しない。

すると、トモノリの背後に出てきている男が腕を振りかぶっている。

セラは咄嗟に身を隠していた装置から離れる。

男が振り下ろした手から炎の玉が投げられ、装置に激突する。

『目標の破壊任務を成功した。残存する敵の排除を開始』

そう言つて男は俺たちの方を向く。

「クソっ!!」

歩は男に向かつてダツシユする。

そして男の頭をぶん殴ろうとしたが、

歩は逆に男に殴り返されて俺の前まで吹っ飛んできた。

「歩！大丈夫か？」

「……なんでだよ」

「え？」

歩は起き上がりながらトモノリの方を向きながら言った。

「なんで、お前泣いてるんだよ」

「あい、かわ……たす、け『母体に異常を確認した。術式限定を解除する』」

トモノリは一瞬意識が戻つたように見えたが、再び攻撃を開始する。

「凍てつく心を解き放て」『第一詠唱を確認、術式解放』

トモノリは再び呪文を唱えだす。

「其は神々の息吹きさえも吹雪へと変えるだろう」『第二詠唱を確認、冷却準備完了』

「まずいー！」

「セラ、飛翔！ここから離れるんだ！」

歩の言葉と同時に、

「駆け抜ける、アブソリユート・フェンリル」 『最終詠唱を確認した、氷結を開始する』
次の瞬間、部屋全体が凍りついた。

俺はフレアモードにしておいたからよかったものの、歩とセラは足が凍り付いてしまっている。

トモノリは一步一步こちらに近づいてくる。

「右に青き炎を持って」 『第一詠唱確認、術式解放』

「このお!!」

俺は「天翼」を振るうが、男の身体を通り過ぎるだけで全く効いていない。

「左に赤き炎を携えろ」 『第二詠唱確認、火炎放射、準備完了』

攻撃が効かないことに俺が焦っていると、歩がトモノリとの距離を縮めるために走り出した。

男は炎の玉を歩に投げつけるが、俺が「天翼」で軌道を逸らす。

歩は無事、トモノリとの距離を詰め……トモノリを抱きしめた。

「やめろ！やめてくれよ！トモノリ!!」

歩がそう言った瞬間、

「と、トモノリ言うなあ!!!」

1人の少女の叫び声が部屋に響いた。

「全く……今回マジでやばかったな」

「確かになあ」

俺と歩は壁にもたれかかっていた。

部屋の隅にはトモノリとセラ、後気絶した女子生徒が座り込んでいる。

トモノリはあの後すぐに寝てしまった。

「やはり、生き血をすすらないといけませんね」

セラが傷口を抑えながら「こちらに歩いてきた。

「だったら俺の血を吸えばいい」

「貴方の血を吸うくらいなら死んだ方がマシです」

歩がセラに提案するが即行で却下。

「なあ、セラ。トモノリは吸血忍者なのか?」

俺は思っていたことをセラに聞く。

正直言つてアレは完全に魔法とかの類だと思っただが…

「昔から任務についてる優秀な吸血忍者ですよ」

セラはそう答える。

「もしかして、この前京子が言っていた魔装兵器つてのが——」

~~~~~♪~~~~~♪

俺が考えていると歩の携帯が鳴った。

「すまん」

歩はそう言つて少し離れて電話に出る。

しばらくして歩が険しい顔で戻ってきた。

「まずい、ハルナと大先生が襲われてるみたいだ」

「?なんで大先生がこっちに?」

「ハルナがこの前怒ったことの埋め合わせで、大先生をゲーセンに連れて行ってるんだよ。」

俺はハルナと大先生を助けに行く」

「待て歩！俺も——」

「飛翔はセラとトモノリを頼む。」

今この2人が襲われたら戦えないからな」

「すみません、歩、飛翔」

セラは申し訳なさそうに言う。

「……わかった、歩。2人のことは任せろ」

「ああ……じゃ、行ってくる」

そう言つて歩はビルから飛び降りていった。

歩と別れてトモノリを家に送り、セラと俺は歩の家に帰って来た。

その後、歩と日本刀を2本抱えたハルナが戻って来た。

歩から話を聞くと、夜の王に大先生が連れて行かれたらしい。

歩は京子を取り逃がしたことをとても悔やんでいた。

ハルナはと言うと……

「絶対に大先生は取り返すんだ!!」

と大声を上げていた。

ハルナは心が強いなと改めて思った。

大先生が連れ去られたのが昨日。

俺と歩はいつも通り学校に来て、今は放課後。

それまでに俺は歩に聞くことにした。

「なあ、歩。トモノリのアレ、何か知ってるんじゃないか？」

「……ああ、知ってるよ。大先生から口封じされてたから言わなかったんだけどな」

「そうか……」

「アレは大先生が作った魔装兵器って奴らしい。」

なんでトモノリの中にあるのかはわかんないけど」

「すごい威力だったよな」

「1人だけ防いどいてそれ言うか？」

「あんな室内じゃ俺は戦えねえよ、パワーダウンもいいところ——」

「アユム〜！」

教室のドアを開けて入ってきたのはハルナだった。

「また迎えに来てくれたのか？」

「うっ！……げ、ゲーセンに行きたかったただけだかな！」

ハルナは顔を赤くしながらそう言う。

「お〜い、相川！一緒に帰ろうぜ！」

「全く、買い物をついでにどこに行くと思えば……」

そう言つてトモノリとセラも入ってくる。

なんか歩モテモテなんだが……

「なあ！羽の人はこないのか？」

「俺は夕食の準備して待つてるよ」

「悪いな、飛翔」

「いいって……んじゃ、先に帰ってるよ」

「ああ、わかった」

そう言つて俺は教室を後にした。

「ただいま」

俺はあれから少しコンビニでお菓子を買って、帰って来た。  
俺は居間に入っていつも通りユーの隣に腰掛け――

「あれ？」

――れなかった。

いつもいるはずのユーがそこにいなかった。

その代わりなのか、いつもユーが使っているメモ帳が何枚か切り取られて置いてあった。

「これは一体……っ!!？」

俺はメモ帳の一枚目の文字を読んで絶句した。

そのメモを持って俺は家を飛び出す。

『さようなら』

そう……メモには書かれていた。

俺は必死でユーを探す。

『ごめんなさい、本当にごめんなさい。』

私さえないなければ、この町はこんなことにはならなかった』

「ユーっ！」

俺は叫ぶが返事はない。

『セラもハルナも歩も……飛翔も、皆私に優しい言葉をかけてくれる。

それはとても嬉しくて、私はそれに甘えていた』

ユーが行きそうなところをしらみつぶしに飛んでまわっているが、見つからない。

『でも私は一緒にいてはいけない存在、全て、私が悪いのだから……ごめんなさい』

悪いのはユーじゃないんだ……、俺が、俺が弱いばかりにユーは抱え込んでしまつた……

『いつも大変な思いをさせてしまつて、ごめんなさい。』

このまま私が側に居ると、いつかきつと、また誰かが悲しむことになる』

あたりはすっかり暗くなっていた。

最後の望みで俺が来たのはユーと出会った公園だった。

でも、ユーはいない。

『私は、死を呼ぶものだから』

俺は歩の家に帰ってきて、庭に目をやる。

そこにはまだ笹が飾ってあった。

俺は最後の一枚を読む。

『だから、ささようなら』

俺は笹に飾つてある短冊を手取る。

『雪をくれ！ここにいるみんなで見られるような大きい奴だからな！小さかったら殺すかな！』

これはハルナの短冊。

『料理の腕が倍増しますように。私の料理でここにいるみんなが笑顔になれますように』

これはセラの短冊。

『願わくばいつまでも飛翔達と共に』

これが、ユーの……………

ポタッ

俺の目から雫が落ちる。

それは止まる事を知らず、ドンドン溢れてくる。

「俺のせいだ、俺の……………、ユーが苦しんでたのに何も力になれなくて…………

ユー……………、ユー……………」

俺はひたすらユーの名前を呟く。

「だらっしゅー!!」

「グハっ!!?」

いきなり後頭部に激痛が走る。

後ろを振り返ると、ハルナ、セラ、歩が立っていた。

「いつまで泣いてんだ！羽の人!!」

「事情は残っていたメモでわかっています。

一生会えないわけではないでしょう？」

「そうだけ、飛翔」

「みんな……………」

そうだ、こんなところで諦めてどうするんだよ。

それに俺は決意したんだ、ユーのために強くなるって…………だから、

俺は諦めない  
!!!!!!

## 第19話 決戦

ユーが居なくなってから1週間ほどたった。

皆、ユーが居なくなってから元気がなくなった様に見える。

それは俺も例外じゃない。

それでも皆この2週間、必死にユーを探した。

だけどユーは冥界に帰ってしまったのか、どこを探しても見つからない。

正直……本当にこれが正しいのか迷ってしまう。

ハルナに背中を押されはしたものの、俺はユーに何かしてあげれるのか？

そんな事を考えていると、ポケットが振動した。

俺はポケットから携帯を取り出して出る。

「はい、もしもし。井之上ですけども」

「こちら、マテライズ魔法学校のエルスと申します」

エルス？この名前確か……

「あの、確か公園でお会いした……」

「はい、そうです。それで今回はお願いがあつてお電話いたしました」

「お願い？」

と言うかなんで貴方俺の携帯の番号知ってるんだ？

まあこの人たちに常識は通用しないことはわかってるので、突っ込まない。

「はい、それでお願いと申すのは……」

「まさか、こんなところに来るとはなあ……」

そう言つて俺は目の前にある巨大な建物を見上げる。

エルスと言う女性のお願ひはヴィリエに来てほしいと言うものだった。

ヴィリエに来るのに俺は寝させ「気絶させ」られた。ヴィリエへの進入ルートを見せたくないらしい。

それに此処に来るのに5日ほど掛かった。

一般人がヴィリエに来るのにはこれぐらい時間がかかるとエルスが言っていた。

理由は俺が捕まえた「ヴィリエには見つけた扱いになつている」ヘレの事らしい。

詳しくは、俺が見た時にヘレがどんな状況だったかを聞きたかつたらしい。

「ありがとうございます。これで作業がはかどります」

そう言つてエルスはお礼を述べてきた。

「いや、別に俺は——」

「あゝ、誰かと思えば偽善者様じゃないですかアゝ」

どこかで聞いたような口調、

振り返ってみるとそこには囚人が着るような白黒の服を着ているヘレの姿があった。後ろには2人の魔装少女が監視のように付いている。

「……元氣そうだな」

「お前、敵だった奴の機嫌まで取る様な奴だったのオ？」

「確かにあの時ユーを侮辱したのは許せない……でもお前も被害者なんだって思ったから」

「アツハツハツハ!!相変わらずの偽善者つぶりだなア!!」

あの時の激戦が嘘のように打ち解けあえている。

ヘレが笑い、俺も釣られて微笑む。

「……腕、大丈夫だったのか？」

「アンタのおかげでなア……」

そう言ってヘレは腕を俺に見せる。

治癒魔法が掛けられているのか、腕は緑色に光っていた。

「おオ、そうだ。ユークリウッドは元氣にしてんのかア？」

「っ!？」

「あん?どうかしたのか？」

俺の心は相当参っていた様で本音がダラダラと零れる。

「……今、ユーとは一緒に居ないんだ」

「はア？ あんだけユーのためユーのためって言ってた奴がなんで側にいねエんだよ」

「……俺が、ユーを守れなかったから……」

それからこれまでの経緯を全て話した。

夜の王が偽メガロを作ったこと、ユーがそれに負い目を感じていたこと、

ユーが……俺たちから離れたこと。

「……そうかア」

「俺は……ユーを連れ戻していいか分からない……今の俺にはユーを守る力もない。

そんな俺がユーの側に居てもいいのかなって思うんだよ」

スパアン!!!

俺がそう言った瞬間、俺の右頬に強い衝撃が走った。

勢いの余り、俺は床に倒れこむ。

「デメエ!! ふざけるなよオ!!」

床に倒れた俺の胸ぐらを掴む。

2人の魔装少女が止めに入ろうとするが、ヘレが睨み押しと止まらせる。

「お前はそんな甘ツちヨロい気持ちでユークリウツドの側に居たのかア！」

私が襲ったときに叫んでたセリフは嘘だったのかア!!

そんな………簡単に砕けちまう決意だったのかよオ!!!」

「!?………でも、俺は——」

へレは乱暴に俺を突き飛ばし、魔装少女達振り返らずにへレは言う。

「少なくとも………ウアたしを倒した偽善者は、そんな生半可な気持ちじゃなかったと思  
うぜ」

「!?」

そこまで言つて、へレは2人の魔装少女に連れられ歩き出す。

「………そうだ。何弱気になつてんだよ、俺!!」

あの日、ユーの力を知った時から決意したじゃないか!

ユーにもう悲しい思いはさせない、俺がユーを守るつてそう決めたじゃないか!!」

俺はその場に立ち上がる。

「へレえー!」

「!」

驚いたようにへレは歩みを止める。

「ありがとう」

「………アツハツハ!!アンタヤツぱり偽善者だわ!自分が正しいと思ひ込んでやがる!!」

「ああ、そうだよ。俺はユーを取り戻すのが正しいつて、心から思つてるから」

「……しツかりやれよ？」

「当たり前だ」

俺の言葉を最後にヘレは連れて行かれた。

「たっ、大変です!!」

ヘレと別れてすぐ別の魔装少女が走りながら何か叫んでいる。  
隣にいたエルスがその子に声をかける。

「ちよつと、貴方どうしたの？」

「そ、それが……」

少女は戸惑いながら答えた。

「メガロが、これまでに無い規模で出現してますっ!!」

「よし、戻って来られた」

俺は数秒で元の世界に戻ってこれた。

来るのには時間が掛かるが、戻るときは逆にほとんど時間を使わなかった。

どういう仕組みだよ、全く……

それでもって、今は歩の家の玄関前だ。

俺が入ろうとするとドアが開いた。

「!? つ、飛翔! お前帰って来たのか!？」

「おお! 羽の人!! 久しぶりだな!!」

玄関から出てきたのは歩とミストルティンを持ったハルナだった。

「ああ、ヴィリエに居たけどこっちの状況はわかつてる。」

早いとこメガロを倒さないとな、それに……」

「ああ、飛翔の思ってる通り、たぶんユーはこっちに来てる」

「そうと決まったらチャツチャと行くぞ!!」

そう言つてハルナは走り出す。

俺も行こうと「天翼」を広げる。

「なあ、飛翔」

「ん?」

歩の方を振りかえると、歩は複雑な表情をしていた。

「飛翔、お前がヴィリエに行つていた時に、

こっちでもいろいろあつて京子を捕まえたんだ」

「京子?……ああ、夜の王についていたあの女か」

「ああ、それで京子に言われたんだ。」

相川さん達がやつてるとはエゴなんですよ、ありがた迷惑つて奴ですよつて……

俺は正直、今やつてることが正しいかわからねえ……」

そうか、歩も同じ事を……

俺も少し前ならそう思ってた。でも……

「確かに……今やろうとしてるのは俺のエゴだろうな」

「え？」

歩は驚いた表情で俺を見る。

「ユーは本当に俺達と居たくないかもしれない。」

連れ戻すことが悪いことかもしれない……

それでも、

俺はユーと一緒にいたい、側に居たいんだよ。

例えそれがありがた迷惑だったとしても……少なくとも俺は心からそっちが正し

いって思ってるから」

「飛翔……」

「だから俺は……今だけは自分に正直になりたいたんだよ」

「……飛翔は強いな」

「俺は弱いよ、俺もさつきまではそう考えてたから」

ホント、これはヘレに感謝しないと……

「取り戻すよ、必ず！」

「ああ！俺も手伝うよ、飛翔！」

そうやって俺と歩は動き出す。

「待ってろよお！ユー！！」

「400%オ！！」

「通してもらおうぞ！！」

俺と歩は今東京タワーに向かっている。

歩の話を聞くと、あそこに夜の王と一緒にユーが居るらしい。  
それでタワーに向かっているのだが……

メエエエ！！

ウツキイイ!!

パオオオオン!!

何時ぞやのゲームセンターの時ぐらい大量にメガロが出てきた。

まるでタワーに行かせない様になっているみたいだ。

「クソツッ！これじゃタワーに行けねえ！」

「飛翔!!」

メガロを殴りつけていた歩が、俺に声をかける。

「飛翔は先に行け！ここは俺に任せろ！」

「この数相手に1人は危険すぎんだろ!?!」

俺はそう言うが、歩はどこからか出てきたハルナからミストルティンを受け取っていた。  
た。

「何言ってるんだ、飛翔。俺……………ゾンビだぜ?」

そう言ってる歩は聞きなれた呪文を唱える。

「ノモブヨ、オシ、ハシタワ、ドケダ、グンミーチャ、デー、リブラ！」

ピンクの衣装に身を包んだ歩はミストルティンを構える。

「早く行けえ！飛翔！」

「そうだぞ！絶対ネクラマンサーを取り返すんだぞ!!」

歩、ハルナ……………

「……………わかった。歩、ハルナ…無事だな」

「おう！」 「当たり前だ!!」

俺はそう言葉を交わしてタワーへと向かった。

「見えた！」

俺は猛スピードで東京タワーへ向かうと、

展望室にユーと夜の王を見つけた。

俺はそのままスピードを落とさずにタワーの窓へと突っ込んだ。  
ガシャーーン!!

激しく窓の割れる音が室内に響き渡る。

俺はそのまま床に降り立ち、夜の王とユーを見る。

「おやおや、これはまた奇抜な登場の仕方だね」

夜の王は呆れ半分、驚き半分で俺のことを見ていた。

「……………」

ユーはどこか納得できないと言っているような顔だった。

俺はそんなユーに話しかける。

「…………ユー、一緒に帰ろう?俺、まだ約束のカレー作ってないんだ」

俺はユーに話しかける。

「そうはいかないよ。既に幕はあがったのだからね」

その言葉と同時に外から爆発音が聞こえる。

俺は咄嗟に窓の外を見る。

小さいが……確かに火の手が上がっていた。

「今頃外では吸血忍者と魔装少女、それとメガロが暴れているだろう。」

ユークリウッド、僕のことを殺したいほど憎いだろう?

その感情のまま僕を殺してくれ」

夜の王はユーに自分を殺してほしいと頼んでいる。

だがユーはそうしようとはしない。

「まだ、駄目なのかい？君にとつて僕は憎いだけの存在じゃないか。

なんで、死なせてくれないんだい？」

「……夜の王、どうしてそこまで死のうとしてるんですか」

「君にはわからないだろうね……確かに『不死』は魅力的だ。

僕も最初は喜んだ。だが、途端に見えてる世界は色あせてしまったんだよ。

なんでもできるってことがどれだけ悲しいか知ったんだ。

それに……僕はやってはいけないこともした」

そう話す夜の王の顔は少し悲しい表情をしていた。

『私は、もう友を殺したくない』

ユーはメモ帳を夜の王に見せる。

「相変わらず優しいんだね、ユークリウッド。

なら……彼を痛めつけければ少しは考え直してくれるかな」

そう言つて夜の王は俺に近づく。

「とにかく……ユーを返して貰うぞ!!」

そうやって俺は「天翼」を夜の王に向けて振る。

しかし黒い霧が出てきたと思ったら、「天翼」を防がれてしまった。

「君は面白い力を持っているね。でも……まだ未完成だ」

夜の王がそうつぶやいたと思ったら、黒い霧が「天翼」を弾き飛ばした。

「500%!!」

「クッ!？」

俺は咄嗟に「天翼」でガードしたが、俺は向かい側の壁まで吹っ飛んだ。

「がはっ!!」

口の中に鉄の味が広がる。

それでも俺は態勢を立て直して夜の王に突っ込む。

が、またしても黒い霧に阻まれてしまう。

「何度やっても同じだよ、500%!!」

「ぐっ!」

今度は何とか受け止める事が出来た。

すかさず「天翼」で攻撃するが、黒い霧の中を身体が移動しているのか全く当たらない。

い。

「700%!!」

「っ!!？」

今度は威力が桁違いの蹴りが俺を襲う。

俺は再び「天翼」でガードするが最初のパンチ同様、威力を殺せずにもまた壁に激突した。

また口の中に鉄の味が広がる。

そんな俺に夜の王が近づく……

「君はその力以外は普通の人間と同じようだね……身体も限界なんじゃないのかい？」

確かに夜の王の言うとおりで。

今までの戦闘では「天翼」でガードしきれていた。

だが、これを上回られると俺の身体への負担がデカイ。

ヘレの時みたいに直接身体に攻撃されなくても、これでダメージを負う。

でも……

「それが、なんだよ!」

俺は再び「天翼」を振るい、攻撃する。

だが夜の王には当たらない。

「ユーがどんな思いで毎日を通りかかっているか……お前ならわかるだろうが!!」

それでも俺は攻撃をやめない。

「ユーの笑顔を……お前は知らないのかよ!!」

夜の王に向かって叫びつつける。

「ユーの優しさが……お前にはわからないのかよ!!」

「っ!!?」

その言葉を聴いた夜の王の動きが一瞬止まった。

今だ!!

「凍てつけ! アブソリュート・ゼロ!!」

俺がそう叫ぶと同時に、室内のほとんどが凍った。

これはゲーセンの帰りにメガロとの戦いで見たのを俺が自分で出来るように特訓したのだ。

もちろん夜の王も腰の少し上まで凍っている。

「こんなことをしても無駄だよ……!!?」

そう夜の王は言ったが、数秒後驚いた表情をする。

「何故だ、何故霧を生み出せない!？」

「簡単だ、霧って言うのは小さな水粒が空中に浮かんでできるんだ。

俺の「天翼」で今この空間は常に冷やされ続けてる。

水粒にならず、氷にまでなるからもうお前の霧は出せない」

「…………ふっ、わかってないね。」

「こんな氷、僕の力を使えば簡単に砕くことが出来るよ?」

「それもわかっている。ただ俺は……貴方を助けたいんだ」

「助ける……?」

俺は俺に出来る真剣な眼で夜の王を見る。

「さつき貴方言いましたよね、やってはいけないこともしたって……」

「本当はその罪滅ぼしをしようとしてるんじゃないんですか?」

「!?…………何を根拠に」

「だって貴方、ユーと居た時……ずっと悲しい顔してたじゃないですか」

「…………」

夜の王は何も言わない。

「京子とか言う女を使って話してきた時も、

ゲームセンターの帰りであった時も、

そして今も…………」

「…………僕はね、ユークリウッドに殺してほしくて彼女の大切な人を殺したんだよ」

夜の王は淡々と話す。

「確かに…………もしかしたら僕の中に罪の意識も有ったかもしれない。」

でもそれがどうしたって言うんだい？

例えそんな気持ちがあつたとしても過去は過去。

この事件を起こしたのも僕だし、ユークリウツドに憎まれる存在であることが変わるわけじゃない。

僕はこのまま死にた——」

「ふざけるなよ!!」

俺はそう言つて夜の王の胸ぐらを掴む。

「確かに今の話ならお前はいけないことをしてる。

でも!これからまだやり直せるだろうが!!お前はただ現実から……ユークリウツドから逃げるだけだ!」

「!!」

「お前今言つたよな?過去は過去だつて。

なら明日は明日だろ!!お前は過去にした過ちをしつかり胸に刻んでるだろ!!

これからそれを償つていけよ!永遠の時間があるならなお更だ!!」

俺がまだ話そうと思つている。

流石に全力で話しすぎた。

思ってたこと吐き出しただけだから正直ちゃんと伝わったかわからないが……  
「……ふっ」

「？」

夜の王はゆっくりと俺の方に顔を向けた。

「君の言うとおりだね、さすがユークリウツドと一緒にいるだけある」

そう言う夜の王の顔は晴れ晴れしていたと思う。

「俺はユークリウツドにたくさん酷い目をあわせてしまったようだ。

今更ですまなかった、ユークリウツド」

ユーは少し離れたところにいたが、こっちに近づいてきた。

夜の王とユーが向かい合う。

「僕は君にひどいことを散々してきた。

さつきまで僕は殺してほしいとまで言った。でも今は、違う。

許してくれとは言わない、ただ……君に罪滅ぼしがしたい」

夜の王は今、ユーに全てをぶつけている。

最初は殺してくれと言っていたのに、今は罪滅ぼしがしたい、と。

それに対するユーの答えは……

『罪滅ぼしなんていい』

そう書かれていた。

夜の王は仕方が無いという表情をしていた。

だがユーはもう一枚メモを見せてきた。

『仲間なんだから』

その瞬間、夜の王の眼から涙が溢れた。

「とりあえず足とか腕とか大丈夫？」

「ああ、問題ないよ」

そう返す夜の王は戦う前に比べて晴れ晴れしていた。

ついでに俺の名前も教えた。君とか言われるのが嫌だったからな。

そう思っていると夜の王が背中を押す。

「ユークリウツドと話をしてやってくれ。」

彼女の痛みは飛翔でしか癒せないだろうからね」

「……わかった」

そう言つて俺はユーの所へ近づく。

「ユー……」

ユーはこちらに顔を向けるとメモを見せてきた。

『私がいなくて平和だったでしよう?』

そんなことが書かれていた。

「平和……だったかもしれない。でも……駄目なんだ、ユーが居ないと駄目なんだよ!」

『でも私は迷惑になるから』

ユーはそれでも引こうとしない。

それでも俺は……

「ユーには俺のところには居てほしいんだ!!」

俺の突然の大きな声にユーも夜の王さえも目を丸くしていた。

俺はユーに向かって歩き出す。

「確かにこれは俺のエゴだよ!ユーのことなんて考えて無いよ!!」

「……………それでも」

俺はユーを抱きしめる。

「側に……………居たいんだよ」

『飛翔……………』

「俺のわがままだつてわかつてる、でも、それでもやっぱり——」

「私も」

「え？」

俺は驚いた……………なぜならユーが“声”に出している。

「私も、飛翔の側に居たい」

「ユー……………」

その声を聴いた途端、俺の目から大量の水粒が溢れる。

「もう……………離さないからな」

『うん』

「やっと見つけた、大切な宝物なんだ」

『うん』

俺はその場に泣き崩れそうなのを耐える。

「……………ここで言うんだ、そう俺は決心した。」

「ユー」

『?』

「俺な、初めて会ったときからユーの事が——」

「全く、役に立たない冥界人だわ〜」

突然の声に俺とユーは声の方に振り向くと…

そこには両腕両足を切り取られ、赤髪の女に頭を踏みつけられている夜の王の姿があった。

## 第20話 黒幕

「全く、役に立たない冥界人だわ」

そこには両腕両足を切り取られ、赤髪の女に頭を踏みつけられている夜の王の姿があった。

俺は驚きの余り声が出なかった。

「夜の王……セブンスアビスの中でも不死と言うアドバンテージを持っていたから頼んだのに……」

まさか丸められるなんて」

そう言う女は何かを持っていた。

眼を凝らしてよく見ると女の手には長剣が握られていた。

「えくくつと………！ありました、ミノリ様!!例の薬です!!」

女は夜の王の服から何かを取り出し叫ぶ。すると後ろからフードを被った謎の人物が出てきた。

「good」

変声期でも使っているのか、機械音が室内に響く。

「さ、早くお飲みに」

「ok」

長剣を持った女がフードを被った人物にさっきの”何か”を渡す。

するとフードを被った人物はそれを一気に口に入れる。

「……………あ、あー」

すると次にフードの人物から出たのは透き通った音。

「ミノリ様!!」

「声が………出せる!!」

そう言った瞬間声を出した本人はフードを脱ぎ捨てた。

そこにいたのは、黒色の髪の女性だった。

「あの忌々しい女王め!!この私から声を奪ったこと………10倍にして返してくれるかん

な!!」

「ですがミノリ様、今はあいつらを排除しませんと…」

「そうだったね、ノイ」

そう言つて2人は俺とユーの方を向く。

「お、お前ら! 夜の王に何したんだ!!」

俺は意を決して話しかける。

「なくに、これは取引だ」

「取…取引?」

俺の問いかけにノイと呼ばれた少女が答える。

「私達と夜の王は取引をしていた。

私達の望みはこちらの世界に居ることをばれないように居場所を提供すること事、も

う1つはこの薬だ」

そう言つてノイは黒髪が持っていたピンを指差す。

「わが主はその力をよく思われたい女王によつて、

呪いで声を奪われた…だが冥界には壊れた器官を治す薬があった。

そして夜の王はこの街を戦いの渦に巻き込み、自分が死ぬことへの貢献…

これが私達の取引だ」

それで俺はゲーセンの帰りで夜の王の言っていたことを思い出す。

「仕方ない、会ってしまったから…

それが取引でもあるからね…」

そう、確かに夜の王は「取引」と言っていた。

「なるほど……メガロが大量に現れれば魔装少女はそれを退治しに来る、

ハルナが言っていた”メガロ駆逐作戦”みたいなのがあれば、

お前達に眼を配る余裕はなくなるって事か」

「そういうことだ」

ここで黒髪も会話に参加してきた。

「アンタの性で少し計画に支障がでちゃったんだけどね」

「俺？」

「最初は膨大な魔力で私の喉を治そうと思ってヘレにそのネクロマンサーを狙わせたんだけど、

アンタに邪魔されちゃったのよね」

そう言つて黒髪はユーを指差す。

「んで二回目私が持ち出したアーティファクトで操つただけど……

あつさり限界きちやつて面白くなかつたわ〜」

そう言つて黒髪は針金を見せてくる。

「お前、ヘレは仲間じゃなかつたのかよ！仲間になんか——」

「仲間あ？あんな弱い奴”捨て駒”に決まつてんだろ？」

黒髪はまるで当然とばかりにヘレの事を捨て駒と言つた。

「それに他の奴も使い物にならない奴ばかりで……まあ、”魔力補充”には使えただね〜」

そう言つて黒髪はイヤリングに眼を向ける。

「これに十分魔力ためることは出来たしく、もう少し戦力が整つたら女王に復讐決行だね〜」

「ならばミノリ様、あの男は私にお任せください。

その後でこちらに来てゐる魔装少女共をそのアーティファクトで操ればよろしいかと……」

「飛翔!!」

声が出た方を向くと、歩とハルナとセラが展望台の中に入つてきた。

「あららく、なんか虫が増えちゃったわね。」

ノイ、貴方はあの三人の相手をしなさい。私があつた男をやるわ。」  
「御意」

そう言つてノイと呼ばれた赤毛は歩たちの方へ向き直る。

黒髪も俺の方を向き、腰の辺りから取り出したを槍を構える。

俺は一步前に入る。

「ユ一、歩達の所へ行つてくれ……早く」

ユ一は少し考える素振りを見せ『氣をつけて』とメモを見せた後、歩足達の所へ行つた。

「さあくと、んじゃ散々私の邪魔してくれた」お礼………たああつぷりしないとね。」

そう言いながらズルズルと持っている槍を引きずりながら近づいてくる。

こんな俺でも分かるほど、恐ろしい殺気を放っている。

「まずいな……夜の王とのダメージがあるのに」

俺はそう思いつつ「天翼」を広げ、いつ攻撃が来てもいいように警戒する。

「そんな軟な羽で私の攻撃を止めれると思つてんの？」

そう言つと黒髪は槍を一振りする。

「がああああ?!?!」

次の瞬間、俺の身体に激痛が走る。

再び口の中が鉄の味でいっぱいになる。

「全くこんな雑魚相手になんで手間取ってたのかな〜」

再び黒髪は俺に向かって歩いてくる。

俺の身体が…いや、本能ともいえるのが逃げろと警告してる。

「い…ま、…なに…を…?」

「私の二つ名ね〜『ヴェリエの破壊魔』だったんだよね」

そう言うのと黒髪は再び槍を振るう。

とにかく俺は「天翼」で前方をガードするが…

ザシュザシュ!!

「なっ!?!」

前方をガードした4枚の「天翼」が切り刻まれたと言えればいいのか、

今までに無いダメージを受け、ボロボロになっていた。

「アイツの攻撃は一体何なんだ!?!」

「どうしてって顔してるね〜」

黒髪は冷たい笑みを浮かべ、槍を肩にかつく。

「私の魔法はどんな周波数でも発生させること。」

音でコップが割れたりするのがあるでしょ？私の魔法はそれを応用して強力に出来るの。

だから……」

黒髪は槍を振り上げ……

「私の攻撃は、ぜんぶ破壊できるの」

下ろす。

グシヤア!!

「ぐああああ!!」

ガードなんでもはや紙切れ同然だった。

さつき攻撃を受けた〔天翼〕4枚がほぼ根元から千切れた。

「アハハ！いいいいいよ、その悲痛な叫び……私、だあくいい好き」

「……う、……がはっ」

もう声を出すのも辛い。

身体中が悲鳴をあげてるのが分かる。

「でも……」

俺は何とか立ち上がる。

「ん、まだ頑張るの〜？もうアンタは普通の人と大差無いよ。」

頼りの羽は2つしか残ってないしね」

「うおおお!!」

俺は残りの「天翼」で攻撃する。

必死に集中して片方はフレア、もう片方はフリーズになっている。

「くらええ!!」

俺は全力で「天翼」を振るう。

「ざ〜んねん、そんなんで私を倒せるわけないでしょ〜」

黒髪が槍を振るう。

たったそれだけで俺の攻撃は壊されてしまった。

さらに黒髪は槍を振りかぶる。

「ついでにおまけ〜♪」

「がっ!!」

俺は槍の柄で腹を突かれて、遙か後方に吹っ飛んだ。

「まじい……意識が、飛びそう、だ」

俺はその場から起き上がれずにいた。

「飛翔!!」

気づけば歩とセラがこちらに走ってきている。

どうやら赤毛の女は倒したようで、さらに後ろにはハルナとユウが来ている。

「はあ、全く。なんでこう使えないのかね、部下って」

そう言つて黒髪は何か呟く。

「ロイニ、ゴカリト、クシナトオ、ハリト!」

黒髪が呟き終わると歩達の足元に魔方陣が現れ、結界が歩達を包んだ。

「クソつ、こんなの……600%!!」

「秘剣、燕返し!!」

歩とセラが攻撃するが、結界はビクともしていない。

それを見ると黒髪が再びこちらを向いた。

「ねく、何でアンタはこんな命捨てる戦いしてんのさ」

黒髪が呆れたように俺に聞いてきた。

「アンタあいつ等みたいに強いわけじゃないでしょ？」

どうしてそこまでしてんのよ」

黒髪が指差した方には今も結界に攻撃している歩達の姿があった。

俺は何とか声を絞り出す。

「確か、に……俺は、

歩みたいに、不死じゃ、無いし……

セラみたいに、何かに、秀でてるわけでも、無い……

ハルナみたいに、自分に、自信持てないし……

ユーみたいに、大きな優しさなんて持てない……」

俺は足に力を入れて壁を支えに何とか立ち、続ける。

「でもな……」

たった一人の……好きな女の子を守る為に、命捨てる覚悟くらいは持つてんだよお!!!」

俺は黒髪に殴りかかる。

それを黒髪は槍を振るって俺を再び吹っ飛ばした。

「くっただらねえな、誰だって自分が一番だろ？」

それを他人の為に死ぬとか、マジ笑えるわ〜」  
そう言つて黒髪は俺の倒れている位置まで来た。  
そして槍を逆手持ちにした。

「さてと、なんか興が冷めちやつたから殺すわ」  
そのまま槍は振り上げられ……

「バイバイ」

ブシャアアア!!

## 第21話 終焉

ブシャアアア!!

辺りの床が真っ赤に染まる。

黒髪の槍の刃の部分も床と同じく赤く染まっている。

「あくあ、何で邪魔するかな〜……………」

夜の王」

そこには腕から血を流した夜の王がいた。

「よ、るの……おう？」

「あの赤毛の子が掛けた魔法が解けてなかったら、間に合わなかったよ」  
そう言つて、夜の王は黒髪と向かい合う。

「つたく……死なない奴なんてどうすりや良いんだろ？」

「それは僕が知りたかつたことだよ。破壊魔ミノリ」

「その2つ名で呼ばれるのは久しぶりだね」

そう言いながらミノリは槍を振るう。

夜の王は目の前に黒い霧を出して攻撃を防ごうとするが…

「ばくかあ」

「！」

黒い霧は吹き飛ばされ、夜の王の左腕が吹き飛んだ。

「がっ!？」

「馬鹿は君の方かな」

だが次の瞬間ミノリは後ろへ吹っ飛んだ。

「僕の力をなめてもらつては困るな」

夜の王は黒い霧をミノリの近くにも出しており、攻撃されなかった右腕を瞬間移動させて殴りつけたらしい。

「へえ、意外にやるんだ。」

「こつちも一度全力出しておこうかな」

ミノリは槍を構える。

「私がなんで声を取り戻したかったか……わかる？」

「1つは私の力を完全に復活させるため。」

私の場合、声が出せないと魔法の威力が半減しちゃうのよね。」

それともう1つは……魔装少女になるためなんだよ」

「！」

「ノモブヨ、オシ、ハシタワ、ドケダ、グンミーチャ、デー、リブラー！」

呪文を唱えた瞬間、ミノリの服装は赤を基本としたドレスへと変化した。

「まあ、これでもうあんた等に勝ち目はないよ。」

そう言った瞬間ミノリが消えた。

次にミノリの姿を見た時は、既に槍を夜の王に刺していた。

「ぐっ！速い!?!」

「まだまだだ、こつちからだよ？」

ワン・ハンドレット・ブレイク!!」

キイイイイン!!

瞬間、甲高い音と共に夜の王の身体が砕け散った。

「夜の王!」

「くっ…」

夜の王は黒い霧を出して、自分の身体を治し始めた……が、

「させないよ」

ミノリは夜の王の治している部分を魔法で氷付けにした。

「可愛い顔して酷い事するね」

「アンタを殺すことが出来ない以上、そこで大人しくしてて貰うよ」

そう言ってミノリは俺の方へ歩き出す。

「多少邪魔が入ったけど……これで終わりね」

再び槍を俺に向けて振り下ろしてきた。

「ぐっ!?!」

俺は何とかそれを転がって避ける。

「あゝあゝ、全く……手間掛けさせないでよね」

ミノリは不機嫌そうに俺の方に近づいてくる。

俺は立とうと身体に力を入れるが、

さつき避けたので身体がさらに悲鳴をあげたのだ……正直立つのも難しい。

「さて、アンタを殺した後は残りも掃除しないとね〜」

「!」

ミノリは俺の後方にある、今も結界に閉じ込められているユー達を見ながらそう言った。

「させ……な……い」

「は?」

俺はその場に立ち上がる。

「お前に……俺の、なかま……に、てだしは……させ、ねえ……」

「アンタ何度そんな事言えば気が済むのよ、私の攻撃でもう立つことすら精一杯のくせに。」

マジでウザクなってきたわ……いいわ、これでせ〜くんぶつ壊してやるからさあ!!!」

ミノリは呪文を唱えだす。

それに呼応してミノリの周りに大量の魔力が溢れる。

「セエカト、ヘムヲ、キテガワ、ヨラカ、チルス……」

俺は何とか立つことができたが、「天翼」も無い俺にアイツの攻撃を止める手段は無

い。

「たとえそうでも……」

俺は結界の前に立つ。

「最後まで皆を……ユーを守る!!」

「……イカハヲ、テベス!!!」

ミノリの槍から魔力光線が放たれた。

「飛翔あ!!」

「羽の人お!」

歩達が叫ぶ。

「飛翔ああああ!!!」

ユーも声を出してゐる。

「悪い、皆……」

俺は光に包まれた。

ミノリが放った魔力光線は周りにあつたものを破壊した。壁や天井は吹き飛び、展望室は無残な姿になった。

……ただ一人を除いて。

「なんだ、アレは!？」

魔力光線を放った本人のミノリにも訳がわからなかった。

全てを破壊したと思ったら、さつきまであの男が立っていた所が黒い物に包まれている。

おかげで黒い部分の後ろ……ユー達は無傷でいた。

「間に合つたみたい……だね」

ミノリが声が出した方を振り向くと、そこには苦しそうにしている夜の王が居た。

「夜の王……アンタの仕業か？」

「そうだ。飛翔の力は未完成だった、

それを僕の黒い霧の力を全て注ぎ込んで完成に近づけた。それだけの事さ」

「てめえ!!」

ミノリは夜の王に向かって槍を振り下ろそうとするが、それと同時に後ろから大きな音。

「!?」

慌ててミノリが振り向くと、

そこには漆黒の翼を6枚持つきさっきの男が立っていた。

俺の身体が光に包まれた瞬間、目の前が真っ暗になった。

次の瞬間、俺の身体の中に何かドンドン入ってきた。

「汝は何を望む」

「のぞ…み？」

〔そうだ。汝の望みはなんだ〕

〔俺の望みは、たった一つだ。〕

皆を……俺の大好きなユーを守る力がほしい〕

〔その願い、叶えられる。しかしその望みはお前を殺すかも知れん〕

〔構いません。俺、覚悟だけがありますから…〕

〔いいだろう。我が漆黒の力、存分に使うがいい〕

視界が開ける。

「これ、は？」

俺は自分の姿を確認する。

千切れたはずの「天翼」が元に戻っていた。

それも真つ黒……漆黒と言うのがピッタリな色に変わって。

「ふ、アハハ！なくんた、

どうなるのかと思えばただ色違いの羽が生えただけじゃねーかよ!!」

そう言つてミノリは槍を振りかぶる。

「とにかくこれで……終わりだあ！」

そのまま勢いよく槍を振るつた。

俺は咄嗟に色が変わった「天翼」でガードした。

「しまったー！このままじゃまた千切れて…」

ガキイイイン！！

「なっ!?」

声を上げたのは俺。

なぜならさつきはこの攻撃で純白の「天翼」はズタズタにされたのだ。

だが……

「傷ついて、ない?」

「な、なんだと!? 一体どういうことだあ!!?」

ミノリも口調が壊れた驚きの声を上げた。

この漆黒の「天翼」には切り傷1つ付いていなかった。

「これなら……いける!!」

俺は漆黒の「天翼」……「黒翼」を広げる。

「ちい!? 調子に乗るんじゃねえよ!!」

ブオンツ、ブオンツ、ブオンツ!

ミノリは槍を眼にも止まらぬ速さで振るう。

ガキン! ガキン!

さつきまでの「天翼」は2発で粉々だったのに、今の「黒翼」は5発受けても無傷だ。

そのまま俺は「黒翼」を振るい、ミノリに攻撃する。  
ガキイイン!!

俺の「黒翼」とミノリの槍が交差する。

「くっそがあ! なんなんだよお前はよお!! 私の邪魔しやがってよお!!」

ガキイ、ガキイ!

「黒翼」と槍が凄まじい勢いで打ち合う。

「私は、全てを壊すんだ!! 敵も、味方も……私の立ちふさがる者全てをぶっ壊すんだよ!!!」

ミノリの攻撃は激しさを増す。

それでも……

「お前がどんなに壊そうとしようが……俺は、大切な人を守るんだ!!」

俺は空中に飛び、「黒翼」を目一杯広げる。

「ダークネス・スピア!!」

言葉と共に6枚の「黒翼」から赤黒い光線を放つ。

その光線がミノリを襲う。

「そんな物、私の攻撃でえ!!」

ミノリも槍を振るい、同じ数の光線を出す。

バキユン、バキユン!!

互いの技が衝突しあう。

「ぐう!?!」

それでも俺の光線の方が威力が強く、ミノリの身体に光線がかする。

傷口を押さえつつ、ミノリは槍を構える。

「私は負けるわけにはいかねえんだよおおお!!!」

ミノリは耳に付けていたイヤリングを握り、壊した。

瞬間ミノリの周りに赤いオーラが纏う。

「イヤリングに溜めてた魔力全部使って、私の最大級の魔法でぶっ壊してやる!!!」

ミノリは槍の先端を俺に定める。

「それとも避けるかあ? 避ければ魔法の反動でこの町くらい簡単に消し飛ばぜえ!!!」

ミノリは俺が避けられないように言ってくる。

「俺は、守ると決めたんだ……だから、俺は避けない」

俺は今までに無いくらい目一杯「黒翼」を広げる。

「くたばれええええええええええ!!!」

「スカーレット・クラツシャあああああ!!!」

真っ赤な光線が俺に向かって放たれる。

「俺は……守り抜くんだあああああ!!!」

「ブラック・デス・インパクトおとおお!!!」

漆黒の光線がそれに向かって放たれる。

ドガアアアアア!!!

互いの技がぶつかり合う。

「おとおおおおおおおおお!!!」

2人とも一歩も引かない。

だが少しづつだが黒い光線が赤い光線を押している。

「く、そう……私は負けるわけにはあ!!」

「俺だって、負けるわけにはいかねえエエ!!」

瞬間、赤い光線が消し飛ぶ。

「私は全てを壊すんだあああああ!!!」

黒い光線はミノリを飲み込んだ。

「勝った……のか？」

俺はそのまま展望室に降り立つ。

そこには仰向けで倒れているミノリの姿があつた。

「やったんだな、俺……」

「飛翔！」

「羽の人!!」

見るとユーを先頭に歩達が俺の方に走ってくる。

夜の王も一緒のようだ。

「みんな、だい……じょ……う……」

俺はみんなの所へ行くこうとしたが、そのまま床に倒れこんだ。

「やっべ、身体……うごか……な……」

そのまま俺は意識を失った。

私達の周りに有った結界は、飛翔があゝの魔装少女を倒したおかげで消えた。すぐに私は飛翔の側に行こうとした。でも飛翔がこつちを見たと思つたら、そのまま倒れてしまった。

私はすぐにでも飛翔に近づこうとした。

「ユークリウツド、近づいては駄目だ」

でもそれを夜の王が止める。

『なんで!』

「今、彼の身体には大きすぎる力が掛かってとても不安定になってる。

そこに膨大な魔力を持ったユークリウッドが近づいたら暴走する恐れがある」

そう言つて夜の王が飛翔に近づく。

「僕が責任を持つて助ける。彼が受け入れたとはいえ、元々こうなつた原因は僕にある。

だから……僕に任せてほしい」

夜の王は私のほうを向いて力強くそう言つた。

「夜の王、アンタは一体……」

「僕はユークリウッドを悲しませてしまった。

それなのに彼女は僕の事をまだ仲間だと言つてくれた。

僕はその言葉に報いたいんだ」

『飛翔は助かるの?』

「必ず助けてみせるよ、ユークリウッド」

夜の王はそう言つてくれた。

『……わかつた。飛翔を、お願い』

夜の王は頷いた後、飛翔を担いで何処かへ向かつていった。

『「飛翔、絶対生きて帰ってきてきて……」』

## 第22話 それぞれの思い

飛翔が居なくなってから一週間が経った。

騒ぎを起こした魔装少女はハルナの担任の先生が来て連れて行った。

アレから夜の王から何も連絡が無い。

『〔飛翔……〕』

「ユー」

声がしたので振り向くと、歩が料理を持っていた。

「ご飯にしよう」

『いらない』

そう言つて立ち上がる。

『散歩してくる』

私は玄関に向かった。

「ユ一、やっぱり飛翔の事が……」

「この一週間、ご飯もほとんど口にしていません。

それほど飛翔の事が心配なんですよう」

「何やってんだよ飛翔……早く帰って来いよ」

俺は奥歯をかみ締めた。

ピン、ポーン！

私は外に出てから何処かに向かうわけでもなく、ただただ歩いた。  
ふと立ち止まるとそこはよく知ってる場所だった。

『……………ここは』

そう、飛翔と始めて会ったあの公園だった。

『あの日は雨が降ってて、飛翔が暖めてくれたんだよね……………』

私はいつも飛翔と話していたベンチに座る。

『いつも、私に笑顔で話しかけてきてくれて……………』

いつの間にか、私は涙を流していた。

『大怪我してたのに、私を助けに来てくれて……………』

その涙は溢れて止まらない。

籠手にも涙が零れる。

『「飛翔……つば、さあ……」』

「ユー……」

不意に私を呼ぶ声。

それはいつも側で聞いていた声で……

私は恐る恐る声かした方を振り向く。

「遅くなってごめん。……ただいま」

そこには6枚の純白の翼を持った……私の好きな人がいた。

俺が意識を取り戻すと、そこは知らない天井だった。

「気が付いたみたいだね」

声が出たのでそつちを見ると、夜の王が居た。

「夜の王？此処は一体……」

「ここは冥界だよ。とりあえず順を追って説明しよう」

俺は夜の王から気絶した後の事を一通り聞いた。

ユー達が無事であった事、俺が瀕死の重体だった事、それで一週間も眠っていた事、そして…

「右目を？」

「君の身体は強くは無い、ただの人間とそう大差無いからね。」

君が望んだこととはいえ、僕には責任がある」

右目の改造だ。

夜の王も言ったとおり、俺の身体は強くない。

だから右目を改造して、「黒翼」に耐えられるようにしたらしい。

それでも俺の身体自体弱いから、時間にして30分が限界との事。

それと「黒翼」発動中は目が深紅に染まる。

「いろいろな迷惑掛けたみたいで、ありがと」

「さて、君は行かないといけないだろ？」

夜の王は部屋のドアを開ける。

「ここを出て真っ直ぐ行けば門がある。そこをくぐればあっちの世界へ行ける」

「ホント……ありがとな」

俺はそう言って「天翼」を広げる。

もしかしたらと思ったら、案の定「天翼」は治っていた。

俺はそのまま空中に上昇し、全速力で門に向かった。

俺は夜の王に言われた門を通った瞬間、光に包まれた。

次に視界が開けるとそこは……

「こ、えん？」

そう、公園だ。

ユーと最初に会った公園。俺にとっては忘れられない場所だ。まさか此処に出てくるとは思わなかった。

それに……

「ユー……」

いつもユーと話していたベンチにユーが座っていた。

ユーは俺の声に反応してこっちを見る。

泣いていたのか、目が赤くなっていた。

「遅くなつてごめん。……ただいま」

俺がそう言つた途端、ユーが俺に抱きついてきた。

『遅すぎる』

「悪かつたよ」

俺はユーを抱きしめ返す。

『空腹』

「まだ約束のカレー作つてないもんな。……明日作るよ」

『今食べたい』

「え？今から作つたら時間掛かるよ？おなかすいてるんじゃないの？」

『飛翔のカレーが食べられるんなら待つてる』

「……そつか。んじゃ帰つたら大急ぎで作らないとな」

他愛も無い会話。

俺はそんな当たり前のことがすごく嬉しかった。

『飛翔、少し痛い』

「え？あーご、ごめん！ユーー！」

俺はそう言つて離れようとしたらユーに袖を引っ張られた。

『離れないで』

「ユー?」

『よかった』

ユーの顔を見ると、また涙を流していた。

『飛翔が生きてて、本当によかった』

文字の最後の方は涙で滲んでいていた。

「ユー……俺、ユーに言いたいことがあるんだ」

俺はそう言つてユーの顔を見る。

俺の本心を、ユーに伝えるために……

「俺は……ユーの事が好きだ。

ユーの笑顔も、優しいところも全部。だから、俺と付き合つてくれないか」

前世でも告白したこの無い俺だから、正真正銘の初告白。

暫くするとユーがこつちを向く。

「私も……飛翔のことが好き」

「ユー、声を……」

展望室でも聞いた、透き通るような声。

ユーは声に出している。

「この気持ちは、私の声で伝えたかったから……」

そう言ったユ一の顔は朱色に染まっていた。

そのまま俺達は顔を近づけて行き、唇を重ねた。

少しして唇を離す。

本当は数秒のほずなのに、俺にとっては長く感じられたキス。

「／／／／／／／／」

恥ずかしがるのは仕方ないと思う。

「じゃ、じゃあ帰ろうか？」

『うん』

そう言った瞬間、後ろから物音がした。

慌てて振り返ると、そこに居たのは歩とセラとハルナ。ついでに夜の王も居る。

「い、いや、飛翔！俺達は別に覗いてたわけじゃ!?!」

「先に出たのに僕の方が早く家に着いたからどうしたのかと思えば、

お楽しみ中だったのか。これは悪いことをしたね」

「羽の人！帰ってきて早々何やってんだよ!!」

「……………飛翔、帰ったのですね」

四者四様の意見。

まあ、ここで俺がとる行動は1つだ。

「てめえら……………覚悟は出来てるよなあ!!」

そう言つて俺は〔黒翼〕を広げる。

「ちよ、飛翔!!それは洒落にならないつて!!?」

「うるせえ!!!せつかくのユーとのムードぶち壊しやがつて!!ゆるさねえ!!」

「「逃げるが勝ちだ!!!」」

4人は一斉に逃げ出す。

「逃がすかアアアア!!!」

俺は〔黒翼〕を広げ歩達を追う。

追いかけている時、こんな日常もいいなと思つた。

これはゾンビですか？～純白の翼は飛翔する～

第一章 完